

7.2002 No.964

Architecture and Society

建築と社会

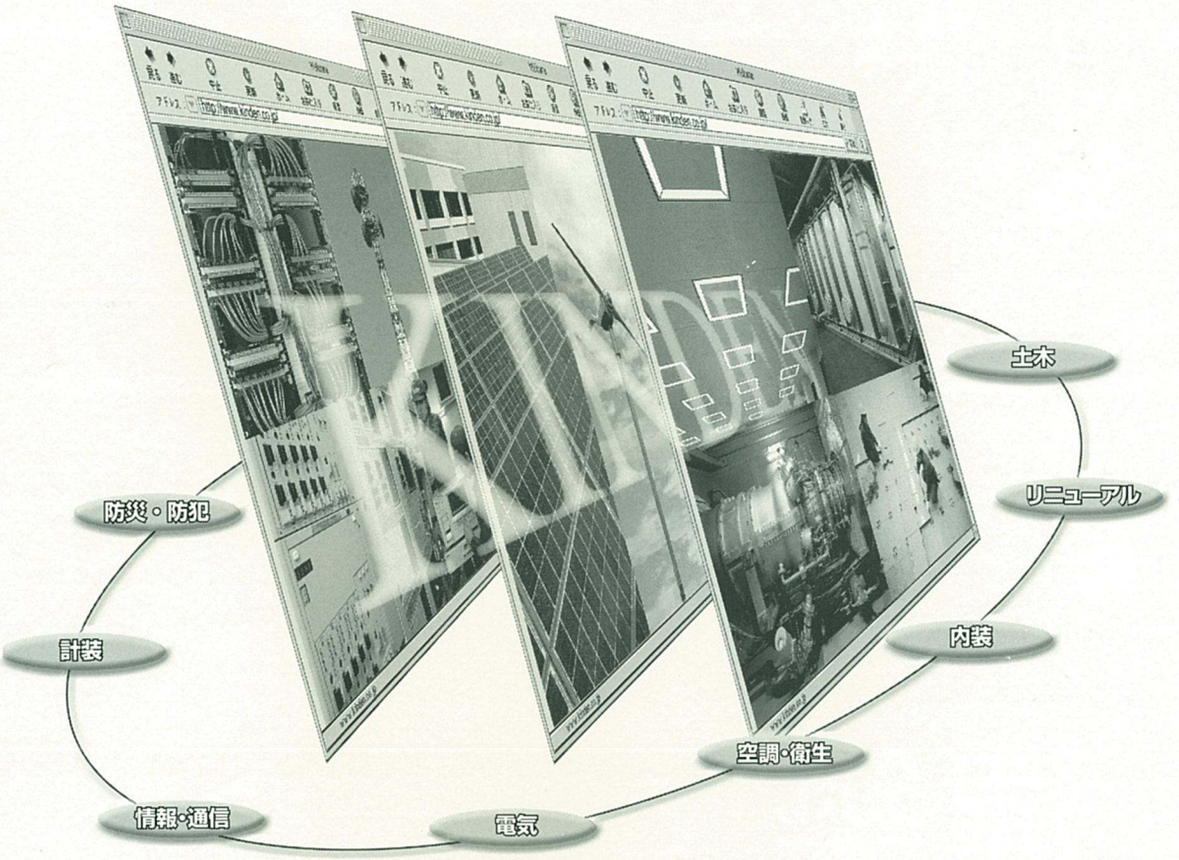
特集●いま、インテリアデザインは
— 次世代のインテリアデザイナーの職能に向かって —
●湊町リバープレイス

日本建築協会

Technology Domain

情報 エネルギー 環境

Kinden CORPORATION



きんでんの総合テクノロジーにまずアクセスを!

もっと情報化を・・・快適な環境を・・・エコロジーに配慮した省エネを・・・。こんなときは、迷わずアクセス。

<きんでん>の総合テクノロジーが、最適のエンジニアリングソリューションをご提供いたします。ファシリティのトータル・パートナーとして、地球環境を考え設備やネットワーク構築、メンテナンス・リニューアルまで幅広い領域でお客さまのニーズにお応えする<きんでん>。そこには、情報・エネルギー・環境のフィールドでこれまで培ってきたノウハウが結集されています。

本店 大阪市北区本庄東2丁目3番41号 TEL.06-6375-6000
東京本社 東京都品川区東五反田5丁目25番12号 TEL.03-3447-3151
http://www.kinden.co.jp/

きんでん

総会議決のお知らせ

── 平成13年度事業報告(p2)
── 平成13年度決算報告(p3)
── 役員の改選

平成14年６月19日開催の平成14年度第１回通常総会において、平成13年度事業報告、平成13年度収支決算報告が原案どおり承認されるとともに、役員が改選されましたので報告します。

社団法人 日本建築協会

役員の改選

＊６月19日付で退任した理事

奥村正太郎／㈱奥村組
内田直樹／神戸大学
恩庄二郎／大阪化工㈱
小林四郎／住友電設㈱
小島　雄／鹿島建設㈱
芝野博文／大阪ガス㈱
白水秀俊／㈱フジタ
遠松展弘／㈱日建設計
仁井　正／大晃設備㈱
松原徹雄／大阪府建築都市部
宮田照久／㈱昭和設計
山田　修／修建築事務所

＊６月19日付で就任した理事

上原正行／神戸大学
奥村太加典／㈱奥村組
阪倉嘉一／大阪府建築都市部
設楽貞樹／㈱安井建築設計事務所
相馬一男／住友電設㈱
立野純三／㈱ユニオン
中井　進／㈱日建設計
中谷　秀敏／大阪ガス㈱
中川正美／㈱フジタ
古原直人／毎日工業㈱
堀田修二／鹿島建設㈱

役付役員の選任等のお知らせ

平成14年６月19日開催の平成14年度第１回臨時理事会において、役付役員並びに理事の会務分掌が、Ｐ５の別表のとおり決まりましたので報告します。

社団法人 日本建築協会

(仮称)DT計画見学会

(再掲)



当計画はJR大阪駅の正面、大阪駅前地区（通称：ダイヤモンド地区）の中央に位置し、同地区で最後に完成する。これにより大阪駅前地区は1926年に再開発事業が構想されて以来77年を経て完成することになる。

外観は大阪駅に正対したスレンダーな形態にまとめ、それにより生み出された空地は敷地面積の55%に達する。この空地は地下２階のディアモールからグランドレベルにまたがる３層の構成となっており、各私鉄のターミナルから地下街を経て接続する立体的でアクティヴな歩行者ネットワークを形成すると共に、都市の中では貴重なゆとりの場を提供する。

外観はガラスカーテンウォールによる透明感あるデザインで、Low-Eガラス、エアバリア空調システム、氷蓄熱空調システム、躯体蓄熱システム等の採用によりビル内環境の向上と、省エネによる環境への配慮をしている。今後予想される強い地震対策として、ハイブリッド免震システムによる中間階免震構造を採用している。リニアスライダー、鉛プラグ入り積層ゴム、多機能ダンパーで構成する新しい免震システムで、地上18mの人工台地上に配置している。屋上に設置したTMDと共に地震や強風時の人、建物はもちろん内部の家具や設備機器等の物的被害が少ない安全性の高い建物になっている。

用途は地上階が貸事務所、地階が店舗と駐車場で、オフィス専用エントランスを１階のビルエントランスとは別に３階に設け、その階でエスカレーター、エレベーターの縦動線を乗り継ぐことで、高いセキュリティーレベルを達成している。

このように、免震システム等による高い安全性、快適な執務空間、環境への配慮、豊かなパブリックスペースなどにより、「優しさ・信頼性・先進性」を追求した新しい時代に対応する建物が当計画の狙いである。

●建築概要

所在地	大阪市北区梅田1-10
発注者	竹中リアルティ
設計	竹中工務店
監理	竹中工務店
施工	竹中工務店
敷地面積	3,609.27㎡
建築面積	1,613.80㎡
延床面積	47,613.18㎡
構造規模	S･SRC･RC、B3F･27F･P2
工期	2000年11月1日～2003年1月

日　時　2002年7月17日(水)
13:30―15:30
講　師　松岡真次／竹中工務店ＤＴ計画総括作業所長
木村　薫／竹中工務店設計部設計担当副部長
田中利幸／竹中工務店設計部構造担当副部長
集　合　現地／JR「大阪駅」南前
＊大阪市北区梅田1-10
定　員　80人
＊申込者多数の場合は抽選
参加費　会員500円、一般1,000円＊税込
申　込　７月10日(水)までに、ハガキ、FAX、電話でお申込み下さい。
①催し名：DT計画見学会
②氏名
③個人会員・団体会員・一般の別
④職場･学校名
⑤参加証郵送先
⑥連絡先電話番号
をお知らせ願います。
＊参加証を7月11日(木)に発送します。
申込先　(社)日本建築協会事業課
大阪市北区梅田1-1-3-2100
TEL.06-6348-0633
FAX.06-6348-0634
〒530-0001
主　催　(社)日本建築協会
事業委員会見学会小委員会
担当主査　坂田雄二／竹中工務店

平成13年度事業報告書

平成13年4月1日～平成14年3月31日

1.総　　会

(1) 第1回通常総会　平成13年6月20日
議事　①平成12年度事業報告承認の件
②平成12年度決算報告承認の件
③役員の選任の件
(2) 第2回通常総会　平成14年3月27日
議事　①平成14年度事業計画案承認の件
②平成14年度収支予算案承認の件
③名誉会長・名誉顧問・名誉正会員推挙の件

2.評　議　員　会

(1) 第1回定時評議員会　平成13年6月5日
議事　①議長、副議長互選の件
②理事・監事候補の選任の件

3.役　員　会　等

(1)	正副会長会議	3回
(2)	通常理事会	2回
(3)	臨時理事会	1回
(4)	常任理事会	3回
(5)	会勢担当理事会	2回
(6)	編集担当理事会	1回

4.常設委員会等

(1)	編集委員会	委員会 12回	小委員会等	85回
(2)	事業委員会	7回		32回
(3)	教育委員会	1回		6回
(4)	出版委員会	11回		8回
(5)	建材委員会	7回		

5.特別委員会等

(1)	21世紀の協会検討委員会	6回
(2)	青年技術者選考委員会	2回
(3)	工高生デザインコンクール審査委員会	1回
(4)	「建築と社会賞」審査委員会	1回
(5)	IT委員会	1回

6.建築と社会・特集号

4月号　IT社会におけるきずな
5月号　自然素材をめぐる「もの・わざ・ひと」
6月号　成熟社会をささえるまちづくり―法令・制度・プランを活かして―
7月号　現代の日本の空間、文化を探る―見える和風、潜む和風―
8月号　環境―近未来に向けて今できること―／大建設計―作品特集―1966～2001―
9月号　建築の力、都市の力―建築、都市の再生・転生・創生―
10月号　緊張／都市基盤整備公団関西支社
11月号　私の空間作法―会員作品―
12月号　第48回青年技術者／NHK大阪放送会館・大阪歴史博物館
1月号　国土交通省近畿地方整備局営繕部
2月号　再生・リサイクル―循環型社会をめざして―
3月号　東海支部会員作品2002／愛知・名古屋―21世紀・大都市の再生と活性化の動き―

7.出　　版

＜プロのノウハウ＞シリーズ等
『新版・都市計画法を読みこなすコツ』高木任之著
『新・建築基準法を読みこなすコツ』高木任之著
『建築工事の祭式―地鎮祭から竣工式まで』
「建築工事の祭式」編集委員会編著

8.見　　学　　会

やまと郡山城ホール見学会
5月14日　参加者　26名
まちなみ見学会⑤―京都・西陣の町家―
5月19日　参加者　39名
茶室講演会（第1回）
5月28日　参加者　92名
茶室見学会⑯―妙喜庵の待庵―
6月9日　参加者　35名
兵庫大学健康科学部見学会
8月4日　参加者　46名
奈良県立万葉文化館見学会
9月29日　参加者　16名
岸和田市立浪切ホール見学会
10月5日　参加者　35名
兵庫県立新美術館「芸術の館」見学会
11月15日　参加者　65名
まちなみ見学会⑥―滋賀・五個荘町―
11月17日　参加者　21名
茶室見学会⑰―表千家不審菴―
3月9日　参加者　54名
湊町リバープレイス見学会
3月25日　参加者　42名

9.情報・研修会

これからの建築と社会①／ヨーロッパの団地再生
4月20日　於　協会サロン　参加者　58名
講師：富安秀雄／市浦都市開発建築コンサルタンツ
これからの建築と社会②／ユニバーサル・スタジオ・ジャパンの事業戦略
6月19日　於　協会サロン　参加者　24名
講師：城江利彦／ユー・エス・ジェイ取締役建設本部長
設計者のための写真術パートⅣ
10月23日　於　協会サロン　参加者　23名
講師：吉村行雄／一級建築士、建築写真家
話題建築を聞く㉜NHK大阪新放送会館・大阪歴史博物館
11月21日　於　協会サロン　参加者　28名
講師：種村俊昭／日本設計プロジェクト部長

10.若い会員の集い

●文化遺産としてのモダニズム建築関西展関連企画
藤井厚二「聴竹居」見学会
9月15日　参加者　46名
解説：高橋　功／聴竹居住人（借主）
野田隆史／竹中工務店
●文化遺産としてのモダニズム建築関西展関連企画
関西のモダニズム建築を語る
9月17日　於　大阪ガスビル3階ホール
参加者　257名
講師：石田潤一郎・東　孝光（ゲスト）
佐野吉彦（コーディネーター）
●文化遺産としてのモダニズム建築関西展関連企画
吉阪隆正「浦邸」見学会
9月22日　参加者　20名
案内：浦太郎・美輪子夫妻　説明：齋藤祐子／SITE代表
対談：花田佳明＋三澤文子「つながるということ―渦森台ハウスの共同設計で見えたもの」
10月19日　於　協会サロン　参加者　19名
講演会：後藤祐介「私の震災復興まちづくり検証」
10月26日　於　協会サロン　参加者　4名

11.建築工事実務講習会

東海支部主催「施工計画、仮設見積、積算業務」
10月5日　9:30―17:00　於　昭和ビル
講師：施工計画　細田泰彦／清水建設名古屋支店
仮設見積　鏡　博文／大林組名古屋支店
積算業務　佐野洋治／竹中工務店名古屋支店
受講者　51名
大阪開催「施工計画」
3月13日　9:00―17:00　於　大阪府建築健保会館
講師：仮設・地下工事　関川詞之／大成建設関西支店
上部工事・工程　佐貫　久／神戸大学大学院
受講者　63名
大阪開催「仮設見積、積算業務」
3月20日　9:00―17:00　於　大阪府建築健保会館
講師：仮設見積　金澤　稔／大林組本店
積算業務　高熊　満／竹中工務店大阪本店
受講者　73名

12.コ　ン　ク　ー　ル

第47回工高生デザインコンクール
設計課題：「ライブハウス」
応募学校数：30校　応募作品数：123点
審査会：10月13日
表彰式：11月10日
審査委員長：吉羽逸郎／アイ・エフ建築設計研究所
入選作：10点（うち最優秀1点、優秀2点）

13.表　彰　状　授　与

全国の工業高等専門学校、高等学校、専修学校などの建築科の優秀卒業生に対し、学校の推薦により、本会会長の表彰状を授与。13年度は237校を対象に246名を表彰した。

14.後援・協賛等の承認

- 第21回大阪都市景観建築賞（大阪まちなみ賞）に対する協賛
- 「Eソリューション&蓄熱フェア2001」に対する協賛
- 「あすなろ夢建築」第11回大阪府公共建築設計コンクールに対する後援
- 「免震構造設計指針」改定講習会に対する後援
- 「A/E/C　SYSTEMS JAPAN 2001」国際セミナー開催に対する協賛
- 第25回人間―生活環境系シンポジウム開催に対する協賛
- 「日本住宅性能表示基準及び評価方法基準」講習会開催に対する協賛
- ジャパンストーンフェア・インターナショナル2001に対する協賛
- 街の色研究会・京都シンポジュウム2001「京都の景観色彩を考える―伝統と現代―」開催に伴う協賛
- Archi-space 2002 建築100人×100冊展開催に伴う後援
- 「鋼構造接合部設計指針」講習会開催に伴う後援
- 「Japan Home Show2001」に対する協賛
- 「建築・建材展2002」に対する協賛
- 「建築基準法改正後の実務設計がどう変わったか。その実例と解説」シンポジウムに対する協賛
- 平成14年度1級・2級建築施工管理技術検定試験受験準備講習会に伴う共催
- 阪急歴史街道フィールドセミナー「モダン建築再見―京都・大阪・神戸・奈良」開催に伴う後援
- 「ATC関西学生卒業作品展Vol.7」開催に対する後援
- 「トータルソリューション&蓄熱フェア2002」に対する協賛
- 「林雅子展」後援

15.青年技術者の顕彰

昭和29年から本顕彰を実施しているが、第48回は応募者38名のうち20名を顕彰した。この20名の顕彰者を加え、顕彰者数は774名に達した。

16.読者と選ぶ「建築と社会賞」の顕彰

平成12年度から本顕彰を実施しているが、第2回の13年度は作品3点、論考1点、特集2点の計6点を顕彰した。13年度の顕彰を加え、顕彰は12点に達した。

17.図　書　の　閲　覧

昭和63年度から本会所蔵の貴重な図書および資料を会員等に公開しているが、その的確な管理につとめながら閲覧に供した。13年度閲覧者は29名であった。

18.合同忘年懇親会等

建築関係団体合同忘年懇親会
13年度は本会が当番会として下記のとおり開催した。
12月14日　18:00～19:30　於　太閤園
出席者　279名
建築関係団体合同新年交礼会
13年度は㈳大阪電業協会が当番会となり、下記のとおり開催された。
1月4日　14:30～15:30　於　マイドーム大阪
出席者　708名

19.本会が入会している団体

大阪商工会議所
大阪市街地再開発促進協議会
大阪市防火管理協会
民間（旧四会）連合協定工事請負契約約款委員会
大阪市北区納税協会

20.役員を送っている団体

大阪商工会議所	2号議員
大阪市街地再開発促進協議会	理事
日本建築総合試験所	理事
大阪建築防災センター	理事
大阪住宅センター	理事

21.建　築　ク　ラ　ブ

会員の有志で組織する「建築クラブ」は毎月1回大阪全日空ホテルにおいて朝食会ならびに講演会を開催した。また、1月には新年懇親会を開催した。

平成13年度決算報告書

収支計算書

平成13年４月１日～平成14年３月31日

（単位：円）

Ⅰ．収入の部			
科目	予算額	決算額	差引過不足額
1　会費収入	77,900,000	76,424,070	1,475,930
個人正会員	28,532,000	26,929,600	1,602,400
地方会員	1,775,000	1,959,450	△ 184,450
団体正会員	47,533,000	47,485,320	47,680
準会員	60,000	49,700	10,300
2　事業収入	65,700,000	58,484,608	7,215,392
会誌収入	52,000,000	45,917,845	6,082,155
契約約款収入	2,400,000	2,789,750	△ 389,750
会員名簿発行収入	6,000,000	5,069,340	930,660
出版委員会収入	1,000,000	922,495	77,505
事業委員会収入	1,300,000	1,057,428	242,572
教育委員会収入	2,000,000	1,746,587	253,413
建材委員会収入	0	0	0
記念事業取崩収入	0	0	0
雑収入	1,000,000	981,163	18,837
3　雑収入	320,000	377,486	△ 57,486
4　退職給与積立金取崩収入	6,440,000	0	6,440,000
5　前払費用収入	0	42,147	△ 42,147
6　仮払金収入	0	266,169	△ 266,169
7　仮受金収入	0	29,010	△ 29,010
当期収入合計（A）	150,360,000	135,623,490	14,736,510
前期繰越収支差額	0	3,986,635	
収入合計（B）	150,360,000	139,610,125	10,749,875
Ⅱ．支出の部			
科目	予算額	決算額	差引過不足額
1　事業費	61,490,000	56,755,816	4,734,184
会誌発行費	51,500,000	47,856,510	3,643,490
契約約款費	1,400,000	1,471,364	△ 71,364
会員名簿発行費	3,500,000	3,128,814	371,186
出版委員会事業費	300,000	74,173	225,827
事業委員会事業費	1,600,000	1,689,607	△ 89,607
教育委員会事業費	2,160,000	1,640,397	519,603
建材委員会事業費	30,000	16,800	13,200
記念事業費	0	0	0
雑費	1,000,000	878,151	121,849
2　管理費	80,440,000	74,495,148	5,944,852
給与・手当	53,740,000	50,353,211	3,386,789
退職金	0	0	0
福利厚生費	6,800,000	6,604,905	195,095
小計	60,540,000	56,958,116	3,581,884
助成費	3,700,000	3,552,640	147,360
会議費	1,220,000	820,384	399,616
旅費交通費	150,000	319,140	△ 169,140
通信運搬費	1,000,000	622,173	377,827
集金費	1,900,000	1,712,854	187,146
消耗品費	1,200,000	759,650	440,350
修繕費	200,000	70,350	129,650
印刷製本費	400,000	73,500	326,500
光熱費	330,000	319,575	10,425
火災保険料	20,000	15,960	4,040
租税公課	4,000,000	3,219,800	780,200
清掃費	180,000	182,700	△ 2,700
建物管理費	4,100,000	4,092,792	7,208
雑費	1,500,000	1,775,514	△ 275,514
小計	19,900,000	17,537,032	2,362,968
3　退職給与引当金積立支出	1,390,000	1,390,000	0
4　国債ファンド積立支出	0	1,695	△ 1,695
5　前受金支出	0	404,050	△ 404,050
6　予備費	600,000	0	600,000
小計	1,990,000	1,795,745	194,255
当期支出合計（C）	143,920,000	133,046,709	10,873,291
当期収支差額（A）－（C）	6,440,000	2,576,781	3,863,219
収支差額（B）－（C）	6,440,000	6,563,416	△ 123,416
次期繰越収支差額（B）－（C）	6,440,000	6,563,416	△ 123,416

正味財産増減計算書

平成13年４月１日～平成14年３月31日

（単位：円）

科目	金額
Ⅰ．増加の部	
1．資産増加額	
中期国債ファンド増加額	1,695
当期収支差額	2,576,781
退職給与積立預金増加額	1,390,000
小計	3,968,476
2．負債減少額	
前受金減少額	404,050
小計	404,050
合計	4,372,526
Ⅱ．減少の部	
1．資産減少額	
前払費用減少額	42,147
仮払金減少額	266,169
小計	308,316
2．負債増加額	
仮受金増加額	29,010
退職給与引当金増加額	1,390,000
小計	1,419,010
合計	1,727,326

当期正味財産増加額　2,645,200円
前期繰越正味財産額　233,493,370円
期末正味財産合計額　236,138,570円

貸借対照表

平成14年３月31日現在

（単位：円）

科目	金額	科目	金額
Ⅰ．資産の部		Ⅱ．負債の部	
流動資産	23,179,104	流動負債	41,334,384
現金・預金	17,030,629	未払金	15,903,563
未収入金	5,436,350	前受金	25,011,589
前払費用	376,606	仮受金	419,232
仮払金	335,519	固定負債	12,719,484
固定資産	267,013,334	退職給与引当金	12,719,484
有形固定資産	251,031,260		
土地	59,800,000	負債合計	54,053,868
建物	191,120,000	Ⅲ．正味財産の部	
什器	111,260	正味財産	236,138,570
その他固定資産	15,982,074		
退職給与積立預金	12,719,484		
記念事業積立預金	2,821,953		
中期国債ファンド	440,637		
資産合計	290,192,438	負債及び正味財産合計	290,192,438

（注）減価償却累計額は1,001,300円

計算書類に対する注記

1．重要な会計方針

(1)有価証券の評価基準及び評価方法について

該当なし。

(2)引当金の計上基準について

退職給与引当金・期末退職給与の要支給額に対し税法に基づき積み立てている。

(3)資金の範囲について

資金の範囲には、現金、預金、未収入金及び未払金を含めている。

(4)消費税等の会計処理について

消費税等の会計処理は税込み方式によっている。

2．次期繰越収支差額の内容は、次のとおりである。

科目	前期末残高	当期末残高
現金預金	18,213,155	17,030,629
未収入金	7,804,875	5,436,350
合計	26,018,030	22,466,979
未払金	22,031,395	15,903,563
合計	22,031,395	15,903,563
次期繰越収支差額	3,986,635	6,563,416

3．有形固定資産の取得価格、減価償却累計額及び当期末残高は次のとおりである。

科目	取得価格	減価償却累計額	当期末残高
建物	191,120,000	0	191,120,000
什器	1,112,560	1,001,300	111,260
合計	192,232,560	1,001,300	191,231,260

4.借入限度額

借入限度額は、30,000,000円である。

財産目録

平成14年３月31日現在

（単位：円）

科目	金額
Ⅰ．資産の部	
1．流動資産	23,179,104
現金・預金	17,030,629
現金手元有高	145,964
中央三井信託銀行梅田支店	927,826
三井住友銀行高麗橋支店	3,220,007
UFJ銀行瓦町支店	1,112,332
大和銀行北浜支店	1,136,608
郵便振替　00910－9－39975	10,457,598
普通預金第２ビル内郵便局	30,294
未収入金	5,436,350
会誌収入	2,565,000
雑事業収入	700,000
個人正会員会費収入	1,424,400
地方会員会費収入	114,050
準会員会費収入	8,400
団体正会員会費収入	237,500
会員名簿収入	217,000
教育委員会収入	170,000
前払費用	376,606
助成費	336,006
集金費	5,600
事業委員会事業費	35,000
仮払金	335,519
切手・はがき代	172,844
〃（建築クラブ）	6,475
復刻版代	156,200
2．固定資産	267,013,334
(1)有形固定資産	251,031,260
土地　北区梅田1－1－3	59,800,000
建物　大阪駅前第3ビル	191,120,000
什器　書棚一式	111,260
(2)その他固定資産	15,982,074
退職給与積立預金	12,719,484
三井住友銀行高麗橋支店	4,000,000
UFJ銀行大阪駅前支店	3,000,843
UFJ銀行瓦町支店	4,484,641
第２ビル内郵便局（普通）	1,200,000
第２ビル内郵便局（定額）	34,000
記念事業積立預金	2,821,953
三井住友銀行高麗橋支店	2,821,953
中期国債ファンド　つばさ証券	440,637
資産合計	290,192,438
Ⅱ．負債の部	
1．流動負債	41,334,384
未払金	15,903,563
会誌発行費	15,057,433
会員名簿発行費	12,000
助成費	91,830
集金費	47,500
租税公課	694,800
前受金	25,011,589
個人正会員会費収入	6,496,500
団体正会員会費収入	17,785,539
地方会員会費収入	559,650
準会員会費収入	8,400
会誌収入	161,500
仮受金	419,232
3月分給与税金	94,590
3月分204条該当分	295,242
誤振込預かり	1,100
印税預かり	28,300
2．固定負債	12,719,484
退職給与引当金	12,719,484
負債合計	54,053,868
Ⅲ．正味財産の部	
正味財産	236,138,570
負債及び正味財産合計	290,192,438

平成14年度

日本建築協会役員会務分掌（敬称略）

名誉会長	佐野　正一／㈱安井建築設計事務所	
名誉会長	市川　　宏／㈱東畑建築事務所	
名誉顧問	薬袋　公明／㈱日建設計	
会　　長	金多　　潔／京都大学名誉教授	
副 会 長	川口　順弘／㈱竹中工務店	企画・財務担当
〃	佐野　吉彦／㈱安井建築設計事務所	編集・研修担当
〃	中谷　秀敏／大阪ガス㈱	総務・事務局担当
〃	髙木　嗣郎／㈱大林組	会勢・事業担当
〃	成尾　克彦／㈱きんでん	会勢・事業担当
〃	與謝野　久／㈱日建設計	編集・研修担当

理事（○印常任理事）

（総務）6名
- 大林　芳郎／㈱大林組
- 栗原　信英／栗原工業㈱
- 鈴木　映男／㈶日本建築総合試験所
- 立野　純三／㈱ユニオン
- 伴　　昭秀／㈱西原衛生工業所
- 松村　雄吾／㈱松村組

（財務）5名
- 揚野　孝輔／㈱間組
- 奥村太加典／㈱奥村組
- 清水義一郎／㈱清水工業所
- 相馬　一男／住友電設㈱
- 松丸　哲也／豊國建設㈱

（編集・出版）9名
- 井上　　豊／大阪大学名誉教授
- ○上原　正行／神戸大学
- 岡田　聿之／㈱東畑建築事務所
- ○設楽　貞樹／㈱安井建築設計事務所
- 竹中　統一／㈱竹中工務店
- 畠山　祐治／㈱シンコー
- 広原　盛明／龍谷大学
- 堀田　修二／鹿島建設㈱
- 松村　慶三／㈱浦辺設計

（会勢）12名
- 淺沼　誠夫／㈱淺沼組
- 久米　宏和／㈳大阪建設業協会
- 鴻池　一季／㈱鴻池組
- 古林　敏郎／㈳広島県建築士会
- 小宮　三辰／㈱安井建築設計事務所
- 菅谷　　節／ダイダン㈱
- 錢高　善雄／㈱錢高組
- 中井　　進／㈱日建設計
- 浜辺　鶴志／戸田建設㈱
- 原田孝太郎／原田セメント化工㈱
- 古原　直人／毎日工業㈱
- 村上謙一郎／清水建設㈱

（事業）7名
- 井上　利美／㈱熊谷組
- ○川村　眞次／㈱関西都市整備センター
- 北山　啓三／大阪市住宅局
- 近藤　正文／都市基盤整備公団
- 仙田　良行／㈱カンダン
- 中川　正美／㈱フジタ
- 藤木　鐵三／㈱藤木工務店

（研修）7名
- 岩橋　貞雄／八千代電設工業㈱
- 氏原　完典／大成建設㈱
- ○片倉　健雄／元 近畿大学
- 阪倉　嘉一／大阪府建築都市部
- 永原　義夫／王建工業㈱
- 三宗　司郎／㈱昭和設計
- ○和田　克朗／㈶日本建築センター

常務理事	杉山　泰生	
（監事）	本郷　　聰／㈱松村組	前田　隆司／㈱前田商会

平成14年度

日本建築協会評議員（敬称略）

議　長　三木　敏男（サングローブ）
副議長　得田　芳宏（松村組）

本部所属評議員

（技術部門）
- 下村　健治（大阪青山短期大学）
- 三木　敏男（サングローブ）
- 村上　幸三郎（村上デザイン事務所）
- 山形　政昭（大阪芸術大学）

（総合部門）
- 山本　政博（藤木工務店）
- 梅原　哲郎（三井建設）
- 大塚　日出夫（淺沼組）
- 後藤　　宏（安藤建設）
- 塩脇　昭司（錢高組）
- 高木　敏文（鉄建建設）
- 谷　　哲司（奥村組）
- 得田　芳宏（松村組）
- 任田　　勉（西松建設）
- 林　　憲三（大日本土木）
- 松田　利男（戸田建設）
- 宮崎　靖司（鴻池組）
- 宗田　奎二（竹中工務店）
- 森井　繁夫（大林組）
- 吉川　幹生（間組）
- 辻本　　健（辻本工務店）
- 中道　正伸（中道組）
- 西田　隆昭（西田工業）
- 松村　照平（モリタ建設）

（電気部門）
- 浅海　伸之（浅海電気）
- 大久保　喬（近畿工業）
- 嘉納　秀一（三宝電機）
- 松岡　憲生（きんでん）

（管工部門）
- 神木　宣夫（須賀工業）
- 城口　俊雄（大阪城口研究所）
- 田中　達夫（精研）
- 三島　良樹（朝日工業社）

（建材部門）
- 久我　三郎（久我産業）
- 月城　則男（新東洋合成）
- 深江　隆司（アスワン）
- 藤井　　實（エスケー化研）

支部所属評議員

（京都支部）
- 井川　榮一（元京都市職員）
- 長瀬　博一（長瀬建築研究所）
- 森島　照雄（森島建築設計事務所）
- 山田　昌次（花豊造園）

（中国支部）
- 井上　弘美（アオケン）
- 清田　剛一（清田工務店）
- 嶋津　孝之（広島大学名誉教授）
- 福永　敏男（福永建設）

（東海支部）
- 寺本　英一（元鴻池組）
- 林　　金之（愛知工業大学）
- 福田　泰造（福田泰造建築事務所）
- 盛田　輝勇（丸善深見建装）
- 森田　富士男（シード）
- 芳山　明久（元INAX）

（和歌山支部）
- 井村　眞哉（井村建築設計事務所）
- 北山　泰秀（北山組）

平成14年度

日本建築協会支部長（敬称略）

- 京都　望月　秀祐（モチケン・コーポレーション）
- 中国　古林　敏郎（広島県建築士会）
- 東海　小宮　三辰（安井建築設計事務所）
- 和歌山　東野　信義（東野建築設計事務所）

平成14年度

日本建築協会委員

平成14年5月22日開催の常任理事会において、下記のとおり各委員会委員を委嘱いたしました。

（敬称略　◎印委員長　○印副委員長　△印幹事　☆顧問　　職場名は略称を用いました）

■編集委員会

会誌「建築と社会」の企画・編集

◎設楽貞樹（安井建築設計事務所）

■特集小委員会

計画分科会

（計画系）

伊縫憲幸（日建設計）
梅田善愛（竹中工務店）
小浦久子（大阪大学大学院）
△鈴木克彦（京都工芸繊維大学大学院）
田中直人（摂南大学）
紅谷昇平（三和総合研究所）
細田浩史（大阪市都市計画課）
松田奈緒子（京都工芸繊維大学大学院生）
松本正行（阪急電鉄）
吉村英祐（大阪大学大学院）

（建築計画系）

荒木宏之（大成建設）
江副敏史（日建設計）
菅野忠司（鹿島建設）
小林優子（UR設計）
桜井則雄（大林組）
笹村欽也（東畑建築事務所）
静　茂夫（大建設計）
所　千夏（安井建築設計事務所）
△野田隆史（竹中工務店）
三村和生（鴻池組）

（インテリア・住宅系）

加藤　力（京都工芸繊維大学大学院）
小梶吉隆（竹中工務店）
佐藤勝紀（都市基盤整備公団）
田中浩介（積水ハウス）
△高野直樹（安井建築設計事務所）
西田和子（大林組）
ペリー史子（大阪産業大学）
本山　仁（松下電工）

構造分科会

大氏正嗣（デザイン・構造研究所）
大音師　靖（デザイン・構造研究所）
大住和正（大林組）
尾上清治（安井建築設計事務所）
金田興熙（北條建築構造研究所）
木下隆嗣（東畑建築事務所）
白沢吉衛（日建設計）
住田隆二（キンキ総合設計）
田中　剛（神戸大学）
△田渕勝道（竹中工務店）
松村和夫（松村構造計画）
向井洋一（大阪大学大学院）
吉川真次（鴻池組）

設備分科会

今井泰司（大阪市住宅局）
梶井宏修（近畿大学）
△河井康人（関西大学）
河津隆之（河津隆之事務所）
近藤国夫（きんでん）
近藤正一（大阪市住宅局）
田ノ畑好幸（竹中工務店）
桝井貴廣（総合設備コンサルタント）
村上幸三郎（村上デザイン事務所）
谷津和久（新菱冷熱工業）
山根敏和（安井建築設計事務所）

施工材料分科会

植田　実（清水建設）
小椎八重　猛（積水ハウス）
△竹中秀文（大林組）
太刀川丈爾（竹中工務店）
平野　剛（鹿島建設）
横山芳幸（大阪府建築都市部）
吉田正友（日本建築総合試験所）

法令分科会

薄木三男（大阪市建築指導部）
大原幸三（大阪府建築指導室）
岡本哲夫（京都府建築指導課）
田村俊郎（兵庫県建築指導課）
中島和也（神戸市建築指導部）
溝上省二（京都市建築指導部）

■作品作風小委員会

赤木　隆（日建設計）
淺尾　宏（大阪府建築都市部）
朝倉一晃（兵庫県住宅整備課）
居内章夫（徳岡昌克建築設計事務所）
井上雅祐（大林組）
池上　明（エーアイアーキテクトスタジオ）
川上比奈子（夙川学院短期大学）
○倉渕奈千子（田中啓文総合建築研究所）
寺岡宏治（安井建築設計事務所）
中村文紀（東畑建築事務所）
林　孝司（清水建設）
前川治彦（前川治彦建築研究所）
増田敬彦（住友信託銀行）
増田俊哉（竹中工務店）
山田俊紀（昭和設計）

■会員企画小委員会

稲木裕子（大阪建設専門学校）
大谷由紀子（奈良女子大学大学院生）
河崎敦子（竹中工務店）
清水麗子（デザインオフィス・レイ）
○髙岡伸一（昭和設計）
高田光雄（京都大学大学院）
辰巳清一（日本設計）
塚口明洋（塚口明洋建築研究室）
辻川ひとみ
福田瑞穂（大建設計）

■広告企画小委員会

荒木俊明（鴻池組）
大迎敏樹（松村組）
小幡義明（鹿島建設）
小山　昭（東畑建築事務所）
斉藤治久（昭和設計）
田渕博昭（大林組）
竹内健介（竹中工務店）
林　一彦（大成建設）
古畑健一（清水建設）
前田　衛（日建設計）
○渡邉浩文（安井建築設計事務所）

■事業委員会

見学・講演・説明・展示・映画・懇親会・若い会員の集いなどの企画および実施

◎川村眞次（関西都市整備センター）
○伊藤武夫（大林組）
○原見昌志
○南　次郎

■見学会小委員会

○松浦剛士（清水建設）
△伊藤　博
△小林一成（鴻池組）
△坂田雄二（竹中工務店）
△坂本良高（大林組）
△福家　敬
久保田秀男（日建設計）
熊野健司（大阪市住宅局）
多田光男（鹿島建設）
塘　伸夫（東畑建築事務所）
松本　剛（大阪府建築都市部）
杢谷通夫（大成建設）
森田芳次（安井建築設計事務所）

■情報小委員会

○天野直樹（竹中工務店）
△大井昇二（大林組）
△小笹光彦（ランテック計画事務所）
△酒井重治（大阪建築防災センター）
△瀬戸川　葆（関西住宅品質保証）
△中西　稔（ジェイアール西日本コンサルタンツ）
岡本　隆（日建設計）
奥村　進
掃部　彌（大阪市建設局）
木場公典（大阪府住宅管理センター）
佐々木　栄（昭和設計）
田崎祐生（大阪青山短期大学）
町谷謙一（きんでん）

■若い会員の集い小委員会

○杉本真一（大阪芸術大学）
△石井太志（昭和設計）
△阪田弘一（京都工芸繊維大学）
△吉武宗平（ヘッズ）
青田有里子（島隆男建築研究所）
有田吉弘（阪急不動産）
河合哲夫（竹中工務店）
小林広英（京都大学）
佐々木晴子（大阪市住宅局）
杉山美納（東畑建築事務所）
龍野豪利（大阪市教育委員会）
田畑重明（坂倉建築研究所）
樋上新治（都市プランナーズオフィス）
松隈　章（竹中工務店）
廻　はるよ（廻はるよ建築＋デザイン事務所）
山隈直人（kt一級建築士事務所）
山田和弘（N.Y.総合事務所）
米井　寛（東畑建築事務所）

■出版委員会

建築に関する図書の企画・編集・刊行、「建築技術選書」特装版および＜プロのノウハウ＞の企画・刊行、ならびに講座の企画・実施

◎上原正行（神戸大学）
○中川　徹（清水建設）
荒川治徳（荒川建築技術コンサルタント）
安達英俊（安達英俊建築研究所）
井上まるみ（住まいの研究室）
植村典人（大阪府立今宮工業高校）
浦野英男（松村組）
岡田邦弘（大林組）
岡田伸子（岡田建築設計事務所）
神田暢子（北條建築構造研究所）
楠本照男（昭和設計）
田中正司（鹿島建設）
谷川康信（大阪工業技術専門学校）
仲本尚志（竹中工務店）
藤井亮介（大成建設）
安田　孝（摂南大学）
☆山田　修（修建築事務所）

■教育委員会

建築教育についての調査・研究、講習会の企画・実施ならびに工高生デザインコンクールなどの企画および実施

◎片倉健雄（元近畿大学）

■講習会小委員会

○藤井孝晏（大林組）
有光利治（鹿島建設）
池田孝夫（大成建設）
佐藤光宏（竹中工務店）
佐貫　久（神戸大学大学院）
白塚芳郎（鴻池組）
田中克治郎（錢高組）
室谷和平（清水建設）
山内博記（淺沼組）

■工高生教育小委員会

○和田康由（大阪市立都島第二工業高校）
△植松清志（大阪人間科学大学）
△三宅育男（大阪府立布施工業高校）
大西正宜（大阪府立西野田工業高校）
岡本展好（大阪市立都島工業高校）
小池啓夫（日建設計）
小久保　到（兵庫県立尼崎工業高校）
小山将史（堺市立工業高校）
神野　茂（大阪府立西野田工業高校）
武田雄二（愛知産業大学）
出雄　隆（大阪市立工芸高校）
永島敏郎（安井建築設計事務所）
山岡　徹（堺市立工業高校）
吉井和男（東畑建築事務所）

■建材委員会

建材コンサルタント・新建材の紹介

◎和田克朗（日本建築センター）
石本政美（都市基盤整備公団）
内畠　忍（住友大阪セメント）
浦野英男（松村組）
大坪義和（近畿地方整備局）
菅　知史（鹿島建設）
川上宏伸（大林組）
河津龍大（日本建築総合試験所）
小谷陽次郎（日建設計）
近藤達夫（大阪技術振興協会）
阪本重信（大成建設）
徳山正司（錢高組）
轟　泰輔（アーキアルファ設計）
西出　浩（大建設計）
西村正義（NTTファシリティーズ）
伯耆　紳（安井建築設計事務所）
丸橋　潔（大阪府建築都市部）
松村勝実（清水建設）
松本　章（東畑建築事務所）
元木貞次
森川　務（竹中工務店）
森本育宏（奥村組）

■企画委員会

協会の今後の運営を検討、審議

◎片倉健雄（元近畿大学）
鈴木映男（日本建築総合試験所）
得田芳宏（松村組）
松村慶三（浦辺設計）
三木敏男（サングローブ）
和田克朗（日本建築センター）

■IT委員会

◎中井　進（日建設計）
○和田克朗（日本建築センター）
岡田邦弘（大林組）
川村眞次（関西都市整備センター）
佐貫　久（神戸大学大学院）
桜井則雄（大林組）

若き創造者たちへ

「建築と社会」平成14年12月号
「第49回青年技術者特集号」へのおさそい

日本建築協会誌「建築と社会」は毎年「青年技術者特集号」を企画し、すでに48回にわたって若き優秀なプランナー、アーキテクト、エンジニアをめざす人たちを紹介してきました。

今回も、青年技術者選考委員会を設けて、青年技術者を選考いたしますが、昨今の建築に携わる技術者の多様化を考慮し、設計だけに限らず、計画、構造、設備、施工およびその他広く、建築に関連する分野から、優秀な青年技術者を募って、その不断の研究努力とすぐれた実績への情熱などを、「建築と社会」に掲載し、顕彰することにしております。

49回の企画にあたり、日常目立たない対象の実績も含めて、優秀な実績を積まれている青年技術者のみなさまのご応募をお待ちしております。

応募提出規定

1．応募される人は満35歳（平成13年9月末）までの青年技術者であって、本会個人会員に限る。

2．原則として、本会会員であるすいせん者を通じて応募する。

すいせん者は被すいせん者（青年技[illegible]る組織の上司か上長とする。すいせ[illegible]である場合はこの限りでない。また[illegible]表者である場合は自せんとする。

3．応募[illegible]い。応募者は、たとえば計画、一般設計、[illegible]インテリア設計、構造、設備、施工、技術開発、行政、情報、コーディネート等々その他の分野にあって、なしとげたすぐれた実績について、すいせんをうけ、下記の所要の資料を本会に期日までに提出する。

4．提出された資料は「青年技術者選考委員会」にかけて選考する。

5．「青年技術者選考委員会」において選考されたものは「第48回青年技術者特集号」（平成13年12月号）に記載するとともに、記念品を贈呈する。

6．提出資料

■すいせん用紙

■略歴

本人の氏名、生年月日、最終学歴、業歴、作品経歴など

■選考資料

資料は、④を含めてA3判用紙**5枚以内にまとめる。**

① 設計の場合――鮮明な写真、配置図および主要平面図、概要、設計要旨、その他設計内容を説明するに十分な資料

② 計画、構造、設備、施工の場合（それぞれの設計計画なども含む）――[illegible]準じた資料

③ 上記以外の分野の場合――[illegible]にふさわしい資料

④ 上記①～③の[illegible]実績において、応募者本人が関与した[illegible]立場等を明らかにし、資料中、本人が[illegible]分、または力量が活かされたと思われる部[illegible]な説明、考え方および将来的展望などについて、**2000字以内に平易簡明にまとめたもの**（必要に応じ、図・表を用いて差し支えない）。ただし応募者・本人の執筆に限る。

このコンセプトは、応募者の考え方を知る上で大変重要と考えているので、十分配慮されたい。

7．**提出期限**　平成13年9月10日（月）

8．**提出先**　日本建築協会「青年技術者選考委員会」
〒530-0001　大阪市北区梅田1-1-3-2100
大阪駅前第3ビル21階
電話 06-6348-0635　FAX. 06-6348-0634

9．**青年技術者選考委員会**（平成14年度）－予定－

委員長　設楽　貞樹／安井建築設計事務所取締役設計部長
委　員　三輪　康一／神戸大学助教授
橋本　健治／坂倉建築研究所大阪事務所執行役員
難波　正人／竹中工務店役員補佐
松田　善弘／昭和設計執行役員
甲津　功夫／大阪大学大学院教授
八木　貞樹／大林組本店建築設計部部長
栗山　知広／日建設計設備設計室長
穴吹　隆／清水建設関西事業本部設計第3部部長（設備担当）
林　一彦／大成建設関西支店建築部部長
梅原　弘記／大林組本店建築工事企画部部長

応募詳細は検討中

応募詳細は検討中

＊第48回から、応募提出規定が変わっています。すいせん者による「すいせんのことば」も省きました。規定に沿って、応募資料をご提出下さい。



作品募集

「建築と社会」平成14年11月号の
「第9回会員作品特集号“私の空間作法”」

「建築と社会」11月号では、会員の作品を広く紹介するため、**“第9回会員作品特集号－私の空間作法”**を企画しております。

今年より誌面をより充実すべく、掲載内容を作品の写真に限定せず、パース、模型写真等にまで拡げ、建築についての考えをビジュアルに表現しやすくしました。建築、ランドスケープデザイン、インテリアデザイン、まちづくり等、建築に関わるすべてのことを対象とします。みなさまのふるっての応募をお待ちしております。

※

■原　稿（提出資料）

作品は、竣工作品、計画案を問いません。下記要領に基づいてお送り下さい。

1．写　真　外観・内観・ディテール・模型写真等のプリント
（サイズはキャビネ判程度、5～6枚）

2．CG等　パース、コンセプト図等
（パースの写真撮影等は致しかねますので、印刷原稿となる状態でお願いします）

3．概　要　作品名称、所在地、設計者、施工者名、建築面積、延床面積、構造規模、工期など。

4．説明文　作品についての考えを300字程度にまとめて下さい。

■掲載に際しての補足

1．掲載料は無料です。誌面は原則として白黒ですが、委員会の判断で一部カラー掲載をすることがありますのでご了承下さい。
※写真の撮影者名は必ず付記願います。
※写真に著作権等が生ずる場合は、応募者にて処理願います。

2．掲載頁数は、原則として、1社（1人）1頁とします。また、8月末までに竣工予定の作品を掲載希望の場合、写真等の原稿期日は配慮致しますので、ご連絡下さい。

3．建物の特徴や特殊な事柄については簡単な補足説明をお願いする場合があります。

4．作品の掲載順及び誌面レイアウトを含む特集全体の構成・選定は、委員会にて担当致します。また、応募作品多数の場合等は、編集上の都合により掲載できないこともありますのでご了承下さい。

■原稿期日及び送付先

1．期　日　**2002年8月23日（金）必着**

2．送付先　社団法人 日本建築協会編集委員会
「会員作品特集号」係
〒530-0001　大阪市北区梅田1-1-3-2100
（大阪駅前第3ビル21階）
TEL. 06-6348-0632　FAX. 06-6348-0634

建築と社会 7 2002

ARCHITECTURE AND SOCIETY
JOURNAL OF THE ARCHITECTURAL ASSOCIATION OF JAPAN

1917年創刊　第83集／通巻964号

今月の表紙

表紙デザイン／田村昭彦
企画／倉渕奈千子
建築写真／河合止揚

●大阪芸術大学

設　計／高橋靚一
施　工／大成建設
竣　工／1968年
所在地／大阪府南河内郡河南町

●二上山・カツラギ・金剛の自然に抱かれた河南町東山の丘陵に建つ大阪芸術大学建築群の、第3期の学舎の一つである。モノトーンで見る造形物のコントラストは力強く、美しいフォルムが新鮮に感じられる。
当初、化粧なしのコンクリートの「塊」は、この風土の中で厳つさが目につき、違和感を持ったことを想い出す。今では、時間とともに建築物が環境に馴染み、人間とどちらともなく同化して、よい間柄となっている。
「緑」と「水」と「コンクリート」を融合させ活かしているのは、その「場」を共有する多くの学生たちである。（田村昭彦）

■特集予告
8月号／建築を支えるセンサー
9月号／建築とボランティア

編集委員会（平成14年度）

■副会長　※河井　康人
佐野　吉彦　河津　隆之
奥謝野　久　近藤　国夫
■編集担当理事　近藤　正一
井上　豊　田ノ畑好幸
上原　正行　桝井　貴廣
岡田　聿之　村上幸三郎
◎設楽　貞樹　谷津　和久
竹中　統一　山根　敏和
畠山　祐治　□施工材料分科会
広原　盛明　植田　実
堀田　修二　小椎八重猛
松村　慶三　※竹中　秀文
■特集小委員会　太刀川丈爾
□計画分科会　平野　剛
★計画系　横山　芳幸
伊縫　憲幸　吉田　正友
梅田　善愛　□法令分科会
小浦　久子　薄木　三男
※鈴木　克彦　岡本　哲夫
田中　直人　田村　俊郎
紅谷　昇平　中島　和也
細田　浩史　溝上　省二
松田奈緒子　※森下　嘉弘
松本　正行　■作品作風小委員会
吉村　英祐　赤木　隆
★建築計画系　淺尾　宏
荒木　宏之　朝倉　一晃
江副　敏史　居内　章夫
菅野　忠司　池上　明
小林　優子　井上　雅祐
桜井　則雄　川上比奈子
笹村　欽也　△倉渕奈千子
静　茂夫　寺岡　宏治
所　千夏　中村　文紀
※野田　隆史　林　孝司
三村　和生　前川　治彦
★インテリア・住宅系　増田　敬彦
加藤　力　増田　俊哉
小梶　吉隆　山田　俊紀
佐藤　勝紀　■企画企画小委員会
田中　浩介　稲木　裕子
※高野　直樹　大谷由紀子
西田　和子　河崎　敦子
ペリー史子　清水　麗子
本山　仁　△高岡　伸一
□構造分科会　高田　光雄
大氏　正嗣　辰巳　清一
大音師　靖　塚口　明洋
大住　和正　辻川ひとみ
尾上　清治　福田　瑞穂
金田　興熙　■広告企画小委員会
木下　隆嗣　荒本　俊明
白沢　吉衛　大迎　敏樹
住田　隆二　小幡　義明
田中　剛　小山　昭
※田渕　勝道　斉藤　治久
松村　和夫　田渕　博昭
向井　洋一　竹内　健介
吉川　真次　林　一彦
□設備分科会　古畑　健一
今井　泰司　前田　衛
梶井　宏修　△渡邊　浩文

◎委員長　△副委員長　※幹事

印　刷　2002年6月25日
発　行　2002年7月1日
発行人　社団法人日本建築協会
発行所　社団法人日本建築協会
大阪市北区梅田1-1-3-2100
電　話　06-6348-0635
振替口座　00910-9-39975
印刷所　青葉印刷株式会社
日本データネット株式会社
定　価　1200円〔本体価格1143円〕

CONTENTS

特集●　いま、インテリアデザインは
—次世代のインテリアデザイナーの職能に向かって—

[対談]　建築、身体性、インテリア●柏木浩一・加藤　力　22
[総論]　インテリアとは何か—身体、知覚、行動とインテリア—●高橋鷹志　26
これからのデザイナーの役割—地球規模で環境問題をとらえ、デザインは風土に合わせる—●木村戦太郎　28
[各論]　インテリアプランニングの仕事●栗山正也　30
インテリアデザインとコラボレーション●駒田哲男　32
インテリアデザイナー・暮らしの文化を創造する使命●喜多俊之　34
海外のインテリアデザイン教育—アメリカの場合—●ペリー史子　36
インテリアの職能の歩み●片山勢津子　38

特集●　湊町リバープレイス

[グラビア]　湊町リバープレイス　58
[序]　湊町リバープレイス—広場を主体とした新しい都市空間のあり方—●殿本　卓　63
[計画から施工まで]　大阪ミナミの再生●渡辺一郎　64
構造計画●森高英夫・尾上清治　66
設備計画●坂東功一・山崎貢沢　67
施工●後藤幸満・田村謙介・和田明博　68
[データ]　平面・断面・立面・矩計・建築概要　71

会告　総会議決のお知らせ．役付役員の選任等のお知らせ．（仮称）DT計画見学会．平成13年度事業報告書．平成13年度決算報告書．平成14年度日本建築協会役員会務分掌／日本建築協会評議員／支部長／委員．若き創造者たちへ．私の空間作法作品募集　1

作品作風　兵庫県立三田祥雲館高等学校　10
浪速区役所・浪速保健センター　14
ROOMS学園北町　16

gallery　借家生活（駒井貞治）●井上雅祐　18

建築の眼　田園風景を破壊する高架道路●吉村篤一
景観行政・新たな展開（1）●倉橋正己
建物と物語●種村俊昭
非合理のすすめ●増地秀夫　20

法令コーナー　京都市の都市計画マスタープラン●山本一博　43

構造の頁　耐火性能検証法のすすめ●湯谷孝夫　44

設備の頁　陰イオンの正体と市場●西村純一　46

研究最前線を追う　人の24時間、環境の24時間●近畿大学理工学部建築学科人間環境工学研究室　48

くでん一口伝一を活かす　「事」に仕えて、ハッピーに！●上原正行　49

REPORT　住宅問題懇談会100回記念シンポジウム報告（その2）—住まい・まちづくりの新世紀—関西を中心に—●住宅問題懇談会　50
大阪歴史博物館・講演と見学の集い—難波宮跡を例として文化財の保存と活用を語る—●小笹光彦　52

information　「歌一洋　四国八十八ヶ所ヘンロ小屋構想展・高知」．兵庫県立美術館「美術の力—時代を拓く7作家—」．「モデュロール—均整、身体、空間—」展．GRANDDAUGHTERS．なにわ歴博　建築夜講開催．ODPデザインセミナー「音環境デザイン」．スペースデザインゼミ開講．ビルディングドクター〈非構造〉講習．大阪まちなみ賞推薦募集．建築確認検査対象枠を拡大．御堂ビルの屋上緑化を毎週金曜日に公開．首都圏の賃貸居住者は都心を支持？　コンパニオンアニマルとの暮らし方読本発行．第11回BELCA賞決まる　54、86
土屋壽満さん、東久邇宮記念会賞受賞　55

月間の動き　平成14年5月分　56



作品風作

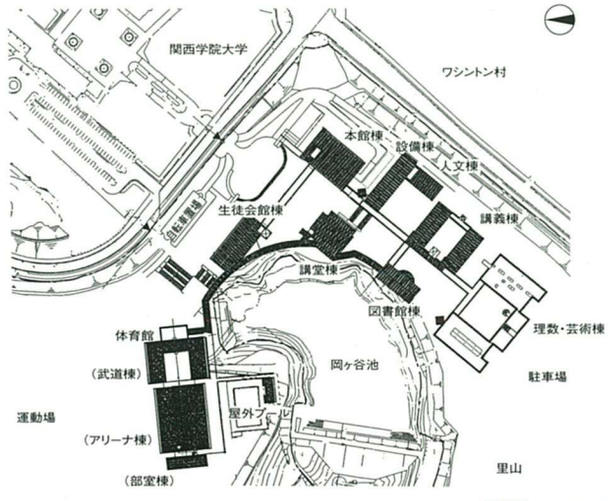
設計・監理■
兵庫県県土整備部まちづくり局営繕課

施工■
校舎棟建築工事：大林・森・神崎・ジェイオー特別共同企業体
校舎棟設備工事：円奈
校舎棟電気工事：共栄電器工業
体育館建築工事：富士土木興業
体育館設備工事：内田総合設備
体育館電気工事：中佐治電工

兵庫県立三田祥雲館高等学校

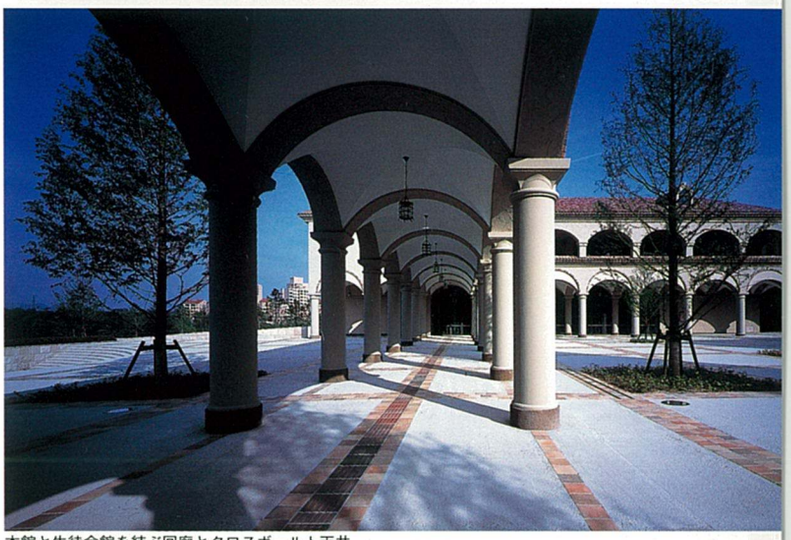
本施設は、新しく開発された三田地域の生徒急増に対応すると共に、個性、創造性、「生きる力」を育むために体験的・問題解決型学習を多く取り入れた、県下初めての単位制・全日制高校である。
敷地は教育・文化機能を分担する地区であるカルチャータウンに位置し、向かいのスパニッシュスタイルの関西学院大学と隣の高級住宅地・ワシントン村に囲まれ、三田市の「地区整備計画」の規制などもあって、周辺環境との調和が求められた。またその形状は農業用ため池をU字型に囲んだ曲玉模様の利用しにくい敷地であるが、周辺自然林も含めた借景とすることも考慮した。
従って設計コンセプトのキーワードをカルチャータウンのシンボルとしての“顔”と「文化性」、周辺との調和と同時に「識別性」、特異な敷地形状・借景との「一体性」に置いた。
施設配置は低層・分棟化によって群としての都市集落を構成し、それによる動線の延伸化と個々の施設の散漫化を避けるため、動線ネットワークと校舎群のシステム化が求められた。関学の中心軸を延長したメインの縦軸とため池に沿ったアールの回廊とでネットワークをクローズさせ、その中心に大講堂とどこからでも視野に入る時計台を配して、全体の中心性とシンボライズ化を図った。
外観は、前述の周辺環境から中世の山岳都市に見る「イタリア初期ルネッサンス」様式のもつ土着的素朴さ、粗野で牧歌的なイメージを求め、内外装とも自然素材の多用に努めた。
やや長い動線だが、生徒達にとって移動することが苦にならない楽しいキャンパスとして、また巣立っていった後に「我が母校」として誇れるものに、今後育てていって欲しいものである。

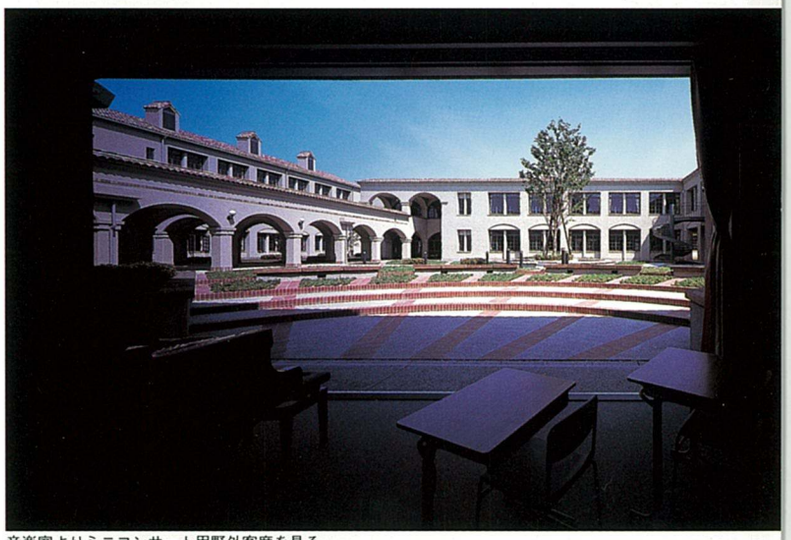
（槙林正樹、黒田達雄、宮下　誠、松井雅伸、柴垣安芸子／兵庫県県土整備部まちづくり局営繕課）

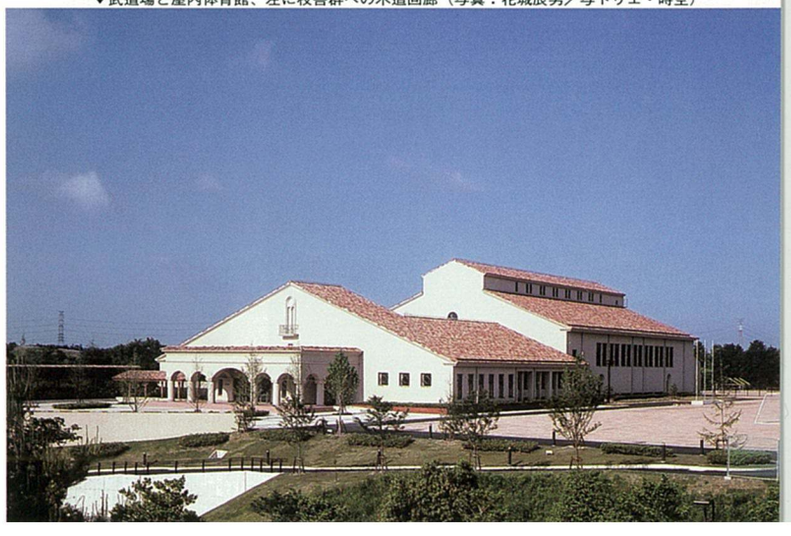


配置図　1：5000

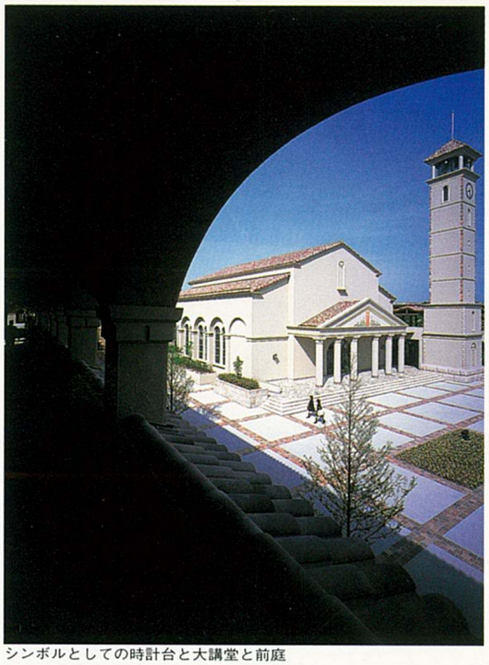

正門より回廊越しに大講堂、左に本館、右に生徒会館


本館と生徒会館を結ぶ回廊とクロスボールト天井

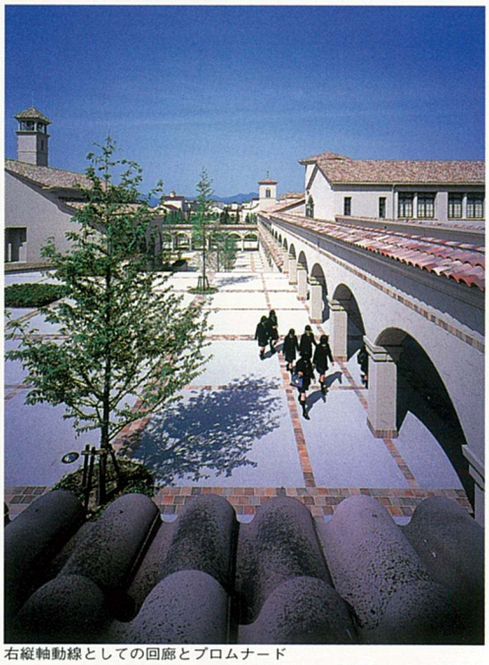

音楽室よりミニコンサート用野外客席を見る
▼武道場と屋内体育館、左に校舎群への木造回廊（写真：花城辰男／写トリエ・時空）



体育館側より見る池を囲む校舎群と回廊



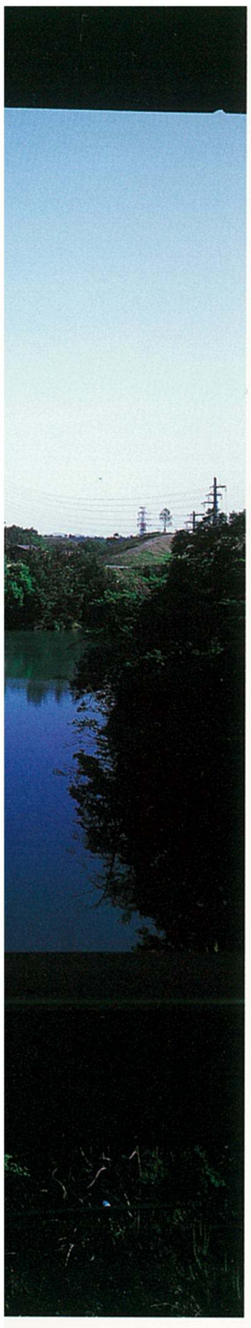
シンボルとしての時計台と大講堂と前庭



右縦軸動線としての回廊とプロムナード



本館吹抜け2階より



所 在 地 ——兵庫県三田市学園1丁目
敷地面積 ——117,087.99㎡
建築面積 —— 11,466.00㎡
延床面積 —— 16,082.00㎡

構造規模 ——RC2～3F、一部S・W
工　　期 ——2000年10月～2002年４月
最 寄 駅 —— 神戸電鉄公園都市線・ウッディタウン中央駅
撮　　影 ——福澤昭嘉（特記以外）



本館吹抜けより外部回廊を見る



大講堂階段教室



池越しに回廊と体育館を見る（写真：花城辰男／写トリエ・時空）



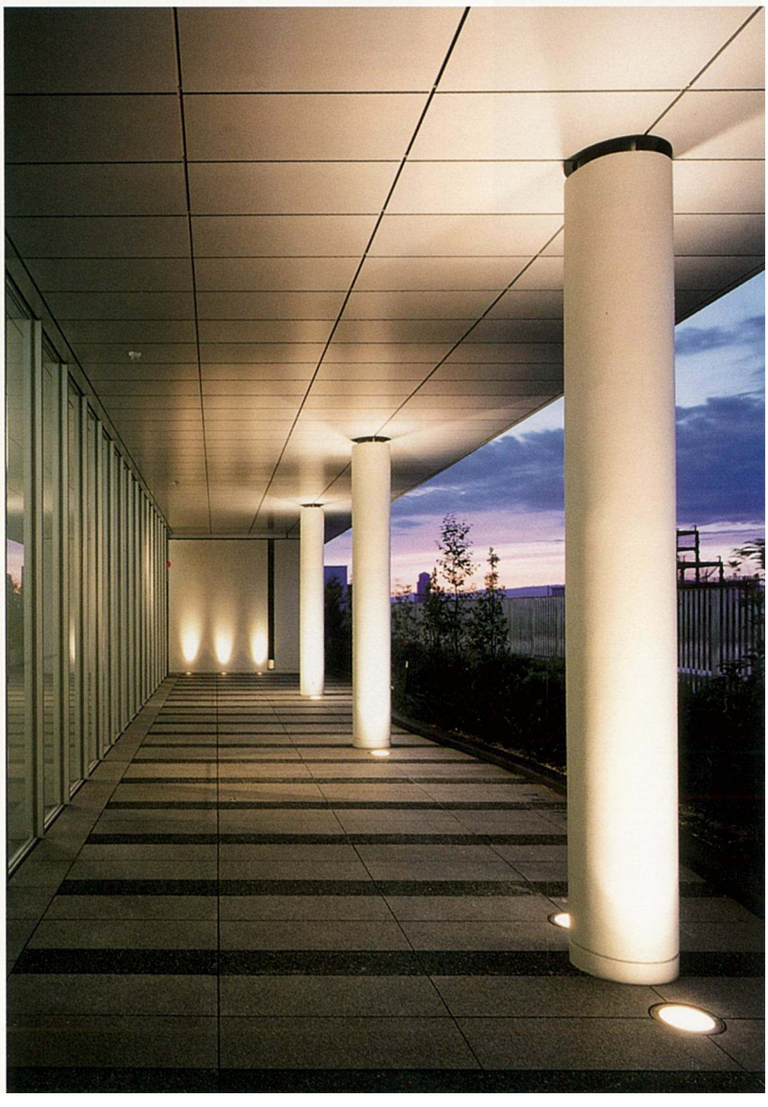
生徒会館食堂



体育館玄関ホール、突当たりに体育館（写真：花城辰男／写トリエ・時空）




B1



作品風作

設計・監理■
東畑建築事務所

施工■
大日本土木

浪速区役所・浪速保健センター

本計画に際し、３つの基本方針を掲げています。

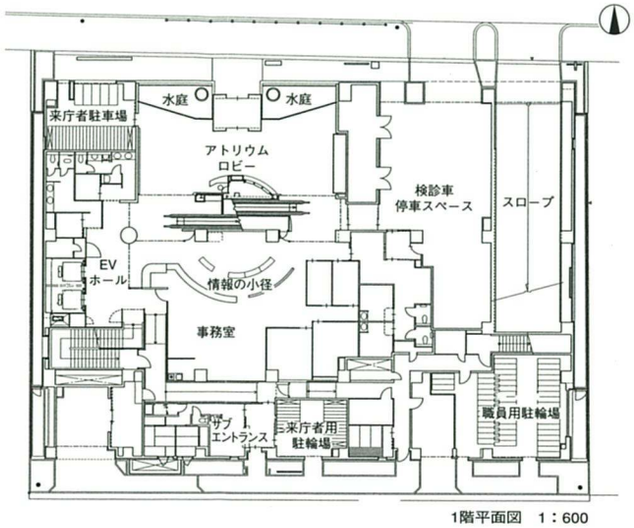
１．区民ひとりひとりが生活空間の一部と感じられるきめ細かな計画

２．共用部分、設備諸室などのインフラ空間群を集約し、行政需要の変化に柔軟に対応した計画

３．周辺市街地に対して新しい地域の秩序と区民が実感できる品格ある意匠

１階正面玄関には、両側に浪速の象徴「水」を配し、印象的なアプローチ空間となるよう意図しています。この水庭に面している区役所及び保健センターの共用ロビーには「情報の小径」と名付けた区民のための情報を集中させたゾーンを設けています。この共用ロビーと２階区役所（住民情報課、保険年金課）、３階保健センターはエスカレーターで連絡されています。　南北面の執務専用部分のガラスカーテンウォールは全て開閉出来る機構とし、また、各課の案内サインは照明を組み込みながら移動できる構造とするなど、執務レイアウトの変更に柔軟に対応できるよう考慮しています。ガラスカーテンウォールには、ストライプ状のセラミックプリントを施した高透過ガラスを採用し、ぎらつきや反射を抑え、外部と内部を柔らかく隔てる意匠としています。３階、４階そして７階で建物外壁をセットバックさせ、緑化した屋上庭園とし、周辺環境に配慮すると共に来庁者、職員に潤いの空間を提供しています。

（中村文紀／東畑建築事務所）



1階平面図　1：600

所 在 地 ――大阪市浪速区敷津東1-4-20
敷地面積 ――1,633.92㎡
建築面積 ――1,324.81㎡
延床面積 ――9,745.97㎡
構造規模 ――SRC・RC、一部S、B2、F7、P1
工　　期 ――1999年9月～2002年3月
最 寄 駅 ――大阪市営地下鉄御堂筋線・難波駅、または大国町駅
撮　　影 ――八幡輝幸／伸和

左頁：アプローチ、エントランスホール、屋上庭園
右頁：外観、7Fホワイエ







作品風作

設計■
田中直人都市環境デザインネットワーク

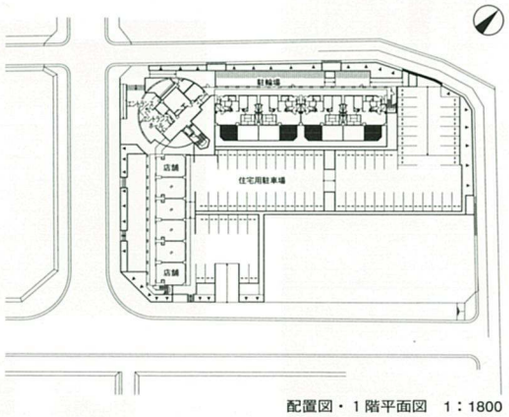
監理■
NATS環境デザインネットワーク
JA兵庫六甲一級建築士事務所

施工■
熊谷組

ROOMS学園北町

当該敷地は開発の進む西神南ニュータウンと神戸研究学園都市の間に位置する伊川谷駅周辺の区画整理事業地区にある。近くの国宝大山寺などの歴史資源や緑豊かな田園地域が隣接している。
ふるさとの顔づくり事業のモデルプロジェクトとして、モダン和風のシャープなシルエットを屋根と柱・梁によって構成した。メインの通りに面した一階部分には店舗を計画し、前面のセットバックした広場と一体的に、新しい地域のまちなみと賑わいを創出することをめざした。比較的狭小な個々の敷地に建築された周辺の住宅とは異なり、4区画を共同化して、街区としての生活環境を計画した賃貸の集合住宅である。
高齢化に対応して、屋内外に基本的なバリアフリーを行うと同時に、従来のフロンテージセイビングによって拘束されるプランからの脱却を図り、自由度の高い開放的な空間構成をめざした。単身者・小家族を想定したロフト付きの1Kタイプから、ウッドデッキ専用庭付きのファミリータイプまで、プランのバリエーションを考慮した。
バルコニーや廊下、階段などの共用部分は賃貸住宅としては、ゆとりを感じさせる幅員と眺望を楽しむことができる生活路地を意図してデザインしている。
屋外の植栽計画においては、和風の竹やオカメザサ、季節感を演出する桜、ハナミヅキ、キリシマツツジ、アジサイに加えて、街角広場にはケヤキをシンボルツリーとして、配している。

(田中直人・老田智美)

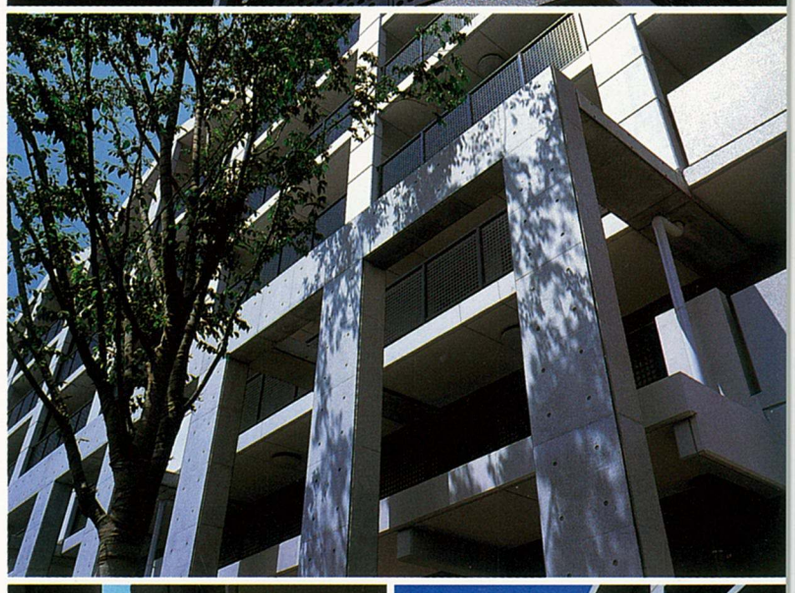


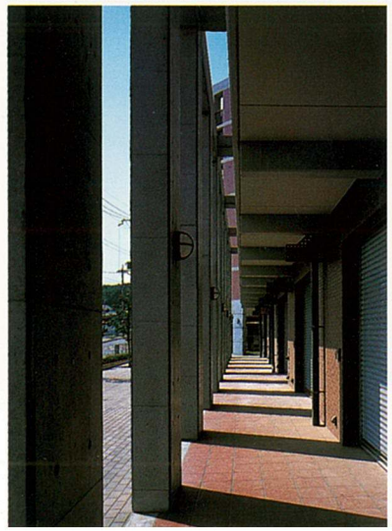
配置図・1階平面図　1：1800

所 在 地 ——神戸市西区前開南町2-12-15
敷地面積 ——4,253.00㎡
建築面積 ——　973.09㎡
延床面積 ——3,949.97㎡
構造規模 ——RC、7F・3棟
工　　期 ——2001年5月～2002年3月
最 寄 駅 ——神戸市営地下鉄・伊川谷駅
撮　　影 ——伊藤　彰











gallery

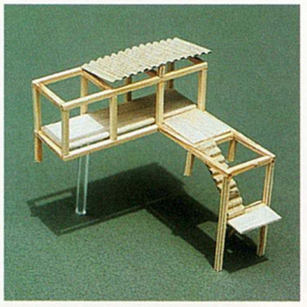
借家生活

設計
駒井貞治

大阪生まれの僕が、京都に下宿し15年がたった。大学生だった僕も、就職し、結婚し、子供が生まれ、独立し、と家族構成や生活環境が変化し、それに合わせるように借家の引越を繰り返してきた。
借家は、そこでの生活に合わせて増改築などをした場合、出ていく時には借りる前の状態に戻してから大家に返すことが、条件になってしまっている。しかし、できるだけ既存部分に手を加えずに増改築し、またその構成部材の単位を家財道具のように小さくすることで、引越の際には共に移動させ、そこでの条件に合わせて活用すれば、毎回その家を積極的に住みこなすことができると考えた。

「借家２」は、周辺の環境にも恵まれ、建物も古いながらも質の良い借家であったが、風呂がなく、２階建てのため上下階に居室が分かれているので、大人数が集まる時にはスペースが足りないと感じた。そこで、バーベキューをしたり、子供の遊具を持ち込み、１階の居間と内外一体として使うことができるデッキを庭に設けた。また工務店の倉庫にあまっていたユニットバスの浴槽と床をゆずりうけ、露天風呂として再生した。

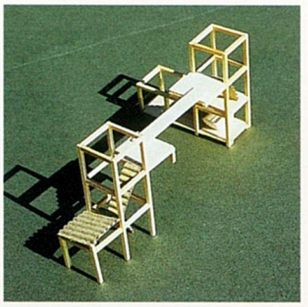
借家生活●1（京都市左京区高野）



建物用途：住宅（プロジェクト）
増築計画部分建築面積：20㎡
増築計画部分床面積：8㎡
家族構成：単身者→夫婦→夫婦＋子供1人

→ 引越

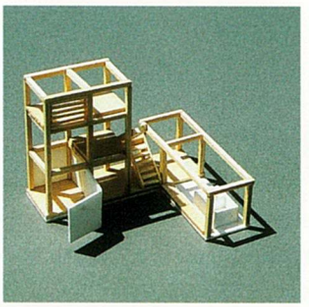
借家生活●2（京都市左京区若王子）



建物用途：住宅＋設計事務所
工事期間：1998年5月～
増築部分建築面積：24㎡
増築部分床面積：8㎡
家族構成：夫婦＋子供2人→夫婦＋子供3人

→ 引越

借家生活●3'（京都市中京区富小路）



建物用途：住宅＋事務所＋ギャラリー
工事期間：2002年5月～
現在（居住中、工事中）
増築部分床面積：4㎡
家族構成：夫婦＋子供4人



借家生活2　デッキと露天風呂　　このフレームキットは、ホームページで販売もしている　（http://www15.u-page.so-net.ne.jp/qd5/komai/）







借家生活2から3'への引越、フレーム組立

引越や工事は、毎回多数の友人の協力を得ている。工務店で柱梁の仕口の加工をしてもらった部材を、家財道具同様に運び込み、自分達で組立て…ということを、繰り返している。

今回の「借家生活3'」では、かつては建具屋さんの倉庫であった。ロフトも含め3層に渡る空間に、住居、事務所、作業場、ギャラリーが混在したような、フレームキットを挿入した。
今、非常に興味のある、常に自分を刺激するものや人を探し、呼び寄せ、企画展示していくというギャラリーというものや、いろんな人が出入りし利用するような作業場、4人の子供に翻弄される日常生活の場などが、空間的にも入り交じり互いに影響を与えあうような生活が、まさに始まった。

駒井貞治（こまい さだはる）
1968　大阪市生まれ
1990　京都府立大学住居学科卒業
1990-95　建築環境研究所
1997　駒井貞治の事務所　開設

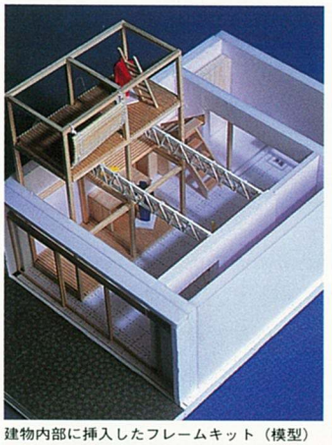
企画編集―井上雅祐（作品作風小委員会）



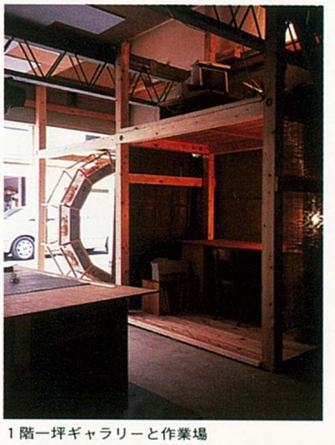




引越の日に上棟(?)をむかえる



建物内部に挿入したフレームキット（模型）



1階一坪ギャラリーと作業場



夕景



子供室となる中2階と、既存のロフト

田園風景を破壊する高架道路

吉村　篤一

京阪電車が宇治川の鉄橋にさしかかるころ、車窓から田畑の向こうに石清水八幡宮のある男山のみえる風景は、京都一大阪間で唯一のどかで風情のある美しい田園風景であり、車窓からの楽しみであった。ところが最近、京滋バイパス（京都第２外環状道路）が宇治川と京阪電車の線路を跨いで、男山の前に立ちはだかり、のどかな風景を破壊してしまった。

数年来道路行政について云々されているが、とにかく今や道路はつくりすぎであり、舗装道路が国土の隅々までゆき亘りすぎてしまった感がある。どこまで行っても田園風景のなかに高架道路の見えない場所はなくなってしまった。もちろん道路ができて住民が便利になることは悪いことではないかもしれないが、その結果美しい風景が破壊されてしまっては台なしである。まさに、“国栄えて山河なし”になってしまった。最低限必要な道路もあるだろうが、これからの時代は道路は見えないように、例えば半地下オープンカットなどとしてつくることはできないのだろうか。

都市の景観もさることながら、美しい田園風景も国家の財産であることを忘れてはならない。これ見よがしの道路づくりの時代は終わったのだということを為政者に認識してもらう必要がありそうだ。

奈良女子大学生活環境学部人間環境学科教授

景観行政・新たな展開（1）

倉橋　正己

景観行政をとりまく環境が大きく変化している。そんな中、政令市の景観担当者が集まり、行政が今後目指すべき方向性を『景観行政セカンドステージ・ビジョン』としてまとめた。そのまとめで触れられている新たな領域への展開のいくつかを、この欄を借りて順次紹介したい。

その第１、「地域の景観資源の保全・再生・活用」について。

例えば神戸の旧居留地。ここには歴史的経緯から西洋近代建築が今なお残っている。たとえ建て替わっても、以前のデザインイメージを継承するものが多く、レトロな中に重厚さが感じられる街並みになっている。こういった風格のある雰囲気を活用して、ビルの低層部に高級ブティックの店舗が並ぶ、神戸でも有数の活気のある街となっている。歴史的建築物を、文化財として保全するだけでなく地区の歴史的特徴を表す景観資源としてとらえ、活用している事例である。これは最も特徴的な例だが、他の一般的な地区でも、その歴史的な景観資源を発掘・活用しながら、個性を大切にする試みが増えている。景観資源の対象も、建築物だけでなく産業遺産、樹木、地蔵、道標から“昔あった筈の井戸”まで拡がっている。

人々が自ら「まち」の歴史を学び、皆でその存在のあかしを探し、活用策を考えるというプロセスもまた、地区に愛着が持てるまちづくりのきっかけとして大切なことである。

神戸市都市計画局アーバンデザイン室長

建物と物語

種村　俊昭

建物を創り出すことは、その出来上がった建物そのものもそうであるが、そのプロセスにおいても様々な関係者と共有できる物語を創り出す行為でありたいと思っている。ただ一般的には、今日、その共通の物語をつくるということが、大変困難な状況である。すなわち、社会的には、デフレそして価値観の多様化と表層化が進み、建設業界では安ければよい、速ければよいといった「ものづくり」とは縁遠い方向に向かっているような状況である。

しかし、環境とか風土性、地域性、文化、あるいは、景観、風景、場といったいわゆる公共的な視点が重要であることも言われて久しい。いずれにしろ、文明的視点で独りよがりの小難しい建物（物語）を発明するのではなく、あくまでも文化的視点で古今東西での人と自然のいとなみの中から発見して、できるだけ多くの人々に共有される物語が漂う建物を創りだせればと思う。それには当然、その創り出すプロセスにおいても、単に立場や役割分担といったビジネスライクに進めるのではなく、多くの関係者の寛容と熱意のもとに、出来うる限り共有できる物語が展開されることが必要条件となってくるであろう。量の時代から、質の時代を経て、実りのあるという意味で、実質の時代となっていければと思う。

あまりにも政治から企業、個人に至るまで、私利私欲的傾向が強く、精神的あるいは文化的側面が希薄で、自分たち自身で自分たちの心を貧しくしているような気がするがゆえに。

日本設計関西支社チーフ・アーキテクト

非合理のすすめ

増地　秀夫

失われた10年と言われて久しいですが、バブル崩壊の数ヶ月前（1990年10月）に、松下電器産業の社内情報誌に掲載された興味深いエッセーを見つけました。

執筆は当時松下冷機の社長であられた瀧口融氏で、内容を少し紹介すると『昨今は「物の豊かさ」ではなく「心の豊かさ」を求めていると言われています……戦後日本に高度成長と今日の豊かさをもたらしたのは、生産者が徹底した合理化を追求して大量生産・大量販売を成功させたからであります……今やこの方式で消費者に応えていくことは出来ず、時代に相応しい方式をマスターする必要性が出てきています。……特に考えなくてはならないのは今まで根底に流れていた「合理化」の発想についてです。合理化というのは、どうしても自分中心に物事が運ばれていき、相手不在のプロダクトアウトとなり、「ゆとり」とか「潤い」とか「まごころ」といった人の「心」、あるいは人そのものまでも否定してしまうことになり……合理化優先の発想ではなく不合理或いは非合理の発想の中にこそ「心の豊かさ」の再発見がある……このような思い切った発想の転換が必要……』と熱く語られています。

厳しい社会情勢の中で苦悩する我々企業に、また企業人に方向性を示唆した一条の光のように思われました。バブルの終焉がまだ見えていない時期に語られた『非合理のすすめ』を肝に銘じて次の時代への指針としていきたいと思っています。

積水ハウス（株）商品開発部内装設備設計室長

特　集

いま、インテリアデザインは

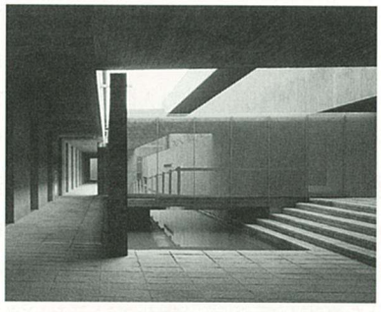
――次世代のインテリアデザイナーの職能に向かって――

インテリアは、建築とは切り離せない表裏一体のものでありながら、建築の世界で積極的に語られることの少ない分野でもありました。しかしながら、人間がその中に住まい、集い、活動する場としての建築という観点から考えますと、人間の身体性から出発するインテリアの視点は、注目されてもしかるべきかと思います。

日本の建築界において、インテリアが語られることの少なかった理由の一つには、インテリアデザイナーの職能の確立の遅れ、そしてその職能に対する社会的認識の不足も挙げられるかと存じます。建築の言語をインテリアの方向へと展開していく手法、すなわち建築家がインテリアの細部に至るまで全てのデザインをこなせるジェネラリストとしてコントロールするというアプローチ、また建築にますます多機能な要素が要求される時代に身体性からのアプローチを建築に展開していくために、インテリアの側から照明、アート、家具等身体を取り巻くさまざまな要素のスペシャリストとのコラボレーションによって空間を内側からつくりあげていくというアプローチ等、インテリアデザインにはさまざまなアプローチの仕方が考えられます。

本特集では二項対立でないインテリアと建築のあり方の現状を再検証し、その中でこれからのインテリアデザイナーの職能をどのように考えていけばよいのか、その可能性を追求したいと思います。

（編集委員／西田和子）



兵庫大学健康科学部中庭

□対談

建築、身体性、インテリア／柏木浩一、加藤　力

□総論 1

インテリアとは何か―身体、知覚、行動とインテリア―／高橋鷹志

□総論 2

これからのデザイナーの役割―地球規模で環境をとらえ、デザインは風土に合わせる／木村戦太郎

□各論 1

インテリアプランニングの仕事／栗山正也

□各論 2

インテリアデザインとコラボレーション／駒田哲男

□各論 3

インテリアデザイナー・暮らしの文化を創造する使命／喜多俊之

□各論 4

海外のインテリアデザイン教育―アメリカの場合―／ペリー史子

□各論 5

インテリアの職能の歩み／片山勢津子

企画　インテリア・住宅分科会

対談

建築、身体性、インテリア

柏木　浩一（アビタ代表、建築家）
聞き手　加藤　力（京都工芸繊維大学助教授）

「蟻の視点」と「鳥の視点」

加藤　柏木浩一さんは、かつて「神戸改革派神学校」でＪＩＤ（日本インテリアデザイナー協会）の大賞を受賞するとともに、今度は「兵庫大学健康科学部」でスペースデザイン賞をとられました。このような内部空間と外部空間が融合した空間をつくることで、インテリアデザイナーの注目を集めると同時に、こうした空間に関心を向けさせました。いままでのインテリアデザイナーの職能領域ではとうてい実現し得なかった空間づくりへの提案に多少、衝撃を受けています。内とも外ともつかぬ空間づくりを実践されている柏木さんにインテリアについてのお考えや手法をお聞きしたいと考えます。また、柏木さんは先日、これまで33年間お勤めになった竹中工務店設計部を退職され、雑誌（「日経アーキテクチュア」／2002.1.21号）のインタビューに答えて、「建築が置き忘れたインテリアの領域」について、今日の建築の持つ問題点を言い当てておられます。そうしたあたりから、「インテリアとは何か、インテリアの職能とは何か」を探っていきたいと思います。

まず、「今日、建築が置き忘れたインテリアの領域」とは何かについてお聞きしたいのですが、柏木さんが指摘される「蟻の視点」と「鳥の視点」から、まずおうかがいしたいと思います。

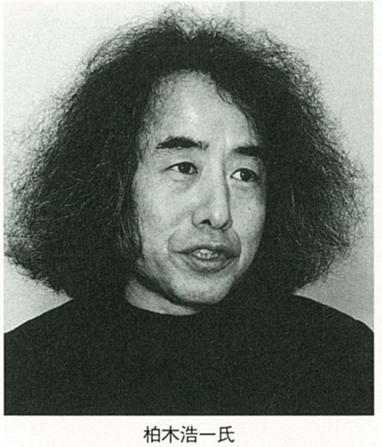
柏木　私は、設計という社会と直結した創造的行為においては、「蟻の視点」と「鳥の視点」の両方が必要と考えています。「蟻の視点」とは、人間が行動するなかで眼前に現れる部分部分を直視していく視点です。一方、「鳥の視点」は、鳥瞰的にマクロに捉え、都市と社会の中で、建築が、インテリアがどうあるべきかを考えていくものです。ただ、蟻の視点では近視眼的になり過ぎて全体を見落とす危険性があるし、鳥の視点になった場合、生の人間が見えずらくなります。高度成長期など、ものごとが大きく動いているときは、概括的にものごとを捉える「鳥の視点」で見ることも有効であったと思いますが、現在のような時代に入ってきますと、我々は、個人の微細な行動や情動に直結していく「蟻の視点」の存在を忘れていたのではないかと気がつきます。その根底には、建築やインテリアが、そもそも誰のためにつくられるものかという思考が欠落していたのではなかったかということです。

加藤　そうです。建築をつくるということの意味が次第に薄れています。例えば、設計者は設計という行為をするために建物をつくる。施工者は建築工事を生み出すために建物をつくっているのではないかと疑うくらいです。何のために人は建築をつくるか、自己への問いかけが根底にないのです。建築はシェルターとしての器さえつくれば、それで済んだと思っているのです。器の中身をつくることなど一体考えているのでしょうか？柏木さんは、そうした風潮の中で「人が今という一瞬を鮮やかに生きるための器」ということをおっしゃっています。それは器だけをつくるだけではないのだと問いかけているのです。

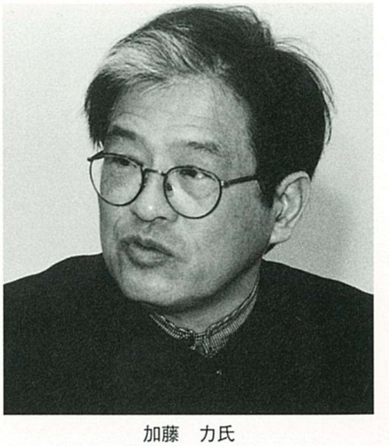
柏木　「蟻の視点」の延長線上で説明しますと、それは一個の生の人間として生きている、即ち実存ということに器が貢献することが重要だという事です。実存というのは、身体と心が一致することで、何をやっても心ここにあらずといった身体と心がバラバラの状態ではあり得ない。道元禅師は、「身心一如」といっていますが、その状況を建築やインテリアの中に具現化するための器づくりを目指しているといえます。

アクチュアリティとリアリティ

加藤　「蟻の視点」は五感で感じる世界のことです。それに対し「鳥の視点」は、頭の中で考える世界ではないかと私は思っています。私自身、その二つを区別する意味で体感することすなわち、


柏木浩一氏


対談風景（兵庫大学健康科学部中庭）


加藤　力氏

「蟻の視点」をアクチュアリティ、頭の中で考えること「鳥の視点」をリアリティと考えています。いいかえますと、建築をつくる側の人は頭の中で考えるリアリティの立場で、建築を使う側の人は、その建築を体感するアクチュアリティの立場で建物をとらえています。この間にとてつもなく大きなへだたりがあります。柏木さんは、空間の中に身体性の要素を持ち込むことによって体感を重視するアクチュアリティな空間をつくることを希求しているように思います。

柏木　リアリティとアクチュアリティを区別することを、心身統合のメカニズムを担うといわれる脳の構造で考えてみれば判りやすくなると思います。リアリティー「鳥の視点」は、脳の外周部にある大脳皮質が主体となる世界で、アクチュアリティー「蟻の視点」は大脳皮質から一段内側の進化論的に古い脳の部分で感じる。いってみれば動物の本能を司るところが主体となる世界です。五感で感じる世界は、動物的本能で快、不快を区別しますが、「鳥の視点」は大脳皮質で熟成される世界なので理性的・論理的で、最も人間味のある快、不快になかなか結びつきません。私は、普通のおばちゃんやおじちゃん、そして子供など誰れでも感じる五感の領域に大変興味があります。

加藤　人は脳ばかりでなく身体でも考えます。「コギト、エルゴ、スム」は20世紀において誤解して考えられていました。私自身、数年前に病気でしばらく入院していましたが、そのときつくづく、脳すなわち心と身体はひとつのものだという思いがしました。20世紀の後半は身体論が流行しました。それは逆説的にみれば脳の優先があった。身体の脳に対する偏見があった。ちょうど一般に建築をつくる側がインテリアを偏見で捉えているのと同じように思います。その点、柏木さんは身体の部分に重きを置いて、むしろ身体を逆手にとっています。柏木さんとインテリアの関係はどのようなところから生まれてきたのでしょうか。

柏木　私がインテリアに関心をもったのは、20年ほど前に予備校の設計に携わったおりです。家具のレイアウトで柱のでっぱりの関係から一列席数を少なくしたら、建築主から、そうした隙間にも机を置いて一人でも多くの受講者を入れることの重要性を、予備校経営の実態から手厳しく指摘されました。柱のでっぱりひとつあるなしで、家具のレイアウトに大きな影響があることをいやというほど知りました。また、インテリアを建築工事の中でやるのと、後からの家具工事として別にやるのとでは、総工事費用が大幅に変わることを知り、建築設計の段階でインテリアまで考えるようになりました。

空間における身体性

加藤　きわめてわかり易い話です。実用的なところから次第にインテリアに目覚めていった。多くの建築設計者はそうした実用的な体験を通じて、インテリアの世界に入っていきます。しかし、それで終わりです。柏木さんはその実用的なキッカケに発して、内なる設計の理論を自分自身の中で構築しようと試みました。むしろ、ある時期、積極的にインテリアの手法や商業施設の設計技術などのインテリアデザインの中に飛び込んで、その中から建築におけるインテリアとは何かを探し求める旅に出た。また、柏木さんは、照明作家やアーティストとコラボレーションを通じて重層的なインテリア空間をつくられてきました。しかし、多くの建築家は中身をつくらずに、すなわち魂を入れず、むしろ内を空虚にして単なる建築の器だけをつくってきたのが実状です。

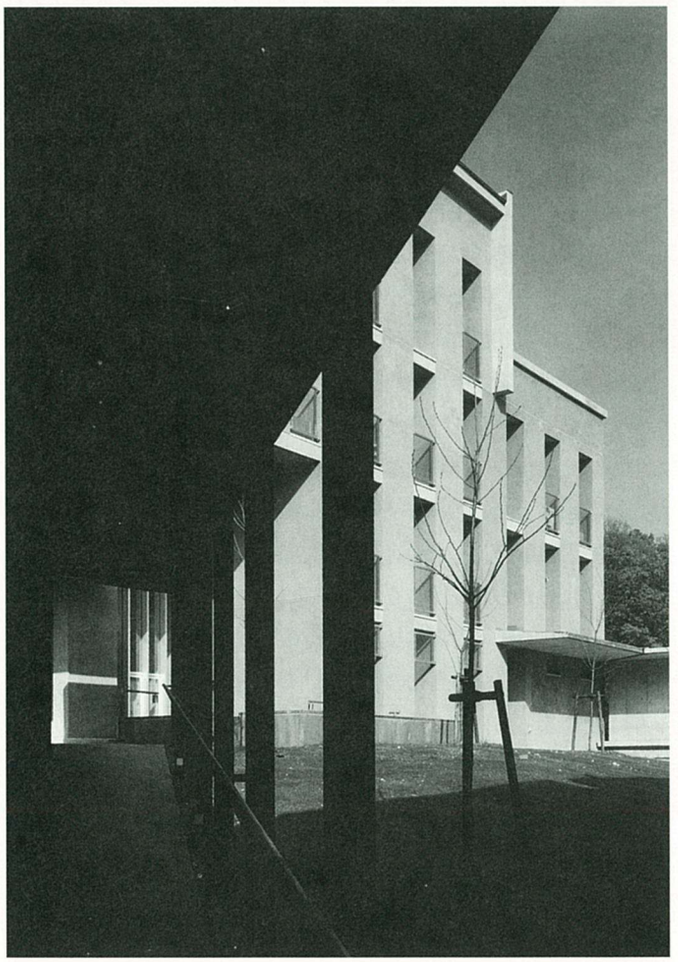
柏木　空間における身体性を考える契機になった設計は、1990年頃に携わったファミリーレストランです。ファミリーレストランというのは、一般的には駐車場があって玄関を入ると、すぐ食事をするスペースがあるのが普通です。しかし、美味しいものを美味しく味わうには、気分の切り替えを強いる必要があるのではと考え、外の日常性と食事空間との間に緩衝地帯を設けることにしました。駐車場と玄関の間に庭を設けたのです。いってみれば茶庭のような、小さいながら凝縮された外部空間を設けて庭内を歩かせた上で、躙口（にじりぐち）のような小さな入り口から入ることで身体を動かさせ、気分の切り替えに繋げていく。そんな提案をしてみました。

加藤　商業建築の中に積極的にアプローチすることによって、それまでなかった空間を提案することで、身体性にたどりついたわけですね。そこから「神戸改革派神学校」などが生まれることになった。神学校は、斜めの床や音の響きあう空間が存在しますし、「兵庫大学健康科学部」も水の音が響く空間になっています。中庭の床の仕上げもわざわざ荒々しくして、身体に訴えるつくりになっています。そうした建築の身体技法について教えて下さい。

柏木　「神学校」の当初の敷地は、ひな壇造成で高低差は２メートルほどになっていました。それを自然に戻すという意味からも、プランの中に斜めの床が多く出てきます。竣工後、斜床（斜めの床）の重要性をいやというほど思い知ることになる訳です。吉村順三氏は、「住宅設計の秘訣」の一つとしてサーキュレーションをあげています。日本の家の原型ともいえる田の字型プランは本来、平面的にぐるぐる回れるサーキュレーションが成立していたのです。ところが、現在のプレファブ住宅やマンションに多くみられる廊下型の

独立性の高い個室主体のプランになりますと、サーキュレーションがない。これでは子供も自由に動きまわれません。やはり家には子供たちが自由に動き回れて、はじめて「家」としての意味が成立するのではないでしょうか。神学校ではそうした万人に意味のあるサーキュレーションを重視してみました。蛇足ながら、最近分かった事ですが、子供たちが自由に動き回ることは子供の脳の形成に非常に大切なことで、一説によれば、人間の脳は3歳までに80%が形成されるといいます。そうした大事な時期に、サーキュレーションに伴う刺激的な環境の無い廊下型の住宅でじっとしている子供たちは、脳の成長上、非常に危険な状態にあるといえます

そうしたことを本能的に感じて、神学校の設計に取り入れましたが、兵庫大学では、意図的に技法として使いました。一つ目は前述のサーキュレーション。二つ目は障壁を設けたことで、桂離宮の庭園で使われている空間の分節化がヒントになっています。常に水や木々が移ろいを見せ、進むにつれ次の異なる質の空間に入ることで、



神戸改革派神学校渡り廊下（撮影　松村芳治）

ハッとする新たな感動が生まれます。感動をつなげていこうとしますと、インテリアの分野でいう「シーンの転換」をとりこまないと難しい。三つ目の斜床は、身体の運動量を知らず知らずに増やすことで、脳の働きを活性化させ物事に感じる素地をつくることを意図しています。四つ目は、半外部空間を多用することですが、後で補足説明いたします。

過去の記憶を引き出す

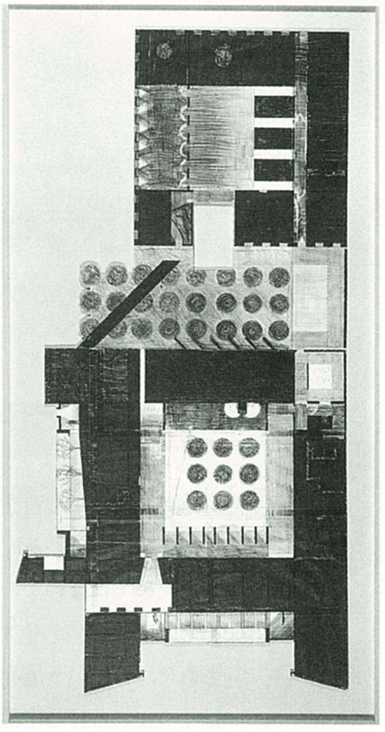
加藤　それは空間の中に物語をひそませるということでしょうか。

柏木　人が過去に遭遇した物語を引き出させる、ということでしょうか――。人間の脳には、過去の物語の記憶が断片となってぎっしりと蓄積されていますが、それらのどれかを引き出すことを狙っています。記憶を引き出すには何らかのきっかけがいります。以前にスカルパの「カステルベッキョ」を見たとき、床の切り込みから覗く地面にきらきら光があたっているのを眺めていますと、同じような光があたっていた別の空間の記憶が蘇ってきました。京都の「無隣庵」の中庭の記憶です。そうした、光も記憶の連鎖を生むきっかけになります。同じように記憶を引き出すものに、建築のアーチがあります。アーチをつくりますと面白いように記憶の連鎖を生み出しますが、少し安易すぎて私は好きではありません。

加藤　天井の高さ、しつらいの設定、門の高さなどは、空間における人間の立居振舞いの中から人間に身体を通じて空間を感じさせることによって脳の奥に存在する記憶を引き出す役割をはたします。

柏木　兵庫大学では、廊下が半外部空間となっており中庭となんとなく一体となり、領域があいまいなところです。半外部にすることで自然の移ろいを味方に引き入れることを考えた訳です。光が時間の経過につれ刻々と変化し多様な光の演出を感じることが出来ます。それに風や木々のそよぎが後押しする――。一方、自然の移ろいに接点を持たない定常的なところに、変化を生み出し感動を持続させることは、非常に難しいといえます。

加藤　あいまいな部分をつくることは、勇気がいります。あいまいな部分は予測がつきにくいところがあります。だから、あいまいな部分をできるだけ切り取ってしまって処理する。そうすれば設計上は安心です。しかし、話はそれで終わりです。あいまいな部分を出来るだけ残し、しかしそれをどれだけ予測し、どれほど制御することが出来るか。それが「設計の術」だという気がいたします。そうした空間はむしろ日本的な空間と言えます。西欧のそれはむしろ壁で内外や繋がりが完全に断ち切れとなります。日本的なものをなるだけ排除しようとする風潮が建築の世界を長いこと支配してい



神戸改革派神学校の起し絵図
（平面＋断面展開）
光や風の移ろいを図上体験することで設計内容がどんどん変更された痕跡が窺える。

た。日本的なものは、じつは身体的なものです。肌の感覚、耳の感性を重視しています。空間が一つにどこまでも繋がっています。柏木さんのつくる空間は、日本的な切れ目のないあいまいな空間の連続性が特徴ですね。それは人に優しい空間ともいえます。まず人間が居る。そこから全てが始まっているという感じがします。

インテリアから建築をつくる

柏木　私のやり方は、インテリアから建築を発想させているといえます。人間とは何なのか、人間が五感で感じるのは何か。その人間が存在するために、床、壁、天井があって空間が繋がっていく。「蟻の視点」から始まって「鳥の視点」で矛盾の出た事に修正をかけていく。その意味でも、インテリアから建築をつくることの方が正しいといえるでしょう。

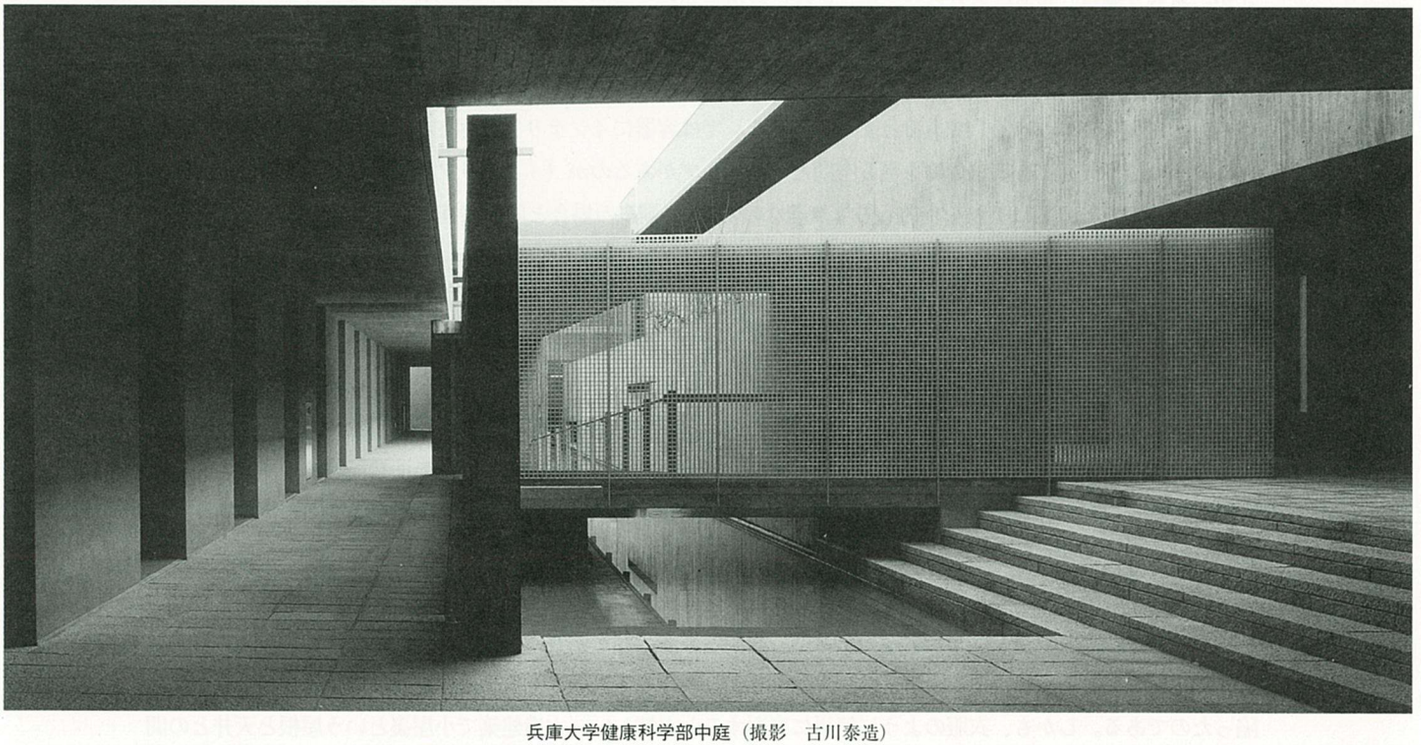
加藤　そうです。「はじめにインテリアがあった」のです。器があってその中身がインテリアではないのです。今、インテリアと建築は断絶しており、建築家は建築だけ、インテリアデザイナーは器の中身だけをつくっている状態です。ものを見ているがそのじつ、本質は見えていない状態ではないでしょうか。柏木さんは見ているけれど見えていなかったものを意識して見させるようにしたといえます。

柏木　私が設計段階でこだわってやることは、1／50の「起こし絵」をつくって、空間をしつこく歩き回って考えることです。最近はＣＧで簡単に三次元パースをつくれますが、私は平面図に断面展開を接ぎ足した二次元の図面上で、過去の体験を総動員して歩き回り考えることの方が空間を把握しやすい。この方法は、色・形・動きというばらばらの情報を統合して視覚認識していくという脳の構造からいっても、正しいのかも知れませんよ。

加藤　これから造形の世界は、ますますバーチャルな方向に向かっていきますが、しかし、だからこそ感じる空間の世界をつくっていかないといけない。インテリアもこれまでのように閉じた世界だけに依拠しているのではなく、開かれた感じる空間の領域をつくっていかないといけない。

柏木　「鳥の視点」で完成された既成概念で見る限り、人間が何を望んでいるかは見えてこないと思います。今日の建築やインテリアは、「蟻の視点」で、動物の一員でもある人間が本当に望む空間をつくっていくことが大切だと感じています。

（かしわぎ　こういち／かとう　つとむ）



兵庫大学健康科学部中庭（撮影　古川泰造）

総論 1

インテリアとは何か

——身体、知覚、行動とインテリア——

高橋　鷹志
東京大学名誉教授

はじめに

本特集の企画の背景に、インテリアが「建築の世界において積極的に語られることの少ない分野」であったことが指摘されている。私はその原因の一つが書院造によって完成した和風建築のインテリアの完成度の高さにあったためではないかと考える。しかも、そのインテリアは建築自体と不可分の一体として存在しており、かつ建物の内部にインテリア空間として自立しているという矛盾した性質を備えているために、インテリアとして識別されにくいという厄介な代物なのである。例えば畳をとりあげてみよう。それは建築の構成材であり、その表面はイス座における床面、座面、机面の三つの面の機能を兼ねており、更には衣の役割さえも持ち合せている。裸で畳の上に寝そべる様を想像していただきたい。畳は建築構成材、家具、衣類でもある。つまり、畳表は身体と建築との媒介項——インテリアそのものといってよいであろう。

畳表から眼を上に転じれば、障子・襖、天井の境界面をもつ直方体空間が姿を現わしている。「人間の精神は幾何学的である」と主張し、純粋幾何学的立体の住空間をデザインしたル・コルビジエの数百年以前に、それは書院造のインテリアに実在していたのである。

以来、わが国ではインテリアに対する思考を停止してしまったというのが私の仮説である。

裏返しの衣服

この小見出しが、「インテリアとは何か」という問いに対する一つの解答である。その根拠を示すには人類の進化の過程を遡る必要がある。衣服なしに体毛を纏って生活していた類人猿あるいは猿人には構築という行為はなく自然環境が住まい、生活空間であった。構築という人為の発生以前の建築空間の原型としては、自然地形のなかにある「洞窟」があげられる[※1]。そこには、身体を包む「空間」が存在している。しからばそこにインテリアは存在したのか。その空間は潜む場所であったかもしれないがインテリアというものはなく、あくまで地表面の延長であったと考える。

一方、建築空間は「容器」であるとよくいわれる。では容器にインテリアは存在しているのだろうか。器といえば食器の類が身近にある。食物を盛る空間とインテリアがあるのか（インテリアは人間との関係で成立するもので、食物のための器にそれを求めるのは無理なのだが）。洞窟の場合と同じようにここでも物を盛る表面はあったとしても、概念としてのインテリアは存在し得ないのだ。

井上氏は建築空間のもう一つの原型として「シェル（殻）」をあげている[※2]。これは洞窟とは異なり地表面上に種々の材料でつくった人を包み込む構築空間といえよう。周知のとおり材料には土、草木、石、布など多様なものが用いられた。「殻」と前後して人間はもう一つ人体を包み込む「衣服」をつくりだした。概念的にいえば洞窟の内表面を剥がしてできたものが「殻」だとすれば、人間の体表面の毛を剥いだものが「衣服」であろう。この二つの人工物の特性は、物理的性状の変形という側面からみれば大地や人体の表面機能の一部が「膜」として独立したものといえるだろう。剥がされた膜は二つの表面を持つ。「殻」の場合は内部の空間に接する面、外部の自然環境に接する面であり、「衣服」では体に触れる面、外から見える面である。別の見方をすれば、地表面、体表面という「表」の裏側が外界に晒されたことになる。

しかし、この両者の間には大きな違いがある。衣服の裏は人びとが普段見ることはないのだが殻の裏は内部空間を取り囲む表面として日夜、人びとの目に触れることになる。人間は「地表面」の裏側を見て生活する羽目に陥ったのである。しかも、衣服のように簡単に裏返すことが難しい。木造建築で小屋裏という屋根と天井との間

の空間を表わすことばがあるが、当初は天井はなかったので裏が露出していたのである。したがって、殻を衣服のように裏返すことができないだろうかということが、人びとの無意識の願望として育っていったと思われる。殻の内部にいることは、膨張した衣服の裏側に包まれている状態ということもできよう。

人びとは裏を見る、裏から見下ろされることからの脱出に挑むことになる。膨張した衣服を裏返し、表に包まれることへの試みが始まった——これこそインテリアデザイン行為であり、小見出しの意味である。

インテリアの誕生、社会文化的環境としてのインテリア

殻の裏側といっても、その材料、構法によってその意味合いは異なる。石造ドームと木軸草葺屋根と比べれば後者の方が裏のイメージが強いであろう。西洋のインテリアは石の内表面への装飾（彫刻，色彩）によって「表」化を図ったのに対して、竪穴住居から始まったわが国の住宅は独自の途を辿っていった。高床によって「床面」はまずインテリアの地位が与えられた。更には（これが最も重要な要素であったのだが）大地から切り離された小屋（組）の下の水平天井面が出現したことにより、「殻」の中に「表」が誕生したのである。加えて障子、襖、欄間などの垂直面により、水平面の下は純粋直方体の室空間が連結することになった。建具を閉じた状態では8つのインテリア面で区画された室が成立した。インテリアの空間概念には、「表」面の知覚が必要不可欠なのである。

こうしたインテリア空間誕生以前から殻の内部は、人びとの生活、行動の場面であった。行動場面を欠いた抽象的空間にはインテリアは存在し得ない。この場所あるいはこの箱は何にでも使えますよ、という物理的環境の形成だけではインテリアをつくったことにならないのである。あるいは、室内でのある行動に必要な物品（用具や家具）とその配列、室内気候などの環境条件の呈示するだけではインテリアは成立しない。ここにあげた種々の物理的環境条件と人間との関係についての考察が求められている。やや飛躍していえば、ある場面における行動規範（作法）などの社会文化的環境にまで踏み込まなければインテリアを把握したことにならないのだ。

インテリアに関わる仕事は医療に例えれば、内科、外科などの身体の診断、治療だけでなく、臨床心理の分野を含んだものと解してよいだろう。襖で仕切られた続き間を例にとれば、書院造の場合のように両室の間に主従の関係があるとすると、主たる室の各面は当然「表」面としてつくられる。しかし境界の襖は二室で共用され、片面は、物理的空間の上からは従たる室の面であるものの、主たる室に帰属しており、従たる室にいる人びとはその襖の面を主たる室の外「表」面として知覚し、またそうしたデザインが施される。更には天井面にも差異がでてくるであろう。インテリアは社会文化的環境を抜きには存在し得ない。ここで詳しく述べる余裕はないが、既存の社会的関係を絶ち切る力も持ち合せていることも付け加えておこう。

環境移行からみたインテリア

環境移行とは、環境心理・行動学の用語で、「人間がある環境から他の環境へ移ること、および、そこで生ずる状態のこと」つまり人間・環境系の時間的状況変化を意味する概念である。インテリアにおける人間・環境系の時間的変化にも適用できる。近年の地球環境問題に端を発した建築のつくり方、維持の方途に対する考え方の変革は、例えばSI（スケルトン・インフィル）住宅への関心と普及にみられるとおりである。長寿命の建物の躯体あるいは設備システムに挿入されるインフィルとしての住宅には、家族やライフスタイルの変化に応じて変形・変質できるインテリアが求められる。住宅に限らず事務・商業など広くビルディングタイプ一般も同様の問題に直面している。あるいは転用という別の用途に供されることも多くなるであろう。そうした対症療法的な仕事は勿論、予め不確定な環境移行を見込んだ計画（これまでの建築計画の領域外の仕事）こそ、インテリアという計画の領分といえるであろう。

これまで、インテリアに関する構成材は主たる用途別に特化してデザイン、利用されてきたが、環境移行に配慮した計画においては、建物種別（ビルディングタイプ）という考え方は大きく変わる可能性がある。かつて畳が多様な行動場面でインテリアの主役を勤めてきたように、適応性の高いインテリア構成要素が生れる素地ができつつある。ミニマリズムという概念が、建築をはじめ造形デザインに変革を与えたように、環境移行に適応する「インテリアリズム」はデザイン界に大きな影響力を持つと考える。

（たかはし　たかし）

※1 井上充夫、日本建築の空間、SD選書37、鹿島出版会、1969
※2 井上充夫、「インテリア学——その古典と現代」基調講演、インテリア学講話、日本インテリア学会東海支部編、1996所収

総論 2

これからのデザイナーの役割

――地球規模で環境問題をとらえ、デザインは風土に合わせる――

木村戦太郎

筑波技術短期大学教授、㈳日本インテリアデザイナー協会理事長

はじめに

統計によれば日本の住宅は約30年で建て替えられています。イギリスの140年を別格としても欧米各国と比べて短命過ぎるのは何故でしょう。平成５年の住宅統計によれば持家の平均床面積は118.45平米あり、狭さが理由で無ければ品質でしょうか。平成９年の産業廃棄物・業種別統計によれば建設業は約7,700万トンで第３位、種類別では建設瓦礫類約5,700万トンで第３位となっています。平成８年度の廃棄物最終処分場の残余年数は一般廃棄物で8.8年、産業廃棄物で3.1年、既に捨てる場所が無い状況です。省資源・ゴミ処理の点からも改善が迫られています。

21世紀の日本人の住生活のClassicを創造

日本は先人達の努力によって戦後の荒廃から奇跡とも云われる復興を遂げ、繁栄の時代を築きました。今我々は世界第２位の経済力を持ち、多くの便利な製品に囲まれて日々の行為や作業については快適な毎日を過ごしています。しかしその物質的豊かさが、生活の質的豊かさを実現している実感が持てないでいます。

我々日本人は戦後の奇跡的な経済復興と同時に、生活を劇的に変えました。畳に床座の生活から椅子座洋風の住様式へ、そして大家族から核家族に移行しました。住様式と家族形態をほぼ同時に変えたのです。さらに、近代化と経済的豊かさがもたらした様々な生活用品が家庭に導入され、生活を激変させて来ました。この混乱の中で我々は、自分に合った生活文化を持てないままで居るのだと思います。生活には様々な行為や行動、交流や誕生、加齢や別離もあります。住いは、誰もが過去を背負って生き、未来に向かって歩む時空間です。我々は戦前までの住文化の多くを切り捨てながら、絶えず未体験のゾーンを手探りで歩いて来たのだと思います。例えば私は、親から衣食については色々と教えられましたが、住い方に就いてはほとんど教えられませんでした。親として自分の経験を語れる状況では無かったのだと思います。

衣食に比べ住生活では、経験を積むのに時間が掛かります。我々は食事を毎日３回食べ、洋服も生涯に何十着も購入します。衣食に関しては、短期間に充分で様々な経験が積めるのです。しかし住宅や家具・インテリアを何度も買い換えたり作り換えたり出来る人は滅多にいません。従って日本人の大半は、未だに洋風住生活のビギナーと言えるのかも知れません。

では今、我々はどうすれば良いのでしょうか。私は、我々デザイナーの取り組みにも問題ありと思っています。私自身戦後の焼け跡育ちで、食物にも苦労した経験を持っています。洋画が好きで、画面に映し出される欧米の豊かな素晴らしい生活に憧れ、それがデザイナーを志向する切っ掛けにもなりました。大学の卒業制作には椅子を選び、社会に出てからも日本の伝統文化を素晴らしいとは感じながら、興味の中心は欧米のデザインでした。とにかく常識に捕らわれずに、新しい発想のデザインを提案することに夢中でした。デザイン教育も社会も欧米に追いつけ追い越せで、そのことに疑問を感じることは無かったのです。

この様にして我々は、西欧の風土と伝統・文化から生まれた椅子座の様式を移植し、それらを体験的にでは無く、どちらかと言えば知的に理解し学習して作品を生み出して来ました。本来住環境は、住まい方や文化、風土に合わせて発想されるべきですが、日本の場合は形から入ったと言えましょう。伝統や文化を背負わず、経験に裏打ちされなかった分自由な発想も生まれ、悪く云えば何でもありの提案も多かった様に思います。

新世紀を迎え我々は、20世紀に解決出来なかった様々な問題に直面しています。冒頭で触れた環境問題はその一つですが、そこでの責任も踏まえ住環境を捉え直さなければならないと思います。我々は21世紀に日本人の住生活にとってのClassic（規範的な、洗練された）を創らなければならないと考えます。それは勿論一般ユーザー

にも理解され、日本人のアイデンティティーに添うものでもなければなりません。私がインテリアデザインを始めた頃、親達から受継ぐ椅子座の住文化は伝統として有りませんでしたが、ようやく半世紀の経験を積み重ねました。

建築家やデザイナーは自らの生活を大切に生き、その経験を踏まえてデザインすること、その成果を5年10年、さらにもっと長い時間軸で評価する考え方を社会に広め、定着する必要がありそうです。人は自分の未来を知る事は出来ませんが継続した文化の中には、先人の様々な経験が活かされ、知恵が織り込まれています。歳を取ってなるほどと感じるデザインが秘められています。文化は時が磨きを掛け、経験で洗練するものとも言えましょう。長い時間を掛けて評価し、修正していくしか方法がないと思っています。

「集社会的デザイン」と「離社会的デザイン」

エドワード・ホールは「隠れた次元」の中で、会話の発生しやすい空間（家具配置や雰囲気など）・し難い空間について述べ、それらに「集社会的空間」「離社会的空間」の言葉を当てています。やや乱暴ですが私は、この言葉を転用して「集社会的デザイン」「離社会的デザイン」という考え方で「道具」を観ています。この言葉は同時に「人をスポイルする・しない」こととも重なっている事が多いとも考えます。どんな道具であれ、それを使いこなすには操作技術が必要です。道具の使用目的は何かを加工する事にありますが、加工するに当たっては、先ず素材を知る事とどの様に加工するかを知らねばなりません。そしてこのどの様にと云う部分は、多かれ少なかれ文化との関係を持っています。従って道具は、その文化との適切な関係を持ち、操作技術もそれに添っていなければなりません。例えば包丁を考えると、初心者とプロの技の差は単に切り刻む技術の違いだけでなく、料理法と器への盛りつけ、器選びの見識にも及びます。さらに包丁の研ぎ方、砥石の知識も必要です。これらの全てをマニュアル本やPCのヘルプで伝えることは不可能です。文化や技術に関しては、文字化出来ない情報が多いことを悟るべきだと思います。仮に家庭料理の省力化を意図して万能スライサーを考案したとすればそれは、祖母や母から子や孫に我が家の味を伝える機会を奪うだけでなく、素材を深く知る機会を奪い触れ合いで深まる肉親の絆構築の機会も奪うのです。そして、人も人間関係もスポイルするのです。私はこの様な道具を「離社会的デザイン」だと考えます。昨今のパーソナルツールの大半が、この様な傾向を持っていると考えます。

これからの住まいに必要な「プレザントネス」な観点

住まいにおいても同様な議論が必要だと考えます。例えば、高気密高断熱の電化住宅で幼児を健全に育めるのでしょうか。我々の少年時代と異なり、現代の子供達が自然に触れる機会・学ぶ機会は極端に減少しているはずです。私の大学に入学する学生でも、自然に囲まれた環境に育ちながらTVゲーム中心の遊び経験者が増えている様です。養老孟司氏によれば、我々は脳の作った人口都市の中で、脳が作り続ける人工物に囲まれ「脳化社会」に住んでいるそうです。そして氏は、イキイキとした自然体験を持たない子供達の脳の発達を心配しています。生物としての健全な発育が、健全な脳の成長に欠かせないからだそうです。確かに高気密高断熱は省エネルギーで、電化住宅は高齢者や働く二人にとって便利でしょうが、幼児や学童はそこから“生きること”について何を学ぶのでしょうか。泥遊びや木登りのチャンスのない都会ッ子にとって、家事手伝いも大事な学習の場です。それは便利な反面で、物の仕組みを知る機会を奪い、考える力や生活技術を衰退させるものです。

名古屋大学の久野　覚氏によれば、WHOの憲章に健康の定義が定められていて、「健康とは単に病気でないとか虚弱でないというだけでなく、身体的・精神的・社会的に十分に良好な状態をいう」とされ、衛生的なだけでなく快適性も含むそうです。快適性は、積極的な快適性と消極的な快適性があり、不快が無い消極的な快適性と、面白い・楽しい・気持ちが良いといった積極的な快適性があって、それをプレザントネスと呼ぶそうです。視環境では楽しい、温熱環境では気持ちがいいに相当します。久野氏は、温熱環境、視環境、快適環境について、均質なものよりも変化がある場合のほうがプレザントネスだとしています。面白いのは人に示す優しさも2種類あり、しっかり外乱をガードするものよりも、遠くから見守り本当に危ない場合だけガードする優しさがプレザントネスだとする点で、理由は前者では相手の適応力がアップしないからだとしています。子供を育む空間として住まいを再考する際の、観点の一つではないでしょうか。

今後我々が志向すべきは“人の心と身体を育み、生活を包み込むエコロジカルなインテリア環境”の実現であり、“グローバルに考えローカルに行動する”とは“地球規模で環境問題をとらえ、デザインは風土に合わせる”と読み替える事ではないでしょうか。

（きむら　せんたろう）

インテリアプランニングの仕事

栗山　正也
KDアトリエ代表、JIPA・日本インテリアプランナー協会協議会常務理事

21世紀は「環境の世紀」そして「インテリアの時代」の到来と言われています。生活や仕事の場が重視され、その多様化と個性化への要求は建築レベルではなく、より身近なインテリアレベルで応えることが重要になってくるでしょう。このようなインテリアに対する意識の高まりは、インテリアを創造的な生活文化として捉える時代の到来といえます。《住居系施設、文化系施設、公共系施設、労働系施設、商業施設、健康・厚生系施設等》の建築空間の複合化、高機能化には、そこに関わる人々の生活との関係をより緻密に把握するインテリアプランニング手法の重要性が増します。建築物に求められる長寿命化とリノベーションは、スケルトン／インフィル方式への流れを強め、基盤としての〈スケルトン＝ベースビル〉と、変化する生活環境としての〈インフィル＝インテリア〉の考え方が広まり、インテリアが重視される時代となります。

さて、「インテリアの時代」を迎えるに当って必要なことは、インテリア実務の充実を図ることは無論ですが、その仕事を多くの人に正しく理解してもらうことが大切です。インテリアの仕事と言えば、窓のカーテンの取替えからマンションの壁紙の貼り替え、高級ホテルのインテリアデザインまでその対象範囲は広く、仕事の質、内容も大変に幅があります。

JIPA・日本インテリプランナー協会協議会では、これらの業務をトータルに「インテリアプランニング」と捉え、わかりやすく整理することを検討してきました。そこで、インテリアの仕事＜インテリアプランニング＞業務の実態に関するアンケート・ヒアリング調査等により、業務内容の把握と分析を行い、さらに設計事務所等から提示された資料等を参考に整理したものが以下にまとめたものです。

インテリアの仕事

⑴インテリアプランニング

一般的には建築の内部空間について、その使用目的に応じ、人々が望ましいと感じる環境を得るために、計画し設計する行為を指します。しかし、実際は建築本体と内部空間の領域区分についても確定しがたい要素も多く、また、計画の重要な要素として空間の中で使う様々なエレメントのデザインや選定の業務等もあり、これらも他の業務領域と重複することになります。この様にインテリアプランニングは、他の領域と関係し、重複しながら人々の生活の場を総体化するという複雑で包括的な業務ということがいえます。

⑵インテリアプランニングの流れ

インテリアは人々の生活空間を対象とします。そのため空間を計画する上で最も重要な要素は人々の生活です。インテリアプランニングは、人々の生活が空間に何を求め、何を期待しているかを探り、確認することからスタートすると言ってよいでしょう。そして、様々な背景・状況を把握・理解し、それをもとに生活空間のあるべき方向を策定します。これが＜プログラミング＞と言う業務の段階と言えます。これは建築の構想・計画の段階と重複する業務と見ることが出来ますが、より緻密に人間側からアプローチすることがインテリアのポイントです。そして、更に社会、文化、経済、環境、建築などの条件を総合的に判断し、空間を具体化するための計画・設計をおこないます。これを＜デザイン＞の段階と呼ぶことが出来ます。

最終段階として、空間を実際に造り整える段階に進みます。構想に添って、適切、確実に、実体化されるプロセスの指導・監理、そし

インテリアプランニングのフロー
―6つのフェースとその業務内容―

〔プログラミング業務〕

- 構想段階から参画し「人と建築」の調和を目指したコンセプトを提案します。
- プランニングの基本を「生活環境」という人々の身近な視点で捉え、プログラムづくりを行います。

Phase① 調査・分析	Phase② コンセプト策定
構想への参画・インテリア計画の条件把握	基本構想の提案と計画目標の決定
・企画内容の確認 ・計画・設計範囲/条件等の確認 ・施主及び使用者のニーズの把握 ・行動・生活・業務等の調査 ・文化性、社会性等の背景調査 ・環境・健康の調査・対策 ・類似施設の使い方・運用等の調査 ・関連/類似建物の実例調査 ・将来計画と変化予測 ・関連法規等の確認	・イメージコンセプト構築 ・ゾーニング計画 ・動線計画 ・スペース計画（用途・規模設定） ・基本レイアウト（家具を含む）の検討・策定 ・仕上/仕様等グレードの設定 ・予算枠（アートワーク含む）の設定 ・ユニバーサル環境の提案 ・健康・環境対策の提案 ・ライフサイクルアセスメントの提案 ・プレゼンテーション

て完成された後も、その空間が適切に維持されるためのコンサル、必要に応じ内部機能を拡充、リノベーションするための計画の提案など、これらが<マネージメント>という一連の業務といえます。インテリアという生活に近い領域は、常に人の生活環境を中心に置き、その環境の在りかたを注視し、整えていくことが大切と考えます。

インテリアの仕事の独自性

以下は業務の流れとその内容の整理で、これが基本となります。目的や対象、規模の違いによって業務の組み合わせのバリエーションは様々となります。インテリアの仕事を多くの人々に正しく理解してもらい、適正な評価を得るために、インテリア業務をこのように明確にすることは大切なことです。

さて、インテリアの時代を迎えるに当って、インテリア界全体でコンセンサスを得ておく必要のあることが他にも多々あるようです。現在進行中の「インテリア工事標準仕様書」プロジェクトもその一つです。草案作成は、日本インテリア学会が中心となり、他にインテリア三団体（日本インテリアプランナー協会協議会、㈳日本インテリアデザイナー協会、㈳インテリア産業協会）が協力して、検討を進めています。これまで各種の建築工事仕様書の一部として取り扱われていたインテリア工事を、インテリアとしての特徴を考慮し、独自の仕様書としてまとめられることになります。完成が待たれるところです。

（くりやま　まさや）

〔デザイン業務〕
●コンセプトの実現、達成の為の具体案を計画し設計します。
●計画・設計が適確に実施される為の図書/指示書等を作成します。

〔マネージメント業務〕
●適正に施設、装備等が完成する為の指導/監理を行います。
●完成後も施設が最適な状態を維持する為のコンサルティングを行います。

Phase③ 基本設計
基本計画・設計の提案と決定

- 基本平面・家具配置計画
- 家具・什器計画
- 収納計画
- 材料・仕様の計画
- 色彩計画
- 照明計画
- ＣＩ計画
- サイン計画
- 緑化計画
- 防災（地震・火災等）計画
- 設備（衛生・電気・情報・音響等）計画／調整
- セキュリティ計画
- デザインの提案
- 建築構造の検討/調整
- 関連法規の検討/調整

Phase④ 実施設計
実施計画及び実施設計・図書等の作成

- 工法・材料の検討・選定
- 実施設計図の作成
- 特殊納まり・ディテール等の検討
- 構造・設備との検討/調整
- 各種設備図作成
- 仕上/仕様書作成
- 別途工事との調整
- 各区分工事の調整
- 予算書作成
- 発注書作成/提案
- 工程の調整／確認
- ファシリティマネージメントのソフトの提案

Phase⑤ 監理
発注・監理業務

- 施工者・専門メーカー等の決定
- 設計意図の伝達
- 現場管理体制づくり
- 施工図の検討・受領
- 仕様の調整・材料・色の決定
- モックアップ・モデルルーム・見本の決定
- 品質管理への参画
- 工程確認等
- 工事費精算確認等
- 検査・検収等
- 竣工資料等の作成
- 使い方マニュアル作成
- 保守契約マニュアル作成
- 引き渡し業務

Phase⑥ 運用・管理
運用・管理の支援および将来の施設変更計画への参画

- 使用者移転の支援業務
- 家具・施設の各種データ管理等（ファシリティマネージメント）の支援
- FMデータの定期メンテナンス
- 使用開始後の意識調査
- 環境調査・保全業務等の支援
- 将来の拡張・更新等計画の策定
- リニューアル/リノベーション計画提案

各論 2

インテリアデザインとコラボレーション

駒田　哲男
AD&A代表取締役

コラボレーションの実際

インテリアデザインを行う場合、インテリアデザイナーは建築家、設備技術者、ライティングデザイナー、サイン・グラフィックデザイナー、グリーンコーディネーターおよびアートコンサルタント等とプロジェクトチームを組みコラボレーションを行う。チームを組まず、インテリアデザイナーが単独で、上記全ての役割をこなすことは可能だが、中規模以上のプロジェクトでは、フィーが許すかぎり、多くのスペシャリストとのコラボレーションによる方がより完成度の高い結果が得られる。特にアートコンサルタントをチームに加え、アートをインテリアデザインに生かす効果には素晴らしいものがある。西洋的な感覚では、居住空間にアートがなければ、貧困を意味するが、日本の現状はまさにそのようなインテリア空間が多いからだ。

アートコンサルタントの業務

アートコンサルタントは、プロジェクトにふさわしいアート計画を作成し、予算・工程監理、発注、制作監理、現場取合調整、搬入・設置監理、検査・引渡しを担当する。アート計画ではアートの配置、種類、作家、員数、スケール・サイズ、予算が計画される。作業は図面の前の段階で、どこにどういったものがふさわしいか、大きさも５m、７m、９mどれほどが必要なのか、予算もいかほどが適当なのか判断が求められる。用いるアート数が多いほど選択肢が多く、計画は難しくなり、竣工に合わせた手配が重要となる。

アートコンサルタントのポイント

アート計画で１番大事なのは、プロジェクトのテーマにもとづいて、アート計画のテーマを立て、クライアント及び建築家に、より豊かなヴィジョンを提供することである。そのために、入念に打ち合わせ、それまでのドキュメントと図面の読み込み、現地調査を行い、そのプロジェクトにふさわしい作家を捜し、テーマを設定しプレゼンテーションする。そうして、クライアント、建築家と意志のすりあわせをはかる。目の前に実在しないアートを発注するのは、楽しみであると同時に、大きな不安でもあるが、この不安を取り除くのもアートコンサルタントの大事な役割である。

アーティスト起用の注意点

インテリアデザインにはアートが必要なのに、アーティストが自分のアートを建築装飾で良しとしないところに問題が生じる。建築装飾で良しとするアーティストを起用すれば問題はないが、そのようなアーティストで生き生きとした良い作品をつくる人を知らない。これは、現代のアーティストは、何かの装飾であることを拒否して成立しているのだから、当然の事だと考えられる。空間に調和して目立たないアートをアーティストに求めるのは間違いである。

私たちが求めるのは、建築空間とアートとの、時代の息吹の一致であり、自由な精神の汪溢（おういつ）であり、空間秩序にアートが隷属的でないことである。これが空間に異質感＝異和感を生み、心地良い緊張感をもたらす。異和感があるからだめと判断するのは間違いで、異

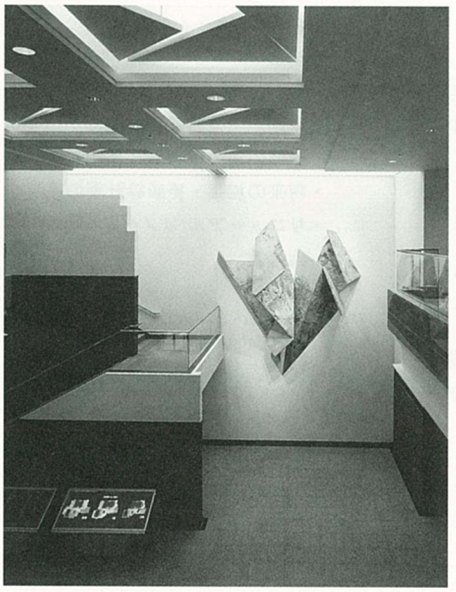


写真１

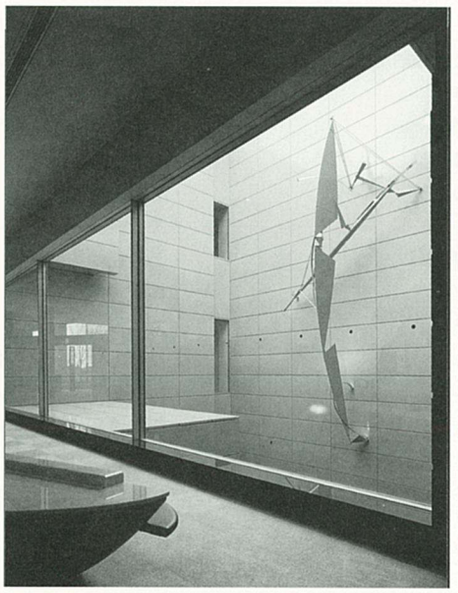


写真２

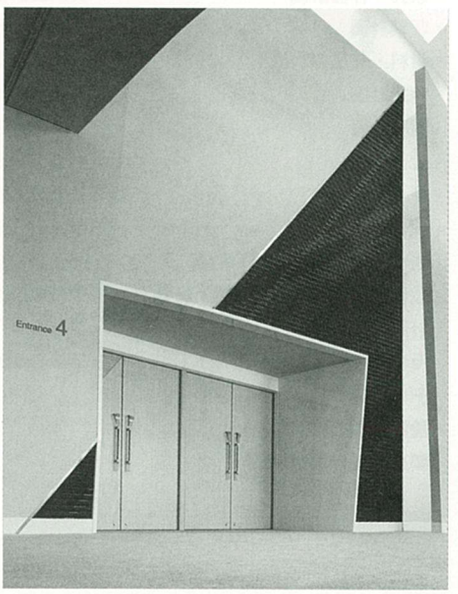


写真３

和感はアートに固有のものといえる。この異和感こそが、今まで見たことがない新しい世界であれ、癒しの世界であれ、未経験のわくわくする感動をもたらすものなのだ。

このようなアートを作りうるアーティストは自己主張が強く、デザイナーと空間造型において競いあう。そのような関係においてはじめて、より高い次元に止揚される創造的なコラボレーションが生まれる。

アーティストの問題点

建築用のアートの需要は多くないため、アーティストは、建築的スケールの対応に苦労する。100号の絵をうまく描けても1000号となるとうまく描ける確信はアーティストにもないのが普通だ。100号の絵で用いた10倍の太さのブラシを1000号に用いても、10倍のストロークで描くことは、腕が伸びない限りできず、再現は不可能である。無理して作っても拡大しただけのような作品では魅力が消失してしまう。

高名なアーティストにはまた別の問題がある。アーティスト選びは、難しいから、予算さえあれば、有名なアーティストが無難として指名されるケースが多くみられる。この場合よくあるのは、過去の作品の焼き直しを、空間のプロポーションを無視した巨大さで、持ち込むことだ。指名されたアーティストは自分のアイデンティティが高く評価されているのを利用して、コラボレーションをせず結果として新鮮味に欠けるものができてしまう。また、高名なアーティストは、高齢であることが多く、彫刻等体力が必要な場合、かつての腕の冴えを期待できないこともある。

アートコンサルタントの必要性

アートコンサルタントは、デザインとアートを結び、私達の居住空間に現代の息吹を吹き込み、感動を味わえるものにするためにぜひ必要である。アートコンサルタントが、マネジメントを引き受けることで、アーティストは、より良い作品づくりに集中することができる。また、アートと建築との納まりは、専門家としてのアートコンサルタントの仕事であり、施工上のタイムリーな現場調整もアーティストではなく、アートコンサルタントが責任を持って行う必要がある。

また、アートコンサルタントがいないため寄付でまったくテーマにそぐわないアートが設置されてしまう例は、枚挙にいとまがない。アート計画を立てていると寄付もその中に取り込むように手を打って、これを防ぐことができる。

さらに、アートコンサルタントがいないため、アート選定委員会を美術関係者がとりしきり、建築空間とのマッチングということが軽視される例も多くみられる。委員会に当の建築家・インテリアデザイナーが加えられないといったひどい例もあるほどだ。こうした事態に陥らないためにも、アートコンサルタントの参加はぜひ必要である。

最後に

私達はアメリカで、インテリアデザインは衣服のように、クライアントに合わせて誂えるものであり、アートも同時に誂えるものであることを学んだ。そして、アートコンサルタントの活躍の成果を眼のあたりにし、日本でも、そのような職能の必要性を、25年以上前に強く感じた。当時、そのような職種はなく、人材も見あたらなかった。そこで、自ら切り拓くべく20年前からアートギャラリーを運営し、アーティストとのコラボレーションをはかり、建築・インテリア空間造りへの参加の機会を提供してきた。最近ようやく、私達のインテリアデザインとアートコンサルティングを同時に行うスタイルが認知を得るようになり、アートコンサルタントが市民権を得てきたことを実感するようになった。

以上、アートコンサルタントとのコラボレーションについて詳細を述べたが、他のスペシャリストとのコラボレーションにおいても全く同様の原理で同様にあてはまる部分が多いと思われる。

（こまだ　てつお）

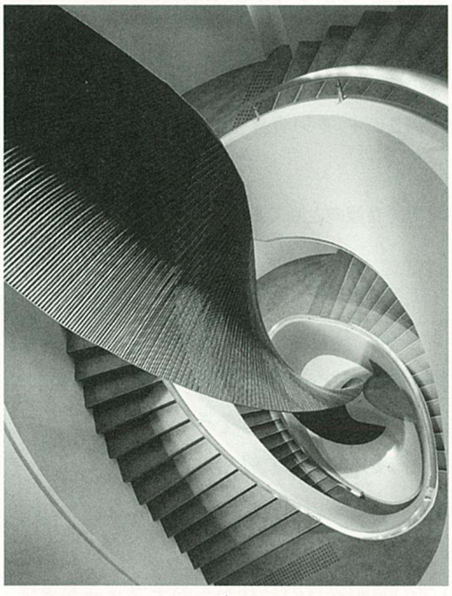


写真4

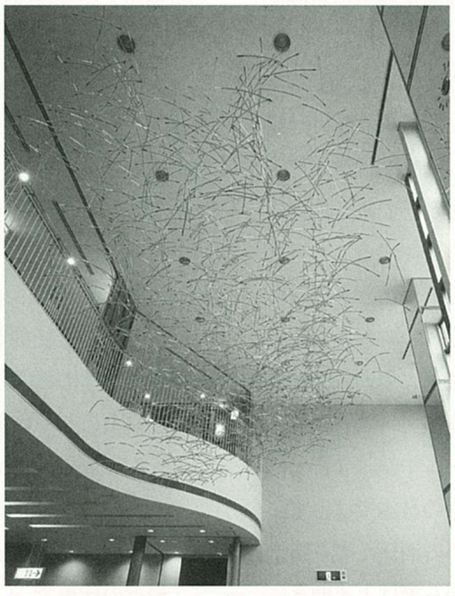


写真5

写真はいずれも「泉の森ホール」（設計：東畑建築事務所／アートコンサルタント：AD&A／撮影：柄松　稔）
写真1　エントランスホール　レリーフオブジェ（栗岡昂生作）
写真2　光庭　オブジェ（吉田和央作）
写真3　ホワイエ　壁タペストリー仕上（草間詰雄作）
写真4　回り階段　ハンギングタペストリー（草間詰雄作）
写真5　吹抜　ハンギングモビール（中川真木作）

インテリアデザイナー・暮らしの文化を創造する使命

喜多　俊之
IDKデザイン研究所代表

日本人の住宅インテリアへの意識

――今日は、インテリアデザイナーの職能の可能性を考えるにあたって、世界を相手に幅広いデザイン活動をされている喜多俊之氏に、デザインの将来性、可能性、そしてインテリアデザイナーの職能についてお話をうかがいたいと思います。まず、インテリアをデザインすることとは、どのようにお考えでしょうか。

喜多　生活空間の中のインテリアを考えると、欧米と日本では少し事情が異なるような思いがします。戦後の住宅政策の出遅れなどから、急激な生活の洋風化と我が国の伝統的な和風の暮らしに混乱があり、和洋折衷の生活様式が生まれました。そうしたところから我々、日本人の伝統的文化に対する価値観の転換などにより、暮らしの空間に対する日本独自のインテリアが低迷したまま現在に至っているように思えます。

それは同じように敗戦を経験し、復興したイタリアやドイツと比べても歴然としています。戦後すぐは同じように住宅事情も悪く、人々は食べていくことが精一杯で空間などを考える余裕もなかったことは共通しています。しかし、イタリアでは1960年代に入ると生活の中のインテリアに目を向け豊かな空間をつくり出していきました。たとえば広い住宅をつくることなどです。一方、日本は経済が立ち直っても、暮らしの中の基本である空間のインテリアについては、あいかわらず立ち遅れています。その最大の理由は、家と暮らしについての考え方に違いがあることではないでしょうか。昔の日本に見られたように欧米では家というのは、家族が暮らす空間であるのと同時に、お客様を迎える社交の場でもあります。現在の我が国の家を見ますと、そうした社交の場としての意識が非常に希薄ではないでしょうか。

それは単なる器やモノだけのハードの問題でなく、人と人とのコミュニケーションの場として、「家」や「空間」を考えるという意識の問題でもあるのです。家は演劇に例えれば、家族が暮らす「ケ」の世界である楽屋と、「ハレ」の世界である社交の場である舞台で成り立っています。人々が互いに家庭を訪ねて、交流することによって、住宅空間に心を配るようになります。そうしたことがあたりまえになれば、自然と掃除もし、花も飾り、くつろいでもらえるように椅子やテーブルにも工夫をしていくようになります。人が出入りすることでコミニュケーションの場が出来て初めて「家」になると思います。同じアジアの国々でも、シンガポールや韓国などでは我が国より住宅空間が立派になっています。現在の日本では、家に人を呼ぶ場が無いので、そうしたときにはつい外の洒落た喫茶店やクラブを使うことが多いように思われます。だから家はよそゆきにはならないのです。

――そうした生活の向上が、我が国のインテリアデザインを考える前に必要であるということですね。

喜多　昔、向こう三軒両隣という言葉がありました。日々の生活の中で、近所の人たちと言葉をかけあい苦楽を共にするといった良き近隣関係の上に日常の暮らしが成り立っていました。それがクローズドな住宅様式への変化、我々日本人の考え方や価値観の変化の中で、他人と共に生活を楽しむという気持ちが日常的に少なくなってきたのではないでしょうか。

インテリアデザイナーはルールづくりをアドバイス

――インテリアデザイナーの職能を考えると、そうしたことにどう対処すべきでしょうか。

喜多　インテリアデザイナーは、たんに色や形のコーディネートだけでなく、専門家として暮らしの上で、お客様を迎える時のシチュエーションに応じたルールづくりをアドバイスできるようになってもよいと思います。わが家の催しがフォーマルかそうでないか迎える人によって、また迎える理由によっても異なりますし、季節によっても時間によっても異なります。この料理にはこの器や花をというのもあります。もちろん、それぞれの家の住宅事情も異なりますし、経済状況もあります。人と人とのコミニュケーションの現場の核として考え、プロフェッショナルとしてコーディネートする立場に立たなくてはなりません。日本の場合、ファッションの世界ではそうしたことは進んでいますが、インテリアの世界では残念ながら進んでいるとはいえません。インテリアの中心は人であり、人と人とのコミュニケーションです。日本の多くのインテリアデザインスクールでは、そうした根幹のことをはじめに教えてもよいと考えます。たんに家具の形や色だけのインテリアデザインエレメントではないのです。

――いま、デザインの世界的な傾向として日本の伝統的なものに目が向けられています。

喜多　例えば、イタリアのデザイナーのアントニオ・チッテリオは、日本の伝統的なシンプルな暮らしに大変興味を持っています。アルマーニの最近の家具インテリアデザインは、日本やオリエンタルを基調にしています。今、ヨーロッパではそうしたオリエンタル、とくに和風の影響がデザインの傾向に顕著にみられます。ただ、そうした海外から羨望の眼差しでみられる和風をベースに持つ我々日本人が、そうした伝統的なものをなおざりにしてきました。

最近の仕事で、イタリアの照明器具の会社からのオファーがきて、

日本の伝統的な和紙を使った照明器具を発表しました。それは30年ほど前のものですが、1960年代にたまたま、和紙の手漉き職人と知り合う機会があり、和紙の需要減少から和紙産業の衰退と後継者難の実情を聞き、何とかしたいという気持ちをずっともっていました。そうした時に、イタリアの会社から照明器具をデザインしてほしいという話があって、その和紙を使ってつくりました。こうしたものをつくることによって、日本の伝統産業が見直され需要が少しでも増えることに繋がるならば、ほんとうにうれしいことだと思ったのです。

日本文化の原点は心豊かな暮らし

――そうして海外で評価を受けたことで注目され、国内でも見直されるということも多々ありますね。先生御自身、ものづくりでも世界に目を向けておられます。

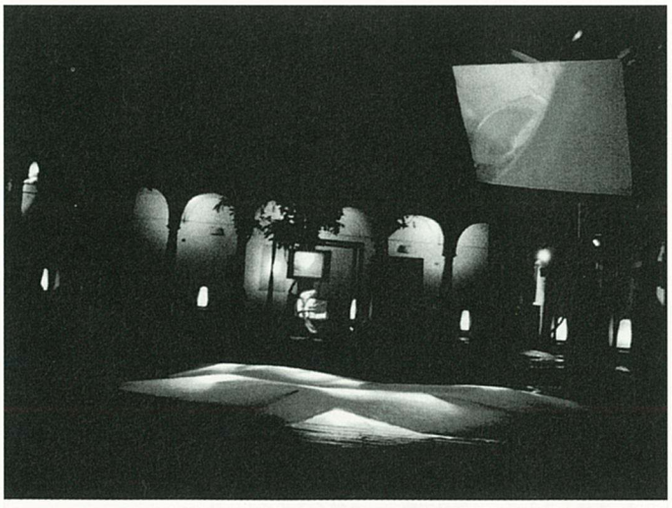
喜多　私自身は日本でものづくりをやりたかったのですが、先ほど申しましたオリジナル家具は、国内に売る市場がありませんでした。そうしたところからイタリアを中心にした海外の家具メーカーから話がありまして、始まったのです。現在、世界的な潮流としまして、地球環境とか省エネルギーに目が向けられています。しかし、それらはもともと我が国の伝統的な文化の根幹なわけです。日本文化の原点は、最小限の素材で最大限の効果を生むことからきています。「茶」や「数寄屋」の世界などがそれで、シンプルな素材で心豊かな暮らしをつくってきました。そうした我が国の伝統的な暮らしぶりと文化をうまく昇華できれば、きっと素晴らしいものが出来るのではないかと思います。

――先生はモノづくりだけでなく、日常生活の中での楽しい暮らし方の提案をされてきました。そうしたことこそ、インテリアデザイナーの職能とインテリア産業の発展に大きく寄与することなんですね。

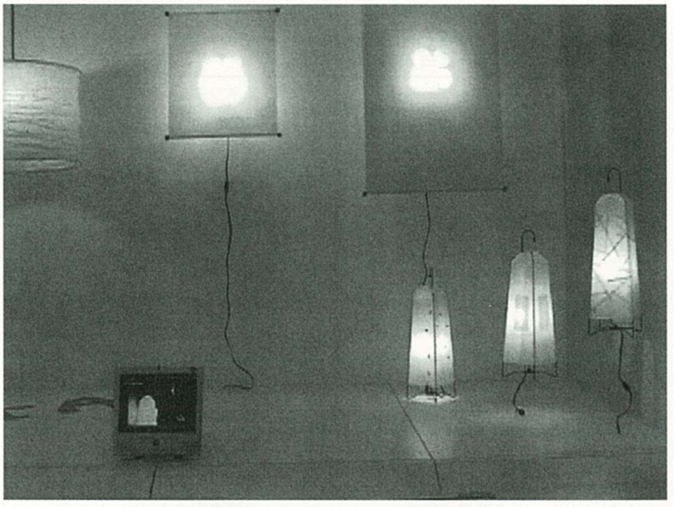
喜多　モノづくりだけでは、フォローできない、ちょっとした工夫で楽しいものをつくれるというのはインテリアデザインに共通しています。インテリアのデザインで椅子がどうのという前にその原点である我々、日本人の暮らしぶりに目を向けて考えたい。インテリアの原点は人です。人と人とのコミニュケーションの大切さ、人が集まると楽しい暮らしが生まれます。そうした暮らしを見つめなおし、インテリア産業の復興に結びつき、それがインテリアデザイナーの職能にも結びついてきます。

今、景気が悪いと嘆くばかりでなく、景気を活性化するためには暮らしの活性化が非常に重要です。欧米の景気が回復したのもやはり、暮らしの活性化が大きく貢献しています。現在、中国や他のアジア諸国の工業生産性は非常に高まっています。そうした中で日本が生き残れるのは、ハイテク製品をつくることと、ハイセンスな製品を生み出すことでしょう。そうしたものを育むのは、暮らしぶり――生活の現場です。それが貧しければ、日本の未来は大変なことになってしまうと大変気掛かりです。(談)

(聞き手／編集委員　本山　仁)



LanimaDelDesign 02
会場全体写真。オープンの時間帯が夕方から深夜までだったので、暗い中で光と映像が浮かび上がるように見えます。



KITAブース：伝統和紙の照明　iGuzzini社
Light+Building展：ドイツ・フランクフルト

海外のインテリアデザイン教育——アメリカの場合——

ペリー 史子
大阪産業大学工学部環境デザイン学科助教授

はじめに

アメリカの大学でのインテリアデザイン教育の基盤には、バウハウスの教育理念が存在するようである。私はこのことを、私の学んだ大学（Drexel大学College of Media Arts & Design Department of Design）の先生の話から知った。バウハウスがナチスのドイツ支配によって閉鎖され、その指導者達がヨーロッパの別の国やアメリカへ渡り、アメリカへもこの理念が波及していったという歴史的経緯があると言うのである。

バウハウスの教育理念については、『工芸デザイン・写真・舞台装飾から建築に至るまで、さまざまな芸術の分野を学際的にきわめ、それらと人間生活とを融合させていく……工房活動が中心に据えられていた。』[1]というが、いろいろな大学の教育プログラムを見ると、その影響は明らかと思える。

インテリアデザイン教育のプログラム

大学におけるインテリアデザイン教育という分野は、主として1960年代から始まった比較的新しいものであるが、現時点でのその広がりを知るために、インテリアデザインプログラムをもつ学科とそれが所属している学部をFIDER（The Foundation for Interior Design Education Research）[2]が認定している大学リストから調べ、主な名称を表1にまとめてみた。

インテリアデザインという専門分野が生まれてきた土壌には、
①建築学系、（アメリカでは建築はengineeringではなくfine artの分野に含まれるが、その建築の中の一部として特化してきたもの）
②デザイン系（デザインの一分野として発展してきたもの）
③ヒューマンサイエンス（元家政学）系（元々は家政学であったが、範囲が拡大し、消費者の立場や生活環境面へと移行して進展し、そこから生じてきたもの）
の3通りがあると考えられる。

建築学部に新たにインテリアデザインのプログラムが設けられてきているのは、シェルとしての建築以上に、その中の空間、すなわちインテリアを時代や人々の活動に適応させてデザインする必要性が高まっていること、インテリア空間や意匠が私達の活動に及ぼす機能的、心理的等、様々な影響が注目されてきたことによると言えよう。

さらには、建物がシェルとしては長期間存続するにも関わらずその内部は変質を余儀なくされたり、建物自体やファサードの保存の必要性があるなど、建築としてのデザインではなくインテリアのデザインが独自の領域として重視されるようになったことにも関連する。

現在のインテリアデザイン教育内容を調べるため、1例として前出のDrexel大学インテリアデザイン専攻の科目構成を表2に示した。バウハウスの影響である、絵画や彫刻、ドローイング、テキスタイル、写真という科目が含まれており、また、必修科目構成の中で実習の占める割合が非常に高いこともわかる。他大学においても、科目構成や実習時間の配分に同様の傾向が見られた。

表1　プログラムを持つ学部等の主な名称

大学名	学部相当（college / school）	学科相当
フロリダ	デザイン、建設&計画	インテリアデザイン
カンサス州立	建築、計画&デザイン	インテリアアーキテクチュア
ウィスコンシン	インテリアアーキテクチュア	
アリゾナ州立	建築&環境デザイン	デザイン
ルイジアナ工科	建築	
ネブラスカ	建築	建築
ニューヨーク工科	建築&デザイン	インテリアデザイン
ルイジアナ	アーツ	建築&デザイン
ロッチェスター	デザイン	工業&インテリアデザイン
ケンタッキー	デザイン／インテリアデザイン	
マリーモント	アート&サイエンス	インテリアデザイン
ミシシッピ	人間環境科学	環境デザイン
コーネル	ヒューマンエコロジー	デザイン&環境分析

表2　インテリアデザイン専攻必修科目名一覧

講義	美術史Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ　現代建築史　インテリア史　インテリア環境 インテリア材料　インテリア設備　関連法規 Directions in 20th Century Int.Des.　Contract Documentation
実習	絵画Ⅰ　デザインⅠ、Ⅱ、Ⅲ　写真　彫刻Ⅰ　ドローイング テキスタイル　照明デザイン　マルチメディア　設計製図 パースペクティブ　Structure（ストラクチュア） インテリア実習Ⅰ、Ⅱ　住宅デザイン実習　インテリアディテール インテリアデザインのためのCAD　ホスピタリティデザイン実習 商業空間インテリア実習　インテリアドローイング 特別課題実習　環境ドローイング 次の実習6科目からは1科目を必修 家具デザイン　写真中級　人物デッサンⅠ、Ⅱ マルチメディア　絵画Ⅱ

（筆者による日本語訳、但し、該当名称が難しい場合は英語のまま）

インテリアデザイン教育へのアプローチ

各々の大学ではインテリアデザイン（「インテリアアーキテクチュア」という名称をつけている大学もある）という専門をどのように位置づけているか、あるいは何を重要であると捉えているだろうか。教育方針や趣旨を探ってみると、次のような興味深いフレーズが目にとまった。

①建てられた環境を完結する必要不可欠な要素であり、計画し、家具等を備え付けるだけではなく、空間そのものをかたちづくる。[3]

②自然と人工の環境を、人間の文化的、社会的、心理的、経済的、歴史的、行動的活動に適合させる事であり、アートとサイエンスの両方の分野に関わる。[4]

③建造された環境と人間の接点であることに焦点をあてる。[5]

④人間の行動とインテリア環境とのインターフェースであることをより深く認識する。[6]

つまり、インテリアデザインとは、まず空間を把握し、そこでの人間の活動を分析して空間を形作るところから始まり、照明計画をし、必要な家具什器を整えて各仕上げを決定し、インテリアを完結させるのであるが、そのためには美的センスと、物事をきちんと分析できる科学的アプローチの両方が必要な専門分野といえよう。

インテリアデザイナーというプロフェッション

では、プロのインテリアデザイナーは一体何をするのか。先に述べたFIDERとNCIDQ（National Council for Interior Design Qualification）および、北アメリカの主要なインテリアデザイン協会が是認している「インテリアデザインの定義」[7]には、８項目があげられている。

要点を述べれば、インテリアデザイナーと、美的観点からの空間の見え方と表層の装飾を対象とするインテリアデコレーターとの間には一線が画され、仕切り壁や天井の計画・デザインを含む建物内部の空間そのものを対象とした計画・デザインが仕事の領域である。そして、他分野のプロフェッショナルとの協働も重視され、規定に定められた様々な事柄をふまえて、機能・健康面からも快適かつ安全な生活環境を作り出すことが要求される。

このように多岐にわたる専門的知識を必要とするにもかかわらず、プロとしてのインテリアデザイナーの位置づけは必ずしも明確ではない。建築（およびインテリア）の実現に際して権威を有するのは登録建築士だけだからである。州によっては、インテリアデザイナーのタイトルを使うためにはNCIDQによる資格試験に合格して、ライセンス登録をすることが必要である。が、ライセンスがなくても同様の仕事をすることは可能であり、このライセンスは定められた基準に達している事を証明するにとどまる。

しかし一方で、インテリアの大きなプロジェクトを、インテリアデザイナーを抱えている建築設計事務所ではなく、登録建築士を含んでいるインテリアデザイン事務所が、インテリアデザイナー主導で行う場合も見られるようになってきている。

インテリアデザインという分野は、他分野に比べるとまだ発展段階であるので、現時点でのこの分野の社会的成熟あるいは認知が未だ不十分であっても、それはある面で致し方ないとも言える。限界はあっても一定の職能は既に確立されているのであり、むしろ、建築物に関わる専門的職能の分担が進んでいると言った方がよいかも知れない。

おわりに

インテリアは、私達が長時間過ごす大切な環境であり、それに伴う様々な課題を解決し、豊かな生活環境を築いていくのは、時代の要請である。既に建てられた建造物のインテリアを現代の私達の活動に合わせて再デザインする必要性も増加している。

インテリアデザインは、そのような社会的背景に支えられた総合デザインであり、各分野のアートやデザインが、科学的アプローチも含めて統合される場である。したがって、必然的に、多岐にわたる教育が行われ、高度の専門的能力の涵養も必要となっている。それを反映して、インテリアデザインのプログラムを有する大学院の数も増えてきている。いずれにしても、学問的能力よりデザイン実務者としての能力を重視すべきこの分野で、大学、大学院それぞれでの教育のあり方が問われることになるのであろうが、ここではそこまでは触れない。

（ペリー ふみこ）

参考文献：
1）小原二郎「インテリア大辞典」壁装材料協会、1993年
2）http://www.fider.org/direc.htm
3）Pratt Institute
4）University of Florida
5）The University of North Carolina Greensboro
6）Washington State University Spokane
7）http://www.fider.org/definition.htm

インテリアの職能と歩み

片山 勢津子
京都女子大学助教授

インテリアは、西洋文化と共にわが国にもたらされた新しい概念である。「インテリア」という言葉が、公的に使用されるようになったのは1970年頃からだから、明治からおよそ100年の歳月をかけて市民権を得たことになる。

異文化交流の歴史を振り返ってみると、島国であるわが国は、概してその姿勢が柔軟ではなく、全てを受け入れるか逆に拒絶するという極端なものだったように思う。例えば、仏教伝来の時期は前者で、江戸時代の鎖国は後者である。そして明治期は、文明開化の名の下、西洋文化全てを吸収しようとする前者の中でも際立った例であろう。インテリアも西洋文化の一要素として、積極的に取り入れられた。

ここではインテリアの職能の歩みを、関西にも焦点を当てて振り返ってみたい。

椅子から始まったインテリア

明治期の西洋化の波は、それまでの外来文化の導入とは様相が異なった。諸外国との交渉をスムーズに運ぶため、まず椅子を使用する洋式礼法の導入という具体的な形で始まったのである。洋式礼法は、宮中（礼法の改正：1870）、学校（学制頒布：1872）、兵舎（徴兵令布告：1873）で定められ、上流階級だけでなく、一般民衆も教育や兵役などの場で椅子を使用することになった。したがって、日本のインテリアは椅子から始まったと言えるかもしれない。

椅子は、外国人の指導の下で製作されたが、西洋人から椅子を払い受け修理販売した古道具商や指物師、それに需要の落ちた馬具師や駕篭師らが、見よう見まねで製作に携わっていった。明治期に知られた杉田屋は、古道具商から洋家具商となった先駆者の１つである。洋家具の需要は次第に高まり、東京椅子組合が発足（1883）し、新橋駅前に集まった洋家具店は「芝家具」と呼ばれた。



写真１　だるま椅子　1870s.

一方、顧客を失った伝統産業の打撃は著しかった。政府は産業振興のため、万博に工芸品を出品するとともに内国勧業博覧会を開催した。これら博覧会では商品展示の他、競技会や販売も行われ、多数の入場者で賑わった。新作家具や室内装飾品も出展され、デザインの普及、技術の改善を促した。

椅子から室内装飾へ

官庁の洋式導入や様式建築の増加に伴い、洋家具だけでなく洋風の室内装飾も求められるようになった。洋風建築を学んだ建築家が指導にあたることが多かったが、内装業者の中には、海外で本格的に室内装飾を学ぶ者も出てくる。イギリスで学んだ小林義雄（1854－1911）、ドイツに学んだ清水米吉（1866－1923）の他、調査のため渡欧した者として、皇居造営局の高山幸次郎（1855－1908）、洋家具商杉田屋の杉田幸五郎（1850－1924）、呉服商上田屋（現 川島織物）の川島甚兵衛（1843－1910）らがいる。このうち川島は、衰退する西陣織の革新を模索し、日本的な図柄を室内装飾に展開していった。関西の業者は、椅子を中心とした関東の動きと異なり、壁掛けや壁布、カーテン、絨毯、椅子張地などのファブリック材を主体に、室内装飾の分野に関わっていった。

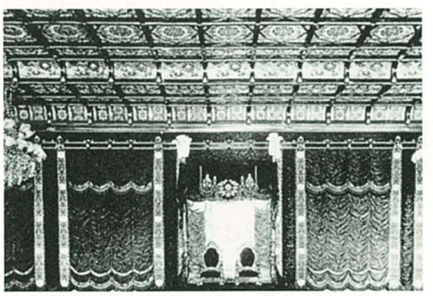


写真２　明治宮殿室内　1888

呉服店の変革

江戸時代からの老舗である呉服店（飯田高島屋、三井越後屋、白木屋、大丸、伊東松坂屋）は、百貨店へと様相が転換するのと前後して、家具や室内装飾の分野に進出した。これは、呉服店が繊維製品を広く扱っていたことに加え、身の回りの小物や調度品を扱っていたこと、顧客に宮内庁をはじめ上流階級が多かったことによる変化だと思われる。西洋において家具店が百貨店に発展したことを鑑みると、興味深い。

呉服店のうち早くから室内装飾としての業務を手掛けたのは、三井越後屋（現 三越）、飯田高島屋（現 高島屋）、白木屋で、新宮殿の他、国会議事堂や貴衆両院などにかかわった。飯田高島屋はファブリック材を中心に内装業務をしていたが、豪華客船「豊浦丸」の受注を契機にいち早

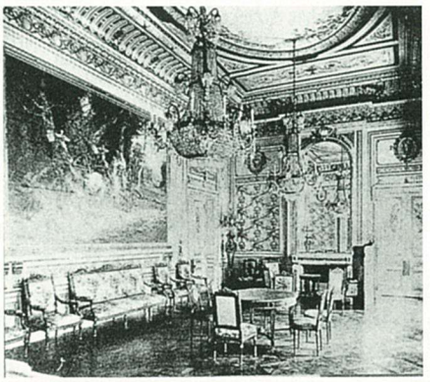


写真３　東宮御所（現 赤坂離宮）1913

く装飾部を設立し、三越はフランスの日本大使館（1908）の内装から本格的に室内装飾に参入した。さらに日清日露戦争頃から、百貨店は販路拡大を求めて大陸に進出を始め、家具装飾店の多くは百貨店との提携を強め、その傘下に入った。そして、船舶や車両を含めた室内装飾全般が、百貨店の主要業務となる。

デザイン教育とデザイン活動

建築教育のため来日したJ.コンドル（1852－1920）の工部大学造家学科の授業に「造家装飾」という講義があった。わが国のインテリアに関わる教育は、この講義に始まったと考えられる。やがて殖産興業政策を目的に、デザイン教育を主体に行う学校や学科が作られ、東京美術学校図案科（1901）、東京高等工業学校工業図案科（1901）、京都高等工芸学校図案科（1902）の設置によって、本格的な家具や室内装飾のデザイン教育が始まった。ただし、東京高等工業学校の図案科は、旧制大学昇格を目指し1914年に廃止、7年後に創立された東京高等工芸学校工芸図案科・木材工芸科において事実上の復活を果たす。これは、当時のデザインに対する軽視を示す出来事だが、高等工芸開校にあたっては入念な海外視察が行われたこともあって、近代的デザイン活動の拠点となった。

第1次世界大戦後の好景気と生活様式の変化を背景に、デザイン活動が次第に活発になる。1918年、東京高等工業卒業生による家具研究団体「樫葉会（後の木材工芸学会）」が発足、翌年創刊された機関誌『木工と装飾』では、工芸と工業の統一など諸問題が、西洋のデザイン理念と共に紹介された。さらに、デザイナーグループとして「木の芽舎」やバウハウスの影響の濃い「型而工房」が発足した。同時期には、産業デザインの振興団体「帝国工芸会」や、国立のデザイン研究機関である「工芸指導所」が設立された。工芸指導所では、人間工学の観点から機能主義的デザインを追求し、ドイツから招聘された建築家ブルーノ・タウト（1880－1938、33－36在日）やフランスから来日したインテリアデザイナーのシャルロット・ペリアン（1903－99、40－42在日）の指導を受け、日本のデザインのあり方が模索された。

住まいにおいても生活改善運動が活発化し「椅子化」が推奨される。百貨店では家具展や懸賞募集が盛んになり、中産階級にも椅子式生活が浸透していった。藤井厚二（1888－1938）が日本の風土性を重視し、床座と椅子座の起居様式の整合性、環境調節のあり方を実験住宅で試みたのもこの頃である。



写真4　京都家具工芸研究会展示会
安井武雄の作品　1931

しかしながら都市の商業建築では、欧米に倣った様式調やアールデコ調が大半を占めた。特に総生産高で日本首位の座を占めた商都大阪では事務所建築の内装が活発に行われ、家具商の宮崎（現 宮崎木材工業）や大林組子会社の内外木材（現 内外テクノス）が、内装業者として参入する。

混乱期と豪華客船

日中戦争が始まった頃より、インテリア業界も混乱期に入る。奢侈品等の規制で営業は混乱を極め、公定価格を契機に家具の全国調査が計られ企画統一の兆しが見られたものの戦況悪化のため開店休業を余技なくされる。

ただし、このような時期にあっても豪華客船だけは例外で、「新田丸」「竜田丸」「アルゼンチナ丸」など、船舶内装のコンペが次々に行われた。設計は、中村順平（1887－1977）、村野藤吾（1891－1984）、本野精吾（1882－1944）、長谷部・竹腰建築事務所など建築家の他、三越、高島屋、内外木材、宮崎木工、神戸船舶装備などの内装業者が、部屋別に分担して行った。ところが完成した豪華客船は引き渡しの後、直ちに空母に改装された。つまり、数々の豪華客船のコンペは戦艦偽装の催しで、多くの知恵と技術と情熱を結集しながら、そのインテリアは日の目を見ずに消えてしまったのである。

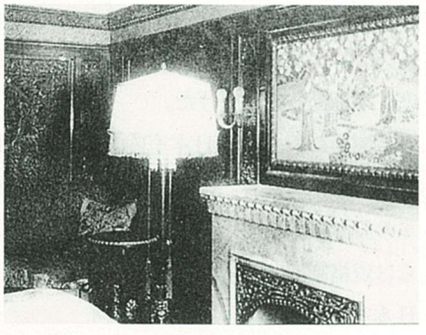


写真5　浅間丸客室　1929

復興期

第2次世界大戦後、アメリカの第8軍司令部から商工省や家具製作所に対し、進駐軍のための大量のディペンデントハウス（DH）とDH家具の生産指令があった。アメリカ軍の指導によるその生産過程で、工作技術や量産性、堅牢性を重視した設計について学ぶことになる。戦前、どちらかというとヨーロッパの様式の影響の強い家具やインテリアを学んできたのに対して、戦後はアメリカの機能主義デザインを本格的に学ぶ。

約30種、950,000点という膨大な量のDH家具の生産によって、一



写真6　ミルドレッド・ワーダーの家具

時活況を呈したインテリア企業だが、デザイン活動が活性化するのは昭和20年代後半からである。こうした中、将来の需要を見越して、インテリア専門の設計事務所、パシフィック・ハウス・ジャパンとミルドレッド・ワーダーが設立されている。いずれも元アメリカ人将校のデザイナーを中心とした事務所で、仕事は軍関係の他、ホテルや大使館、外資系企業、そしてアジア諸国の仕事が行われた。特徴としてショールームが設置されていたが、ミルドレッド・ワーダーがインテリア・デコレーター的で手の込んだデザインを行っていたのに対して、パシフィック・ハウス・ジャパンでは、システマティックな設計手法が採られた。当時のデザイン傾向は、駐留軍の好みを反映して、アメリカのモダンデザインに日本のオリエンタルな要素の加わったいわゆる「ジャポニカ・スタイル」である。

高度成長期

昭和30年代に入ると、生活の安定とDKの普及によって、一般家庭にも椅子座が普及し家具への関心が高まった。百貨店の家具展が盛況を呈したのもこの頃で、専門誌『木工界』(現 室内) や『インテリア』が創刊された。さらに東京オリンピックを前にしたホテルブームで、インテリアデザインは量、質ともに向上した。しかし一方、一般市場には低俗なデザインが出回っており、こうした状況を憂いた剣持勇 (1912−71) は「ジャパニーズ・モダーン」を提唱、大阪では生活デザインの啓蒙を掲げたデザイナーグループ「創作の室(へや)」が活動を繰り広げた。

1957年に設立した日本室内装備設計士協会連合会 (現 日本室内装備設計技術協会、通称日本インテリア設計士協会) は、インテリアの設計技術を高める目的で関西を中心に発足した団体で、翌年からは資格制度 (室内装備士) を開始した。一方、1958年に設立した日本室内設計家協会 (現 日本インテリアデザイナー協会) は関東中心に発足した団体である。技術重視とデザイン重視という関西と関東の指向の違いが2つの協会設立として現れたが、以降は全国的規模で活動が行われていく。

1970年の大阪万博開催は、インテリア業界にも大きな影響を及ぼした。体験型メディアである博覧会を契機に、空間づくりに変化が現れ、広告やディスプレー関連企業が店舗設計に積極的に関わるようになったのである。「必需的」から「必欲的」へと消費活動の質に変化があらわれ、専門店街が誕生した時期でもある。

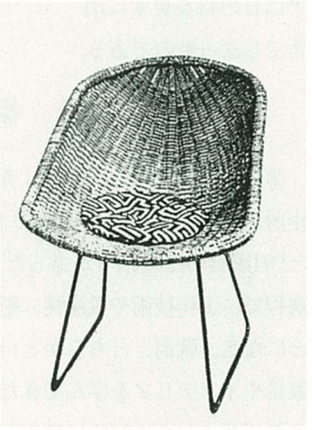


写真7　創作の室　第1回展「生活のためのデザイン」1955

量から質へ

1973年のオイルショックは、経済成長の転換点であった。脱工業化、情報化が進み、量的拡大から質的拡大の時代へと価値観が転換した。住環境への意識の高まりとともに、住宅産業や家具業界も生活空間をトータルに捉えるようになり、インテリア業界に参入した。また、オフィスのOA化を契機に、作業空間の快適性にも目が向けられ、オフィス機器メーカーもオフィスインテリアの設計に携わるようになった。

このような多岐にわたるインテリア関連業界の興隆を背景に、インテリアの資格制度が整備された。インテリアコーディネーター、インテリアプランナー、キッチンスペシャリスト、マンションリフォームマネージャー等である。さらに1980年代は「バブル」という社会現象も手伝って、インテリアブームが巻き起こり、テーマパークに代表されるようなストーリー性のあるインテリアデザインが商店建築を中心に展開されるようになった。これに呼応するように、造形系大学の創立も相次ぎ、デザイン教育の充実が計られた。個性的な空間作りには、空間プロデューサーという新たな職種が関与する一方で、関連企業ではインテリア部門の設置や分離が見られた。これは多様化するインテリアの新しい価値観に対応すると同時に、個々の状況に即して、細部から全体までを統合する必要が生じたためである。

現代、感性による価値観で物事を捉える方向に転換しつつあるなかで、健康や地球環境を重視した新たな視点も重要になっている。インテリアの概念がようやく認知された今日、日本人にとってのインテリアのあり方が改めて模索されている。　(かたやま　せつこ)

[主要参考文献]
日本室内設計協会編「日本のインテリア」1968
中村圭介「文明開化と明治の住まい」理工学社　2000. 4. 30
日本インテリアデザイナー協会編「日本の生活デザイン」建築資料研究社　1999. 7. 30
大江善三「高島屋百年史」高島屋
宮崎英次郎「宮崎120年の歩み」1975. 10. 1
「三越85年の記録」三越　1990. 2. 25
「練技抄　川島織物145年史」川島織物　1989. 11. 24
「近代デザイン年鑑　天童木工50年史」天童木工　1993. 6. 30
「剣持勇の世界」講談社　1975. 10. 20

[図版出展]
図2. 3. 5「練技抄、川島織物145年史」川島織物　1989. 11. 24
図4. 宮崎英次郎「宮崎120年の歩み」1975. 10. 1
図7. "aujourd'hui, art et architecture" No 8　1956

関西インテリア年表
近代（1861〜1944）

(M03) 70 | (M13) 80 | (M23) 90 | (M33) 1900 | (M43) 10 | (T09) 20 | (S05) 30 | (S15) 40

世界

第1次世界大戦　第2次世界大戦

61 モリス商会設立
88 アーツ＆クラフト展示協会設立
95「アール・ヌーボ」パリに開店
97 ウィーンゼツェッション結成
07 ドイツ工作連盟
19 バウハウス開校
19 デ・スティール宣言
25 アールデコ展開催
28「domus」創刊

日本

主な動き

68 T.J.ウォートルス来日
77 J.コンドル来日
86 H.エンデ，W.ベックマン来日
70 工部省設置
77 内国勧業博始まる
86 造家学会（現 日本建築学会）設立
16 F.L.ライト来日
18 桜葉会設立（'22木材工芸学会）
22 分離派建築会設立
23 創宇社建築会設立
26 帝国工芸会設立
27 木の芽舎設立
28 型而工房設立
33 B.タウト来日
40 C.ペリアン来日

出版

87 造家学会誌「建築雑誌」創刊
01「和洋家具雛形」泉幸次郎
10「日本住宅室内装飾法」杉本文太郎
14「雑木利用最新家具製造法」木桧恕一
18「規格家具」剣持勇
19「木工と装飾」（'22「木材工芸」）創刊
28「装飾構成の研究」宮下孝夫
32 工芸指導所「工芸ニュース」創刊

教育

76 工部大学校（'85帝大工科造家学科，現 東京大学）
80 京都府画学校（現 京都市立芸術大学）
81 東京職工学校（'90東京工業学校，2001東京高等工業学校）・・・21 東京高等工芸学校（現 千葉大学）
87 東京美術学校（現 東京芸術大学）
97 京都帝国大学（現 京都大学）理工科大
00 私立女子美術学校（現 女子美術大学）
02 京都高等工芸学校（現 京都工芸繊維大学）
05 名古屋高等工業学校（現 名古屋工業大学）
21 神戸高等工業学校（現 神戸大学）
23 大阪市立工芸学校（現 大阪市立デザイン教育研究所）
29 帝国美術学校（現 武蔵野美術大学）
33 新建築工芸学院（現 桑沢デザイン）
35 多摩帝国美術学校（多摩美術大学）
28 商工省工芸指導所設立（'52産工験，'69製品科学研究所）

関西

主な動き

71 京都博覧会始まる（-1928）
95 第4回内国勧業博（京都）
99 全国意匠工業博覧会（京都）
03 第5回内国勧業博（天王寺）
17 関西建築協会設立（現 日本建築協会）
22 関西分離派第1回展
27 日本インターナショナル建築会設立
30 京都家具工芸研究会設立
22 住宅改良博（桜ヶ丘）
34 国際見本市
35 第1回産業工芸博
20 高島屋家具陳列会始まる


第5回内国勧業博

業界

69 西陣物産会社
75 宮崎，箪笥製造始める
92 住江織物
96 川島織物（旧 上田屋）
00 高島屋大阪支店に装飾部
05 龍村製織所（現 龍村美術織物）
00 住友本店建築部・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33 長谷部・竹腰建築事務所（現 日建設計）
08 ヴォーリス建築事務所
92 大林組
99 竹中工務店
20 大丸大阪店家具製作所（現 大丸木工）
18 神戸船舶装備
24 安井武雄建築事務所（現 安井建築設計事務所）
29 村野建築事務所（現 村野、森建築事務所）
31 東畑謙三建築事務所（現 東畑建築事務所）
18 松下電気器具製作所（現 松下電器産業）
39 高島屋工作所

建築

71 大阪造幣寮（T.J.ウォートルス）
91 第一銀行大阪支店（辰野金吾）
95 京都国立博物館（片山東熊）
01 愛珠幼稚園（中村竹松）
03 日本銀行大阪支店（辰野，片岡）
04 大阪府立図書館（野口孫市）
18 中央公会堂（岡田信一郎）
24 大阪倶楽部（安井武雄）
25 大丸百貨店，大同生命ビル（W.M.ヴォーリス）
28 聴竹居（藤井厚二）
31 朝日ビルディング（竹中工務店）
31 綿業会館（村野藤吾）
33 大阪ガスビル（安井武雄）

船舶 航空機 車両

01 豊浦丸
04 日本丸
08 天洋丸
21 榛名丸，箱根丸，宮崎丸
26 長城丸
29 浅間丸，竜田丸
30 秩父丸，ブエノスアイレス丸
39 新田丸，八幡丸，アルゼンチナ丸

関西インテリア年表
戦後から現代へ（1945〜2001）

(S25) 1950 | (S35) 60 | (S45) 70 | (S55) 80 | (H02) 90 | (H12) 2000

世界

第2次世界大戦

50「モデュロール」L.コルビュジェ
81 メンフィス結成
63 IFI（国際インテリア協会協議会）設立
66「建築の複雑性と矛盾性」R.ヴェンチューリ
77「ポストモダニズムの建築言語」C.ジェンクス

日本

主な動き

東京オリンピック●　●大阪万博　●花と緑の万博
84 インテリアコーディネーター制度発足
87 インテリアプランナー制度発足
50 建築基準法・士法公布
88 キッチンスペシャリスト制度発足
52 日本インダストリーデザイナー協会設立
89 日本インテリア学会設立
53 デザイン学会（現 日本デザイン学会）設立
92 マンションリフォームマネージャ制度発足
57 日本室内装備設計士協会連合会（現 日本室内装備設計技術協会）設立
58 日本室内設計家協会（現 インテリアデザイナー協会）設立　95 世界インテリアデザイン会議開催（名古屋）

出版

48「新住宅と家具」豊口克平，松本政雄　73「インテリアデザイン1，2」小原二郎
55「木工界」（'61「室内」）創刊　77「インテリアデザイン辞典」豊口克平
55「インテリア」創刊　88「インテリア大辞典」
95「インテリア学辞典」

教育

46 金沢美術工芸専門学校（現 金沢美術工芸大学）　87 宝塚造形芸術大学
64 浪速芸術大学（現 大阪芸術大学）　89 神戸芸術工科大学
66 愛知県立芸術大学　90 名古屋造形芸術大学
66 東京造形大学　91 京都造形芸術大学
68 九州芸術工科大学　92 東北芸術工科大学
93 成安造形大学
94 長岡造形大学


大学での教育風景

関西

主な動き

48 文化住宅展（宇治山田）
47 新日本建築家集団設立
48 室内設計士協会設立
54 第1回国際見本市
55 創作の室設立
56 総合デザイナー協会（DAS）設立　94 関西インテリアプランナー協会設立
59 関西意匠学会設立（現 意匠学会）　98 日本インテリアプランナー協会設立
60 大阪デザインハウス開設（現 大阪デザインセンター）
53 高島屋「シャンブル・シャルマント」展始まる
54 大丸「研匠会」始まる

業界

50 大丸大阪店に装飾課
48 坂倉建築研究所大阪支所
94 日建設計より日建スペースデザイン独立
59 安藤忠雄建築研究所　75 都住創設立
55 大和ハウス工業　80 高松伸建築設計事務所
60 積水ハウス産業（現 積水ハウス）　82 若林広幸建築研究所
45 松下電工　63 ナショナル住宅

建築

58 新歌舞伎座（村野藤吾）　76 住吉の長屋（安藤忠雄）　93 大阪スカイビル（原広司），NEXT21大阪ガス実験住宅
60 関電ビル（竹中工務店）　76 ソニータワー（黒川紀章）　94 関西国際空港（R.ピアノ）
62 新住友ビル（日建設計）　82 ユーコート　97 京都駅ビル（原広司）
65 大阪ロイヤルホテル（吉田五十八）　00 淡路夢舞台（安藤忠雄）
70 梅田地下街　86 ツイン21（日建設計）　01 新風館（NTT＋R.ロジャーズ）
70 万博お祭り広場　87 キリンプラザ（高松伸）　01 大阪市環境事業局舞洲工場（F.フンデルトバッサー）

船舶
航空機
車両

63 YS-21
88 アーバンライナー
94 ラピート

京都市の都市計画マスタープラン

山本一博
京都市都市計画局都市企画部都市計画課地域係長

京都市は、都市計画法第18条の２の規定に基づき、本市の都市計画に関する基本的な方針となる「京都市都市計画マスタープラン（目標年次2025（平成37）年）」を今年５月に策定した。

昨今の私たちを取り巻く社会情勢は、長寿少子化の進行、高度情報化の進展、地方分権の進展、産業構造の転換、環境問題の認識の高まりなど、大きな時代の転換を迎えている。これらの情勢に適切に対応し、京都のまちの魅力と活力を維持・向上させるため、長期的な視点に立った都市の将来像を示し、都市計画の方針を明らかにするものが都市計画マスタープランである。

全体構想＝６つの都市の将来像

全体構想は、市全体の都市計画の方針を明記したものである。ここでは、都市活動の受け皿となる土地利用や都市施設を中心とする「都市の基盤」の観点と、まちの個性を大切にする「魅力的な京都のまち」の２つの観点から、次の６つの都市の将来像を掲げ、それぞれの都市像を実現することを都市計画の目標としている。

①持続可能な都市活動を支える基盤の整った都市

都市の個性を発揮しながら、21世紀においても光輝く都市として持続・発展していく基盤の整った都市づくりを目標に、まとまりのある市街地の形成やきめ細かな土地利用の誘導、公共交通の優先をコンセプトとする総合的な交通体系の構築、都市情報基盤の整備等を方針としている。

②自然豊かで環境負荷の少ない循環型の都市

環境問題を見据え、物質やエネルギーの循環を基調とした、環境への負荷の小さい環境共生の都市構造への転換を図るため、自然環境の保全、市街地における自然的環境づくり、建築敷地の緑化、自動車交通量の抑制等を方針としている。

③安全で安心して暮らせる都市

地震等の大規模災害や火災、水害等の災害に強い都市づくりを進めるため、防災拠点の整備等の都市防災の強化や密集市街地の改善整備等を方針としている。

④歴史や文化を継承し優れた景観を保全・再生・創造する京都のまち

歴史的環境を総合的に保全・再生し、優れた都市景観を創造するため、三方の山々の保全、歴史的な市街地景観の保全と再生、新しい都市景観の創造等を方針としている。

⑤歩いて楽しい魅力的な京都のまち

歩くことの価値を評価し、誰もが快適に歩ける魅力的なまちづくりを進めるため、ユニバーサルデザインのまちづくりの促進や歩行者空間の魅力化・ネットワーク化、建築敷地における歩行者空間の充実、歩いて楽しい市街地の交通システムづくり等を方針としている。

⑥住みやすく個性のある生活圏が息づく京都のまち

誰もが安心して住み続けられるまちづくりを進めるため、地域特性に応じた住みよい居住環境を備えた住宅地の形成や生活圏の形成等を方針としている。

地域別構想＝地域の特性や身近な視点から

地域別構想は、全体構想を踏まえ、地域の特性や身近な視点を大切にする観点から、地域ごとの都市計画の方針づけをしている。本市では11の行政区ごとに、①住む（都市居住の視点）、②働く・学ぶ（都市活動の視点）、③憩う（都市環境の視点）、④動く（都市交通の視点）の４つの視点で、地域別構想をまとめている。

都市の活性化政策＝都市計画の重点政策

全体構想と地域別構想のほかに、21世紀に生きる都市・京都を目指し、重点的に取り組むべき施策をまとめた「都市の活性化政策」を位置付けている。これは、京都が都市としての魅力と活力を維持し続けるためには、豊かな文化や歴史、知的資産等の京都が有する特徴的な資産を生かしながら、活性化に向けた取り組みが必要であるとの認識のもと、「都心の再生」、「南部創造のまちづくり」、「都市機能の拠点の整備」について取り組むこととしたものである。

① 都心の再生

京都の都心部は、永い歴史の中で培った職・住・文・遊の都市機能が折り重なるまちの魅力を持つ地域であり、その魅力を継承し、産業や文化の活性化や居住環境や町並みの保全・再生を中心とする調和を基調とする都心の再生を進めることとしている。

【職住共存地区のまちづくりや都心幹線沿道地区の再整備、西陣地域のまちづくりの推進】

② 南部創造のまちづくり

本市の南部地域を21世紀の本市の活力を担う地域と位置付け、南部地域以外にある学術研究機能や産業機能等との連携や国内外の広域的な連携を視野に入れながら、多様な都市機能の集積や都市空間の形成を図ることとしている。また、伝統的な町並みや酒造業等の地場産業を有する旧伏見市街地の再生や、桂川右岸地域における新市街地の形成を図ることとしている。

【京都駅南口周辺地区の再整備や高度集積地区のまちづくり、伏見地区の中心市街地の活性化の推進、桂川右岸地域の新市街地の整備の推進】

③ 都市機能の拠点の整備

工場跡地等の大規模な低未利用地や鉄道駅周辺の交通利便性の高い市街地において、都市生活や都市活動の向上を図るため、必要な都市機能の誘導等を図ることとしている。

【鉄道駅周辺の複合的な都市機能拠点の整備、学術・研究開発拠点の整備の推進】

都市計画の推進方策＝身近な視点の重視、パートナーシップのまちづくりの推進

安定した成熟化社会の都市計画は、生活の質を大切にした持続的な社会をつくるシステムであることが求められることから、身近な生活空間や都市空間を重視したまちづくりを進める必要があるという認識のもと、従来の都市計画にある全体から都市を見る視点に加えて、地域の課題や将来像を踏まえた、きめ細かな都市計画を推進することとしている。そのためには、市民と行政の情報の共有化や、パートナーシップのまちづくりの推進等を位置付けている。

*

今後はこのマスタープランに基づき、「安らぎ」と「華やぎ」のまちづくりに向けた取り組みをしていきたいと考えている。

（やまもと　かずひろ）

耐火性能検証法のすすめ

湯谷孝夫
㈱鴻池組大阪本店建築部部長（技術担当）

耐火性能検証法の特徴

平成12年６月、建築基準法の改正に伴い耐火性能検証法が導入され、耐火設計が身近になった。耐火性能検証法により、大臣認定を必要とせず、建築主事などの建築確認のみで耐火設計が可能となった。従来は、旧法第38条に基づく大臣認定によってのみ可能であったことを考えると、手続き上も簡素化された。

耐火性能検証法は、鉄骨部材の耐火被覆厚さを軽減したり、無耐火被覆化するための耐火設計法とも言える。例えば、仕様規定では、柱・梁の耐火被覆厚さは、令107条に基づいて階によって規定されているのに対して、耐火性能検証法では、室の用途と部材の大きさや荷重条件に応じて耐火被覆厚さを算定する。一般的に住宅、事務室、駐車場、体育館、教室などでは25mm程度に耐火被覆厚さを軽減できる。また、アトリウム・吹き抜け部、あるいは階段室やエレベーターシャフト内の鉄骨部材を無耐火被覆とすることも可能な場合が多い。したがって、コストメリットだけでなく、工程の短縮や天井内部の納まりや施工性の向上にもメリットがある。

なお、従来の仕様規定にしたがって設計する方法をルートA、耐火性能検証法にしたがって設計する場合をルートB、高度な専門的知識により耐火性能を確認して設計する場合をルートCと呼んでいる。ルートCでは、指定性能評価機関の性能評価を受け、大臣認定を取得する必要がある。

これら各ルートにおける建築確認までの過程を図１に示す。

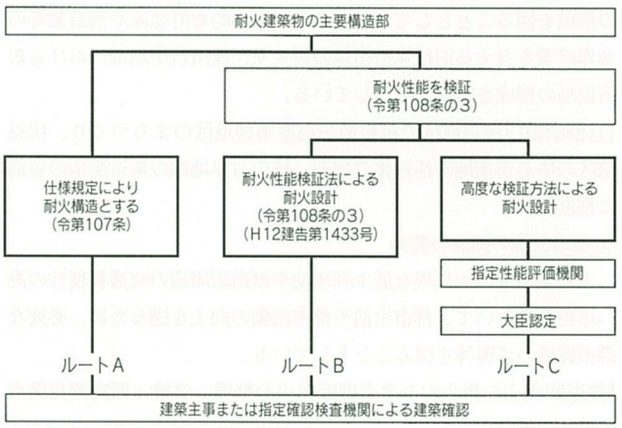


図１　主要構造部の設計ルート

算定手順の概要

大筋としては、まずある室の火災継続時間を算定し、次にその室に面する主要構造部の耐火性能（非損傷性・遮熱性・遮炎性）として保有耐火時間を算定する。火災継続時間≦保有耐火時間であれば、その部材の耐火性能は満たされたと判断する。これを全室かつ全主要構造部について繰り返し行い、検証を終了する。火災継続時間および保有耐火時間の算定式は、建築基準法施行令第108条の３および平成12年建設省告示第1433号に規定されている。

―火災継続時間の算定―

火災継続時間（t_f）は、下式によって算定される。

$t_f = Q_r / 60 q_b$　[min]

ここで、Q_rは、火災室における総発熱量 [MJ]

q_bは、可燃物の発熱速度 [MW]

Q_rは、家具、什器、書類等の収納可燃物量や床・壁・天井の仕上げ材料に代表される固定可燃物量などから計算される発熱量の総和である。q_bは、火災室における開口部の面積や高さ、室の床面積や高さ、可燃物の表面積などから計算される。Q_r、q_bの計算は、事実上、床・壁・天井・開口部等部位ごとの積算作業であり、検証過程で最も労力を要するところである。しかし、窓などの開口条件を制御したり、仕上げ材料を選択することによって火災継続時間が短い室を設計することができる。これは意匠設計者の裁量によるであろうし、得意とするところでもある

―保有耐火時間の算定―

紙面の都合により、保有耐火時間の算定式の詳細については省略するが、算定方法は表１に示すとおり構造形式・部位別に示されている。保有耐火時間は、断面性能や作用荷重、部材の支持条件などによって算定されるため、この算定作業は構造設計者に適しており、効率的である。

表１　構造形式・部位別の保有耐火時間算定方法

構造形式＼部位		柱	梁	床	壁	屋根	階段
RC造		●	●	●	●	●	○
鉄骨造	被覆有	●	●	○	○	○	○
	被覆無	●	●	○	○	○	○
木　造		●	●	○	○	○	○

●：算定式により保有耐火時間を計算
○：認定（指定）耐火時間を読み替え式により保有耐火時間に換算

適用例

適用例として紹介する建物は、大阪市内において現在建設中の地上35階建て・総住戸数232戸の超高層住宅で、CFT柱を採用して耐震性の向上を確保している。

無耐火被覆CFT柱は、耐火性能検証法の適用範囲外であるため、新都市ハウジング協会のCFT構造技術指針に準拠して耐火性能の評価を行った。そのため設計ルートとしてはルートCであるが、CFT柱以外の主要構造部は耐火性能検証法によって検証した。

ここでは鉄骨梁の耐火被覆厚さに注目して、仕様規定による場合との比較を行い、図２に示す。１F、２Fは、ホール、ロビー、駐輪場など収納可燃物量が比較的少ない用途であるため、火災継続時間が短い。等価火災時間に換算すると10数分となった。３F～35Fは住宅で収納可燃物量が多いため、等価火災時間は89～117分となった。１、２Fの一部CFT柱（側柱）の耐火被覆厚さが30mmであるのに対して、３F以上の中間階で45mmの柱が見られるのは、火災継続時間の違いによるものである。大梁の耐火被覆厚さは、大部分が25mm、最大でも35mmとなり、仕様規定に比べて大幅な合理化が図られている。鉄骨梁は、同じ強さの火災加熱を受けた場合、断面が小さいほど熱容量が小さいため温度上昇しやすい。したがって、高層階（21F以上）の梁の耐火被覆厚さが厚くなっている。PH２F以上の屋上架構は、ヘリポートを支持するための架構であるため工作物として取り扱い、無耐火被覆とした。

なお、等価火災時間とは、実火災を標準火災に変換した場合の火災継続時間を言う。等価火災時間に換算することにより、異なる火災性状の大小比較や、認定耐火時間との比較が直接できる。

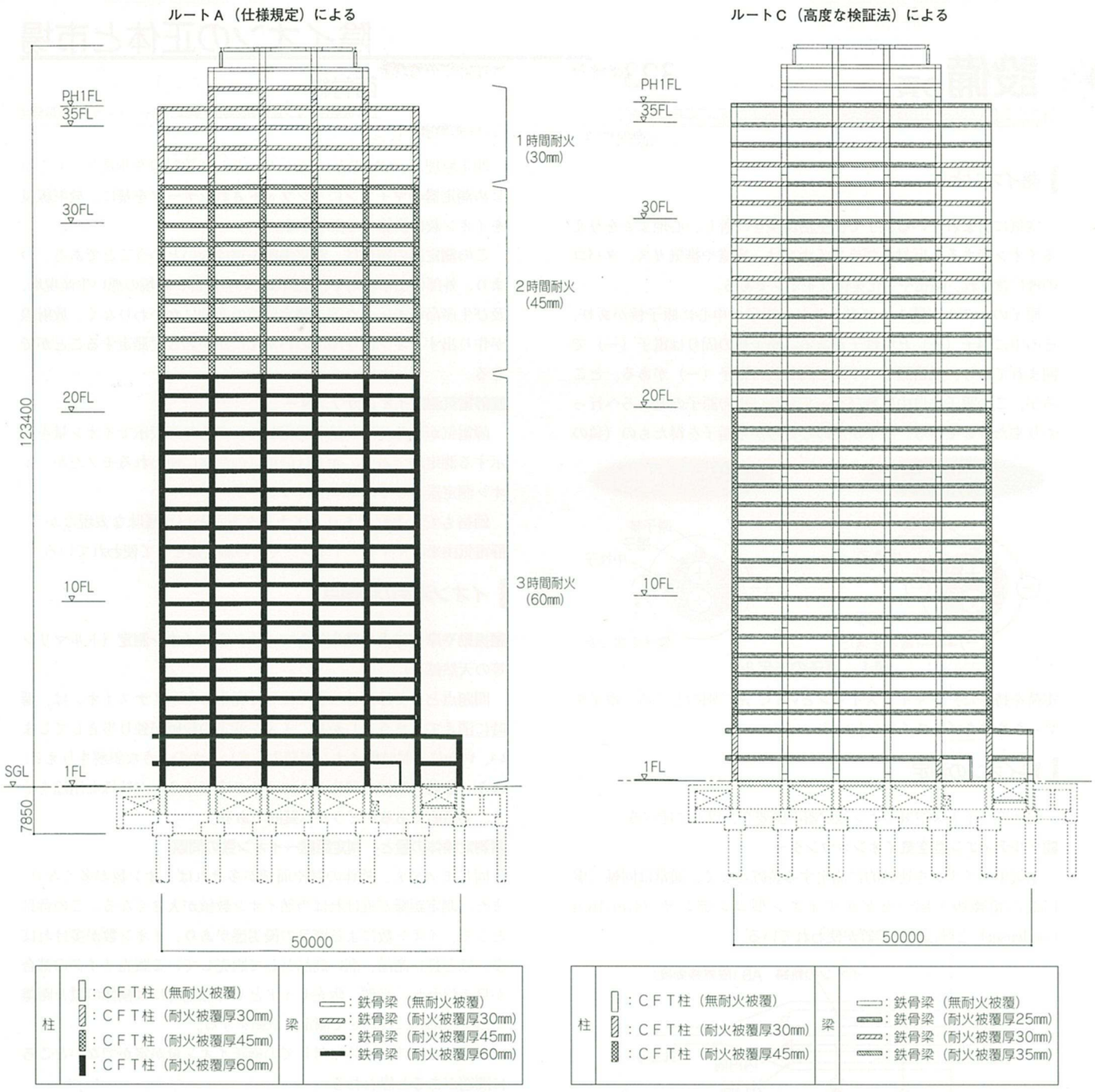


図２　耐火性能検証法の適用例

耐火性能検証法をより活用するために

適用例に見られるように、建物が高層であるほど大きなコストメリットを得ることができる。しかし、施行後２年を経た現在、耐火性能検証法の適用事例は当初期待されたほど多くはない。

耐火性能検証法の普及を阻害している要因の一つに、膨大な作業量が必要になる点が挙げられる。建物を構成するすべての室とすべての主要構造部が検証対象であるため、設計者の負担が過大となっている。安全側の仮定が成立することを明確にした上で、検証対象となる室や部材の数を減らすことができれば、設計者の負担は軽減されることであろう。例えば、全室の火災継続時間を等価火災時間に換算し、その最大値と部材の保有耐火時間の比較により検証することができれば省力化が可能であろう。このような設定が許容されるよう行政に望むところである。

構造設計においては、基本的に設計者が外力を制御することはできないが、耐火設計では火災外力とも呼べる火災継続時間を開口条件や区画性能等によって制御することができる。この点において耐火設計の面白みがある。より合理的な耐火設計を望む場合に、設計初期段階で火災外力の制御を試みる価値は大いにある。また、室用途や間仕切の変更により火災継続時間も変わってくるため、設計変更に対して慎重に対応する必要もある。

おわりに

耐火性能検証法を活用するには、火災継続時間を決定する意匠設計者と、保有耐火時間を決定する構造設計者との連携プレーが重要と思われる。耐火性能検証法の適用には、火災安全工学の特別な知識を必要としないが、適用する過程において自然にその工学的意味が理解されることによって、さらに高度な性能設計を試みる引き金になることが期待される。

最後に、本報では耐火性能検証法の一部についてしか紹介できなかったことをお詫び申し上げる次第である。

（ゆたに　たかお）

陰イオンの正体と市場

西村純一
日本機能性イオン協会事務局長、㈱エコホリスティック代表取締役

陰イオンとは

空気に含まれている粒子で、生活環境を改善し、心地よさを与えるイオンである。反対のプラスイオンは、家電や排気ガス、タバコの煙に含まれ、酸化や老化を伴うイオンである。

原子のモデル（図1）で考えると、原子の中心に原子核があり、その中に陽子（＋）と中性子がある。原子核の周りは電子（－）で囲まれており、通常陽子（＋）と同じ数の電子（－）がある。ところが、この電子は自由に飛び交っており、別の原子のところへ行ったり来たりしている。原子が別のところから電子を得たもの（負の

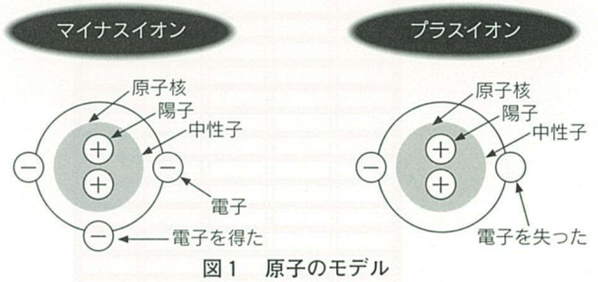


図1　原子のモデル

電荷を持った）をマイナスイオンといい、逆に別のところへ電子を失ったものをプラスイオンという。

陰イオンの測定

現状のマイナス空気イオン測定器の概要を、以下に述べる。

■ゲルディエン型空気イオンカウンター

空気中のイオンを連続的に測定する装置として、通常は同軸二重円筒の電極版を用いたゲルディエン型コンデンサ（Gerdien Condenser）と呼ばれる装置が使われている。

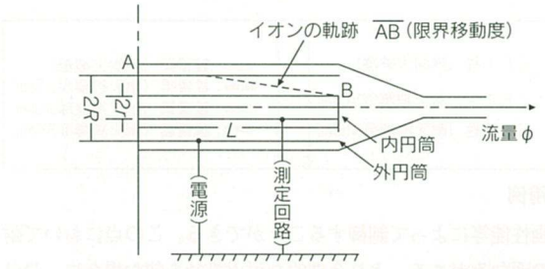


図2　ゲルディエン型空気イオンカウンターの測定原理

この装置の測定原理を図2に示す。空気イオンを測定する場合は、イオンを含んだ試料空気を二重円筒の外円筒と内円筒の間に、気流をできるだけ乱さないように吸引することによって測定する。ただし、測定数値が環境によって左右され、数値の変動が激しく、現場での測定には向かない。

■放射線換算方式イオンカウンター

空気イオン測定器の現場での問題点を考慮して作られた測定器で、放射線が作るマイナスイオンを表示するイオンカウンターである。この測定原理を図3に示す。

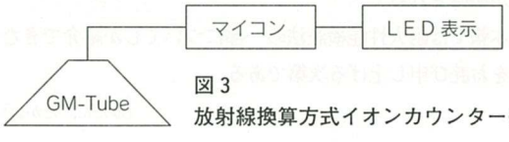


図3
放射線換算方式イオンカウンターの測定原理

測定原理は、GM-Tubeをセンサーとして放射線を測定し、あらかじめ測定器のマイコンにインプットされたデータを基に、放射線量をイオン数に換算して表示する。

この測定器の特徴は、測定場所を選ばないということである。つまり、外部の工事現場や、壁面などの垂直部、環境の悪い生産現場、及び生産品のチェック等、測定環境の変動にかかわりなく、放射線が作り出すイオン数を環境のいかんにかかわらず測定することができる。

■静電気測定イオンカウンター

静電気が作るイオン量を想定して、アナログ表示でイオン量を表示する測定器である。元来は静電気の測定に使われるモノだが、イオン測定器として市場に出回っている。

価格も安く手軽であり、アナログ表示という曖昧な表現ながら、静電気由来のマイナスイオングッズの測定器として使われている。

イオン測定の問題点

■振動や摩擦により発生したマイナス空気イオン測定（トルマリン等の天然鉱石）

問題点としては、そのようにして発生したマイナスイオンは、瞬時に消えてしまう。しかし、イオン測定の数値が独り歩きしてしまい、いかにも長時間イオンが発生しているかのような誤解を与える。また、振動や摩擦で発生したマイナス空気イオンが特殊な用途を除き、実用的であるかどうかは疑問である。

■測定検体の量と、測定距離→イオン数の問題

同じモノでも、検体の量や面積が多ければイオン数が多くなり、また、測定距離が近ければ当然イオン数値が大きくなる。この背景として、イオン数による商品の優劣感があり、イオン数が多ければ多いほど良い商品、高い商品として販売している販売サイドの都合が見え隠れし、当然、販売サイドとして測定時には検体の量と距離を自分の都合に合わせて測定の依頼をする。

つまるところ、生体に対しての適正イオン量が定かでないところに問題があると思われる。

■測定技術、測定環境、測定機器の仕様

この場合は、特にゲルディエン型空気イオンカウンターに言えることなのだが、測定の技術度や、イオン数の採択方法（ピーク、アベレージ）、温湿度、測定室内清浄度、室内のエアコンや換気扇等の室内風による影響が大きく、数値の変動が非常に激しい。また、メーカが異なる測定機器を数台設置して、同時定点測定を実施した場合に、メーカの仕様によって表示数値が一桁違って表示されることがあるが、これは各社各様の測定器仕様のため起きる問題で、今後、仕様の統一化が望まれる。

主な問題を上に列記したが、マイナス空気イオンの測定統一化に向けて解決しなければならない問題は多々ある。マイナスイオンをブームで終わらせないためにも、測定器開発各社の利害を超えた協力体制と、業界全体のモラルの確立が必要であろう。

陰イオンの効果

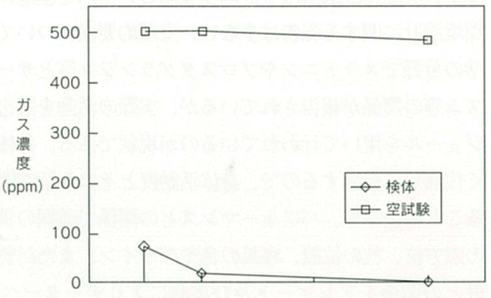
■健康・生理機能

リラックス効果・ストレス緩和・自律神経の調節・疲労回復（乳

酸中和）・血圧降下・快眠・新陳代謝の促進・血液浄化・血行促進・細胞活性・抗酸化作用・集中力のアップ等が挙げられる。

■環境に対する機能

除帯電・除粉塵・抗菌・抗カビ・除虫・脱臭（アンモニアの脱臭：図4）・プラスイオンの中和・鮮度保持・ダイオキシンの抑制・ホルムアルデヒドの分解機能が挙げられる。



(単位：ppm)

試料	経過時間(min) 5	10	30
検　体	70	20	<10
空試験	500	500	480

初期条件:ガス濃度　約500ppm

図4　アンモニアの試験結果

マイナスイオン製品の市場展望

マイナスイオンの発生体によって3種類の傾向がある。

■電子放電方式によるもの（コロナ放電方式、プラズマ放電方式、単電極方式等）

- 空気清浄機、エアコン
- マイナスイオン発生器

主に、生育促進、脱臭、環境改善対策として農業、畜産業、製造業、病院、学校、理美容院、エステ、ペット関連商材や一般家庭での癒しの場づくりなどに使われている。

■レナード方式

- 空気清浄機、環境浄化器

主にリラックス効果を求めた癒しの場づくりに使われている。

■セラミックス発生体によるもの（セラミックスパウダー、セラミックボール）

- 繊維、不織布
- 樹脂、合成皮革
- 建材、タイル、塗料、コンクリート製品
- 陶磁器、木工製品
- 農漁業園芸資材、漁網

今後、マイナスイオンマーケットにおいて、セラミックスを使った製品が、衣食住の多岐にわたって広範に活用されていくものと思われる。

マイナスイオン製品の今後の市場展望

キーワードに「環境」「消臭」「抗菌」「リフレッシュ」「リラックス」「活性化」「還元」「育成」「教育」等が挙げられる。

これらのキーワードに関するマイナスイオン効果の科学的な解明により、その効果が実証されることによって市場は衣食住・教育・環境・農漁業・工業・医業・サービス業・流通業等の多岐多方面の分野にわたって広範なマーケットをつくり上げることが可能である。

また、諸外国において韓国以外はまだまだマイナスイオンへの関心が薄いので、韓国がそうであるように、日本発の国際的な市場形成へと発展していく可能性を秘めている。今後の行く末を日本機能性イオン協会の在り方とともに見守りたい。（にしむら　じゅんいち）

なんにでも、マイナスイオン加工ができる

エコホリのマイナスイオン発生素材
イオナペックス シリーズ

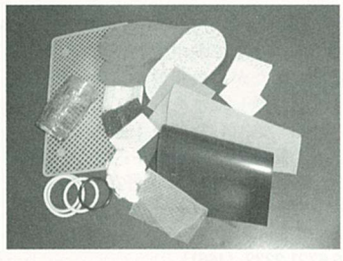
常温静止状態で、マイナスイオンが発生するセラミック。セラミックからは常に微量放射線が発生し、空気中の水分などと反応してマイナスイオンを作り出します。衝撃や圧力を加えることなく、常時・継続的にマイナスイオンが発生します。放射線ホルミシス効果により、生体の防御機能を活性化し、老化防止、ガン抑制、免疫機能の向上などの有益な効果が期待されます。繊維製品・プラスチック・建材・塗料など幅広く利用いただけます。

●マイナスイオン　セラミック　パウダー　MP-02、MP-03
　マイナスイオン　セラミック　ボール　MPB-02、MPB-03
●マイナスイオン接着剤　MP-06
●マイナスイオン塗料　MP-12
●マイナスイオン樹脂ワニス　MP-22
●マイナスイオン加工用　水分散品　MP-32
●マイナスイオン加工用　溶剤混合品　MP-36



左から、マイナスイオン塗料、マイナスイオン接着剤、マイナスイオン加工用溶剤混合品、マイナスイオン加工用水分散品




マイナスイオン樹脂ワニスMP-22

株式会社　エコホリスティック
〒564-0051　大阪府吹田市豊津町2-11第2喜巳ビル
tel. 06-6378-2131　fax. 06-6378-2132
http://www.eco-holi.co.jp
営業：小牧／西野

研究を最前線で追う

7 人の24時間、環境の24時間

人間環境工学研究室
近畿大学理工学部建築学科

人の感覚は非常に敏感で、様々な環境条件に適応しようとしているが、一方ではアメニティ空間をはじめ、建物や自動車の内外を問わず空調設備計画、インテリアを含め社会的に快適性への要求が高くなっている。覚醒時および睡眠時を快適な温度環境下で生活することが、必ずしも人にとって健康で、安全であるとは言い難い。

そこで、人と熱環境要素、光やかおりの24時間に注目し、高齢者や青年を対象に熱環境要素、行動量、人体の代謝エネルギー量、サーカディアンリズム、作業能力、疲労、脳波、脳血流、血圧をはじめとする生理的反応と心理的反応等を測定し、人への影響について、従来の計画を再考し、睡眠、覚醒、入浴等の24時間人に優しい真の快適環境を求めようと努力を続けている。

睡眠環境と生活環境

自然環境の劣悪な条件からのがれ、少しでも安全な隔離された家の形を求め、われわれは飛躍的な居住形態へと発展させてきた。今日ではほとんどの人々が、安全と思われる家屋に住み、快適な睡眠を確保し、日々社会活動に勤しんでいる。事務所空間で就業する人々は人工環境の恩恵に浴し、通勤時間帯のみ外気にふれるのが一般的である。また、交通空間も快適な条件が保たれており、就寝時の環境も劣悪な条件ではないと考えられる。しかし就寝時間帯のずれや就寝空間の環境条件が原因となって、就寝困難なども見受けられる。

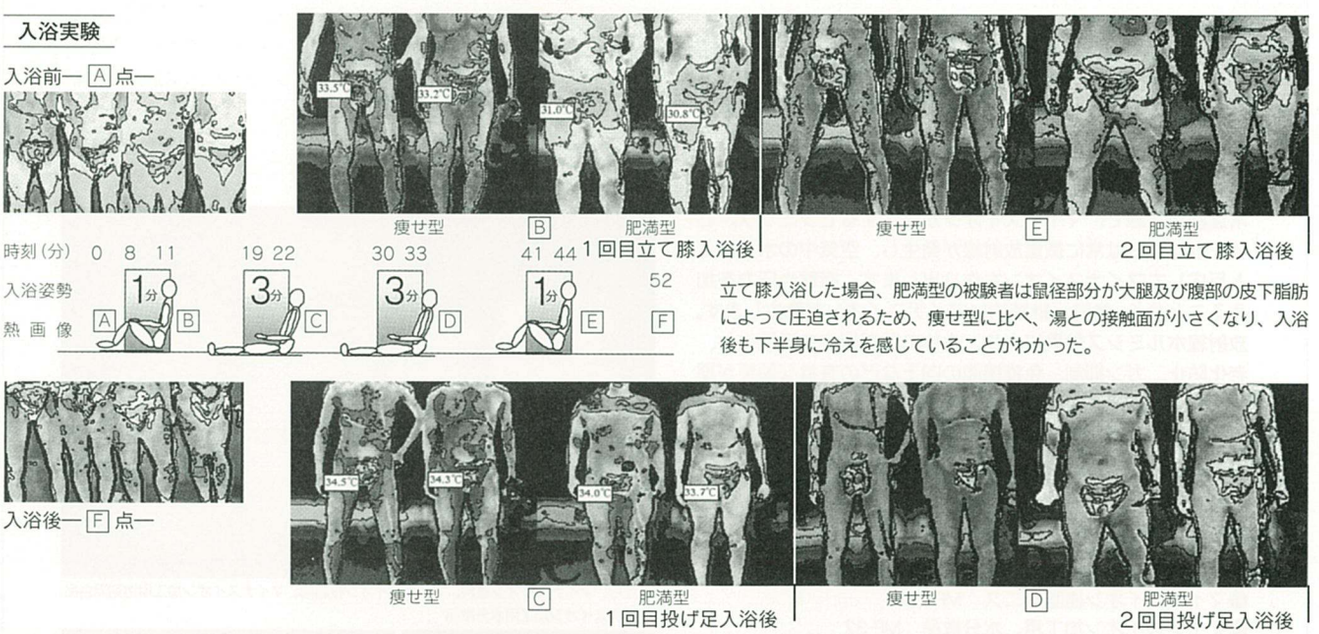
睡眠環境を室内環境、寝具と身体行動をあわせて総合的に考え、研究を行っている。

身体活動の程度が、睡眠の質を向上させることは周知のことであるが、実際に睡眠環境を計画する場合、生活を基盤においた眠りの環境設計に関する報告は少ない。生理的要素については医学・生理学の分野でメラトニンやプロスタグランジン等とサーカディアンリズム等の関係が報告されているが、実際の活動を阻害した実験スケジュールを用いて行われているのが現状である。身体の活動は大きく代謝量に影響するので、身体活動度とその生活空間を調査分析することによって、パフォーマンスとの関係で睡眠の質ならびに寝室の窓方位、枕の位置、寝具の色やデザイン、また材質の差による温度との関係をアンケート及び実測によりデーターベース化している。

実測データーから壁、天井の照明器具条件、寝つきの良さ、中途覚醒、脳波、中核温、血圧および血流などと覚醒時の学習効率、作業能率などとの相互関係を明らかにし、これらの関係を利用することによって、生活環境向上と活動の質の向上を考えている。

浴室内の温熱環境

熱環境が生理反応に及ぼす影響や入浴効果の持続性を検討した結果、投げ足状態で入浴すると血流が促進されるので、浴槽サイズは最低1200ミリ以上が望ましい。家庭では浴室内の温度や湿度が変化しやすく、浴室では身体が静止している状態はわずかで、常に変化する状態が続くので、姿勢の違いによる浴室内での身体からの放熱と血流を中心に研究を進めている。(下図参照)



立て膝入浴した場合、肥満型の被験者は鼠径部分が大腿及び腹部の皮下脂肪によって圧迫されるため、痩せ型に比べ、湯との接触面が小さくなり、入浴後も下半身に冷えを感じていることがわかった。

●研究室のひととき

こだわりで、車で移動中、おいしいわき水を採取していたが、数年前からマイナスイオン浄水器を通した水を使ってコーヒーをたてている。焙煎した豆を手回しの歯のついたミルで挽いていたが、中挽きのMJBのネイビー缶が渋皮が少なく、好評である。

連絡先
大阪府八尾市新家町8-23-1
Tel : 06-6721-2332 (4661)
E-mail: kajii@arch.kindai.ac.jp



梶井宏修講師

●研究スタッフ

梶井宏修／1947年生まれ
・専攻／建築・人間環境工学
・著書／共著に『高齢者の住宅熱環境』、居住スペース（『人間の許容限界ハンドブック』）、『建築設計者のための設備知識』など
・環境条件を少しでも精度良く測定するため作製したものとして、超小型放射熱収支計、小型放射計、超薄型熱流計、日射を直接受けても気温測定の誤差が0.1℃以内のセンサー、アクティビティメーター、新型高速応答グローブ温度計などがある。

「事」に仕えて、ハッピーに！



出版委員会委員長
上原　正行
（神戸大学非常勤講師
京都女子大学非常勤講師）

1）ちょっと勝手がちがう

38年間の勤めを辞し、はや2か月が過ぎた。

定年後について、一般的な姿を聞いていた。最初の1カ月は挨拶状書き、友人、知人の住所整理。2カ月目は、家にある写真や資料整理。3カ月目は自宅や周辺の見なおし、庭の手入れも……と。4カ月目には、する事が無くなって奥さんから、「いやがられますヨ」と。

要するに、「ひまを持て余す」との予告であったが、いささか違う。私の場合、「何もせんかったらボケル」といわれ、対策として家庭サービスのためにも「料理を習いにいけ」と言われる始末。町内会のこともふくめ、何やかやと雑用がふえている。朝も結構早く起こされる。新聞、TV、そして週刊、月刊誌を抵抗の意を込め、今までより時間をかけて目を通す。

5月末発刊の雑誌に、「ゼネコン決算」「勝ち組」「主要建設会社の淘汰、延命、提携」などの文字が踊る。「元勤め先はやはり東京シフトがすすむんやなー」と感慨深いものがこみ上げ、関西系企業を選んだわが身としては一抹の寂しさが残る。多忙の「忙」は「心を亡ぼす」と教わった。一方で「最後まで忙しくてポックリ死ねたら最高や」と考えたりの今日このごろである。

2）「21世紀の人材教育と継続教育のあり方」

これは、今年1月、東京・建築会館での「第2回建築教育シンポジウム」のテーマである。日本建築学会・建築教育委員会生涯教育委員会からの報告で、今回、気になることがあった。最近の急激な社会構造の変革に対し、専門教育の場も含めて、オープンな教育システムの必要性が叫ばれ、各界を横断する意見交換が必要とされ企画されたものと聞いている。

基調講演の中で述べられた心配事＝職務内容を自己判断できない、表現力に乏しい社員は、大学入試のための偏差値一辺倒教育を受け、思考が画一化した学生の入社後の姿。このような「主体性の無い社員」に困っているというものである。ある企業からは「人事異動の変化に耐え得る教育の必要性」を訴えられた。

私からすれば、少々期待過剰、言い換えれば、たいそう虫のいい話であると思うのだが……。若い人と接している立場からいうと、人材は心身ともに健康第一。卒業までにIT教育と語学が基本的にマスターできていればOK．そういう人は一応の専門分野もそつなくこなしているはず。後は企業内教育に任せて、各社がその人材をいかに染め上げて行くか……ということだとおもう。企業が前向きなら若い人達も屋台をささえるものだ。

元勤務先では、新人社員全員、入社後1年、神戸・深江の教育寮（現在では、女子寮も併設）で過す事になっている。1980年11月2日の寮祭で、西岡常一棟梁に講演をしていただいた。その時の語りの一部に、次の言葉が残されている。

> 仕事とは「事に仕える」と書きます。だから、仕事を命令でやらせてもいけない。また命令でやらされてもいけない。そこにあるその与えられた「事」に仕えることが仕事である。労働という言葉があるが、動いてしんどい思いをするという字になっている。これは仕事とは違うのだということです。

就職難、そして離職率も高いといわれる今日、もう一度この言葉を共に味わってみたい。生涯付き合って行ける職場とは？そして、仕えてみたい「事」とは？

3）3K？6K？10K？

建設業界は「3K職場」と書かれたことがある。曰く、「仕事がキツイ、キタナイ、キケン。いわゆる3Kである。」加えて「給与が安い」「休日が少ない」「格好が悪い」…こうなると6K職場。さらに、必然的と言うか、「彼（彼女）ができず」「結婚できず」「嫌われる」で9K、とどめは、働きすぎて「身体を壊す」、とうとう「10K職場」。10年前、誰が言い始めたか知らないが、この表現、私には不愉快だった。揶揄するだけ、仕事を積極的に求める気持が何ら分析されていない。思うに「パン」を得る目的なら、各職場を比較して10Kが出てくるのだろう。3Kは、商業、サービス、他業種でも耳にするからほっとけばいいのかもしれないが……。

私自身、入社早々の見習い期間中、あるいは新婚早々の徹夜業務で社内保健室で連続4日仮眠したことがある。5日目には人事部長から電話があり帰宅を命ぜられた。仕事の節目として自分でそこまで追いこんでおきたいからそうしたのであった。子供が生まれても殆ど毎晩24時頃帰宅、顔をながめ、翌日8時過ぎには出社していた。

そして、今、大学の後輩に講義をする機会をいただいている。授業の前後に「就職」について質問を受けることがあるが、「3K」の事など聞かれない。理科系、しかも建築に関わる分野に職場を求める彼、彼女達は「多忙」を当然視してるようでもある。

ところで愚娘の就職した新聞社も相当なものだった。毎晩遅い帰宅は覚悟していたが、喫煙しない本人が玄関に戻ると衣類からタバコのにおいがぷんぷん、部屋中臭くなる。喫煙者のいない家族にとって迷惑千万。彼女の、職場環境が目の前にちらつく。火事現場から帰ったときは、火の粉をかぶって、服に数カ所穴があいていた。また取材で、お付き合いの深酒？泥酔し先方に泊めていただいた事も…。娘も新聞業界の事を少しは勉強したうえだったのだろう。覚悟して記者になったからからには　当初はあまり愚痴ってなかったと思う。ところが社員組合との付き合いも広がり、とうとう先輩喫煙記者さん相手に、社内で「禁煙キャンペーン」をやりだした。結果として、新社屋建設にあたっては職場に禁煙ゾーンが大幅に増え、喫煙コーナーが廊下の一部にできたのである。努力次第で「K」もつぶせるなと思った。

忙しくてもやりたいことがやれたら幸せ。「やろか、やろまいか」迷ったら必ずやること。やらなくて悔やむのが最も悪い。

> 英国の哲学者トーマス・カーライル　曰く……
> 「幸福なのは　自分の仕事を見つけた人である」

これは、故竹中相談役が、社報巻頭で父上を葬送されたときの冒頭の文章である。

パネルディスカッション

住まい・まちづくりの新世紀

住田　このパネルディスカッションのパネリストの方々は高度経済成長期に先頭を切って活躍してこられた方々である。現在は当時の反省も含め、冷静に現状分析が可能なはずである。

ここではまず、パネリストのみなさんの仕事の総括、つまり成果と反省点をお話しいただくことにしたい。

住まい・まちづくりの経験と現在

椚座　かつては国の再開発予算の25％を大阪が、20％を東京がとっていた。今は大阪がわずか2％、東京が50％の割合だ。また、大阪は常に国の制度を先取りしてきた。明治42年の大阪府建築取締規則は、現在の建築基準法の前身である大正8年の市街地建築物法の先取りであった。公共住宅政策全盛時代の昭和39年に民間アパート融資をスタートさせたのも大阪であった。国は昭和48年になってようやく制度化したものである。また、民間確認検査機関は近年の国の建築基準法改正で登場したように言われているが、大阪では昭和48年に民間主事の制度がとっくにできていた。

かつての大阪には、知恵も力もあった。一人ひとりの職責のなかで、現状打破を進めなければならない。ルールは必要なら変えればいいのである。ルールにはその背景となる考えがあるはず。ルールを決めた背景、理由がわかっていれば、それを改正していくことも可能である。現在の大阪は、開発による拡大よりも都心再生が大切である。文化・福祉・環境・防災の観点から、コンパクトなまちづくりが求められている。基盤整備で、都市の魅力を高めるべきである。本質を理解してルールを変えてこそ大阪の先進性が発揮される。

富安　私は働き盛りの時代をずっと大阪で過ごした。仕事としては千里ニュータウンをまずやった。千里は日本最初のニュータウンであって、国内には手本がなかった。当時はイギリスのニュータウンを勉強しながら試行錯誤で計画を行った。最近、ハワードの田園都市100年を記念するイベントや著作に触れ、当時知らなかったことがたくさんあったことに気付かされた。千里は大きな成果であったが、当時は開発の効果が必ずしも十分わかっていたわけではなかった。たとえば、交通の重要性については、ある程度は理解していたが、これほどまで大きな効果があるとは考えていなかった。千里は現在、北大阪の核であるが、当時は道もない緑の丘陵地であった。

ところで、千里は平均して35年経過した住宅地である。人口は減少しているが、世帯数は変わらない。空き家が増えたわけではなく、一戸あたりの人数が減った。新規の住宅建設ができないから人口を増やすことができないのである。住民の住宅地としての評価は高い。一方、千里では小学校人口がピーク時の6分の1くらいに減少している。計画当初はこうした事態も全く予想していなかった。都市づくりは100年単位で考えなければいけない。フレキシブルな土地利用を可能にする計画も必要であった。

住田　かつて、千里は8年そこそこでできたのに、イギリスではニュータウン建設にどうしてあんなに時間がかかるのだろうと疑問を持ったことがある。日本の技術を持ってすればもっと早くできるのにと思った。後になって、都市は時間をかけてつくるものなのだということが理解できた。

山中　戦後50年間、建築設計に携わってきた。戦後50年とは、戦災から震災までの50年を指す。この50年は大きく前半と後半に分けられる。その転換点は1973年から75年ころの石油ショック前後である。前半は量の時代、後半は質の時代であったと総括できる。

ところで、質の基準としている居住水準で見ると、東京・大阪は30％台で、目標50％の足を引っ張っている。都市居住の主力は共同住宅であり、このレベルアップが重要で、都市に住みたい働きざかりが住める「魅力の共同住宅」こそが課題である。ＡＳＴＭ、つまり芦屋浜高層住宅では、住戸規模を当時としては広い平均65㎡確保した。コミュニティ形成のために空中庭園も設けた。これは、かならずしもうまくいかなかったが、現在、その経験をふまえて新しいＡＳＴＭを構想中である。

住宅設計で重要な物差しは居住者の満足度である。質の時代と言われた過去25年間、住まいの満足度は実は大幅に低下傾向にある。満足度はものづくりだけでは高められない。住まいづくりは人づくりであり、コミュニティの問題をもっと重視しなければならない。

立岡　住宅の話はしづらい。特定の知識だけについて言えば、専門家よりよく知っている素人も多い。一番よく知っているのは直近に家を建てた主婦であろう。住宅の評価も難しい。話をしていると目の前に関係者がいたりする。ただ、本当に大切なのは、人々がまちのなかでどのように住んでいけばいいか、ということである。

戦前と違って現在の日本の都市では持家が多い。これは戦災復興時に借家供給が成り立たなくなり、一方で民間自力建設が奨励されたことと関連している。しかし、持家制度が本当によいのか、疑問である。集合形式の持家はもっと問題である。住まい手にマンションのような縦型の長屋でどのように住めばよいのかは教えられていない。様々なトラブルが発生している。賃貸住宅は事業資産なので、家主は熱心に手入れするはずである。都市の住宅は持家ではなく、すべて賃貸住宅にしてはいかがであろうか。

川渕　記者生活を終えて6年、三田のニュータウンに住んで8年が過ぎた。これまでに16回も住み替えた。都心でも田舎でも、様々な住体験を持つので、住まいへのこだわりは強い。三田のニュータウンは当時、宅地の抽選倍率が数百倍にも届く大人気で、人に羨まれたが、今では様変わりし、中古の売り家続出で人口急増は昔話。そのうち郊外ニュータウンは原野に戻るなどとからかわれる始末だ。しかし、私を含めて住まいは郊外に限ると決め込んでいる人たちは少なくない。土地神話時代になおざりにされた、郊外にふさわしい住宅供給を実現できるか否か、そこが問われているのだと思う。庭のない郊外住宅など、これからはおよそ意味がない。ニュータウンの生き残りには、住民と地元自治体と開発事業者がビジョンを共有しあうことが大切だ。

広原　このシンポジウムのテーマは、関西の21世紀をどう捉えるかということであった。20世紀後半、関西はパワフルであった。たとえば、大阪府の人口は30年間で460万人も増えた。年間15万人増えた勘定である。この間、団地開発、民間スプロール等、何でも受け入れてきた。その後、人口が減少していったが、もともとの人口まで戻ったわけではない。東京との格差は確かに拡がっている。ただ、先ほどから、東京への対抗、いかにあるべきかという発言が

聞かれるが、東京対関西という地域軸で考えるべきではない。東京と関西の差は地域差ではなく実は時間差、タイムラグだと理解すべきである。上方というように、すべての面で関西は先に行き、東京は遅れてついてくるのである。大阪は既に人口減少社会を先取りしている。大阪は東京に対抗するのではなく、人口減少という新たな課題に対応した先駆的プロジェクトを起こしていくことこそが大切なのである。関西は先行地帯であり、それにふさわしい取り組みが求められている。

髙田　20世紀から21世紀への移行期にあたるここ2、3年、数多くの住宅設計コンペが行われた。コンペに出品された作品はA、B、2つのタイプに大別できる。Aは20世紀後半の計画技術をとりあげ、その否定のうえに新たな提案を行うもの。Bは、20世紀の計画技術のうち、21世紀に継承すべきものをとりあげ、それをより洗練させた提案。Aは東京に多く、Bは関西に多い。Aはコンペに通りやすいが、過去を否定するという点では発想は20世紀型、スクラップ・アンド・ビルドであるとも言える。これに対して、Bは、20世紀の蓄積をどのように評価するのかという発想で、地味。しかし、引き継ぐものをきちんと峻別しようとしているという点で、持続性を重視する21世紀型のコンセプトと評価することもできる。各パネリストのご発言はBのメッセージであると理解したい。


住田昌二


椚座正信


富安秀雄


山中　孔

●コーディネーター／住田昌二
●パネリスト／椚座正信　富安秀雄　山中孔　立岡弘　川渕吉男
●コメンテーター／広原盛明　髙田光雄


立岡　弘


川渕吉男


広原盛明


髙田光雄

住田　基調講演で提起された問題については、椚座氏の、“できなければルールを変えよ”という発言で解決できた。また、東京対関西にかかわる問題ついては、広原氏のコメントにあったタイムラグという概念で一定整理ができた。

そこで次は、郊外の衰退・再生論と都心居住・コミュニティ論にテーマを絞りたい。

関西における住まい・まちづくりの展望

川渕　東京対関西は、広原先生の指摘された時間軸の問題だけに収斂させることはできない。都心居住を可能にしている条件の東西格差は歴然としている。2003年3月までに200haものビジネス床が増えるという東京と、産業経済空洞化の結果として都心部の宅地化が復活した大阪を同列に論じることはできない。関西復権、再生など関西財界が説く建前と、中枢管理機能は東京へ生産活動は海外へ移し続ける個別企業の本音の行動との、ギャップは大き過ぎる。職場の多少ばかりでなく、住環境としての魅力、犯罪や災害への備えなど、いずれをとっても問題山積の大阪であり、一方で財政は破綻しかけている。郊外は衰退一途、都心再生という単純な図式では多分ない。郊外も都心も、勝ち組みと負け組に分かれていくのだろう。

立岡　郊外居住はかつてはマルチハビテーションなどと言ってもてはやされたが、現在では都心居住が求められている。この現象だけを見ても、これまでの日本に住宅政策はあったのだろうかという疑問を持つ。少なくとも、どのように住むのかというビジョンはなかったのではないか。これまでの住宅政策は景気刺激策としての住宅政策であったとさえ言える。

今日では、もっと福祉政策と住宅政策の結合が求められている。これからは生活形態にあわせて住み替えていくというシステムを構築することが重要だ。持家と借家の水準には大きな落差がある。質のよい賃貸住宅市場をつくり、住み替えを活性化していくことが大切である。ソ連時代にレーニンは、一世帯当たり200㎡が望ましいが、その目標をすぐに実現できないので、200㎡を3世帯でシェアするという考え方を提示している。賃貸住宅システムを構築する上では、このような考え方が参考になるのではないか。

山中　かつてはたくさんの住宅を速くつくることが必要だった。しかし、現在では都心居住を推進することが重要となっている。現在の大阪は都心に住みたい人が住めないようなまちになっている。まず、住宅が狭い。共同住宅であっても一人あたり30㎡が必要で、平均100㎡を確保し、住める状態をつくることが大切だ。昭和のはじめ、和辻哲郎が、「日本は半町（50メートル）に十数軒、外国は数十軒」とコンパクトシティを説いている。戦前の船場では半町に十数軒だったが、現在では2.5軒にまで減っている。1975年には、心の豊かさを重視する人と、物の豊かさを重視する人はそれぞれ40％ずつだったが、現在では心が60％、物が30％になっている。これからの住まいづくりでは心の問題を重視しなければならない。

富安　千里ニュータウンは立地条件がよいので、他のニュータウンと同列には扱えない。郊外の議論はもっと立地の悪いところをイメージしなければならない。とはいえ、私自身、これまで郊外居住を体験して実感したことは、空気がいいことと、騒音がなく圧倒的に静かなことであった。都心居住を好む人は多いが、郊外居住希望者も決して少なくないはずである。都心、郊外にそれぞれ良さと問題点があるが、郊外についても問題点を解決して良さを活かしていくことが大切であると思う。

椚座　私は都心居住の推進が重要であると考える。多少緑を削ってでも、容積率を引き上げ、大阪の都心に若い人が居住できる条件を整えることが大切である。都心回帰に対応するためには、密集市街地の整備が最重要課題である。公と民が連携してこれを推進すべきである。

広原　この議論は、都心か郊外かというような問題ではない。時間軸を視野に入れ、成長期から成熟期への移行を踏まえる必要がある。成長期は広域的で、転居率の高さに特徴付けられる。成熟期は狭域的で、小さな生活圏の追求、つまりコンパクトシティが重視される。この変化は、住み替えから地域内定住への移行として捉えることもできる。都心か郊外かという従来の対立概念による議論は不毛である。新世紀は、まとまった生活圏、生活環境があるかどうかが問われる時代であると認識すべきではないか。

髙田　趣旨には同感であるが、広域か狭域かという問題でもない。現在は、限られた資源である既存ストックをきちんと把握し、それを皆で有効に活用していくことが求められている時代である。広域と狭域の議論は両者の関係性こそが見直されるべきである。都心と郊外についても両者の関係性を再構築することが重要である。それらを実現するために、これからの関西では、専門家の育成とあわせて、市場で賢くプレイできる消費者や、地域のまちづくりに主体的に取り組める住民を育てるシステムづくりが強力に推し進められなければならない。

住田　重要な論点がほぼ議論されたと思う。本日は長時間ありがとうございました。

当日、会場においては、パネルディスカッションの要約を大阪市立大学の檜谷美恵子氏にお願いした。ご協力に感謝したい。

大阪歴史博物館・講演と見学の集い

難波宮跡を例として文化財の保存と活用を語る

小笹光彦
日本建築協会事業委員／ランテック計画事務所

大阪の官庁街のど真ん中、法円坂の一角に難波宮跡が存在する。市街地しかも中心市街地にこれほど広大な遺跡が保存されている例は珍しい。この歴史的な地を保存することに成功した背景には、非常に長い歳月と関係者の並々ならぬ情熱があった。

大阪歴史博物館は昨年11月3日にオープンして半年余りだが、NHK大阪放送局との複合施設、大阪の歴史と文化の情報発信拠点など、様々な点から大きな注目を集めている。

平成14年5月18日（土）、博物館の見学と同時に、プロジェクトの概要ならびに難波宮跡が保存されるに至った経緯などをお聞きする機会を得た。講師には、昭和62年から一貫して文化財保護行政に携わってこられた植木久氏（大阪市教育委員会）をお招きし、「難波宮跡を例として、文化財の保存と活用」という視点から、歴史博物館の建設にまつわる幅広い話を聞かせていただいた。

法円坂付近一帯の歴史性

そもそも、都が飛鳥から難波に遷されたのは皇極4年（645）の大化の改新がきっかけである。当時、朝鮮半島を中心に国際的な緊張状況にあり、難波の地は外交、政治、軍事、通商上の要衝にあるため、孝徳天皇の時に難波宮が建設されたのである。孝徳天皇の没後、都は近江や飛鳥に遷されたが、その間、難波宮は副都としての機能を果たしていた。しかし天武天皇の686年に失火により全焼した。これが孝徳朝の前期難波宮である。その後732年、聖武天皇の時にほぼ同じ位置に再建された。これが後期難波宮である。難波宮は、大化の改新から奈良時代の末まで約140年の長きにわたり主都、副都と定められていたのである。

延暦4年（784）に都は長岡京に遷るが、この時、柱、瓦などの建築資材一切は長岡京建設に流用されたと言われている。この間の都を総じて難波宮と言うが、長らく、その位置は不明であった。

古墳時代に遡れば、応神朝の大隅宮、仁徳朝の高津宮、欽明朝には祝津宮（ハフリツノミヤ）が置かれたというが、その位置はいまだによくわからない。

このころ上町台地が半島状に海に突き出ていたという。半島の東側は河内湾で、それが河内潟になり、河内湖となっていく。淀川や大和川の土砂によって次第に埋められていったのであろう。この大昔の遺跡がすぐ近くの森ノ宮遺跡であり、貝塚が残されている。この貝塚の貝は縄文中期にはマガキであったものが、次第にシジミに変わってきている。縄文時代から人々がこの水辺に定住していたが、水質が塩水から淡水へ変わっていった様子がうかがえる。

上町台地上は古くより歴史の中心地であり、北端には難波宮、大阪城が、南端には四天王寺、夕陽丘が位置し、今で言う上町筋がちょうど尾根筋上にあたる。この付近一帯は、まさに大阪の原点とも言うべき土地柄であり、歴史の宝庫とも言える。

難波宮跡の調査と保存の歴史

難波宮跡の調査の歴史は古く、大正時代にまで遡る。大正2年に法円坂町にあった旧陸軍第8聯隊敷地から、一片の古瓦が出土したことがその始まりである。これに注目したのが山根徳太郎氏である。山根氏は難波宮跡調査におけるキイパーソンであり、昭和48年に没するまで、その半生を難波宮にかけたとも言える最大の功労者である。大阪市立大学を定年退官後、本格的な調査活動を始め、昭和27年に「大阪城址研究会」を結成した。当時、まだ海のものとも山のものとも分からない難波宮跡の調査ということでは研究費が出ないため、名目上は大阪城址の研究調査ということであったらしい。

昭和28年に、法円坂住宅の工事現場より鴟尾（シビ）の破片が出土した。この発見が以後の難波宮跡調査を軌道に乗せるきっかけとなった。このころの山根氏は、毎日ズタ袋を担いで工事現場を歩き回り、作業員に古瓦を見つけたら知らせてほしいと頼み続けていたとのことである。

ここまでが、いわば調査史の前史とも言うべきもので、これ以降本格的な発掘調査が開始されることとなる。

●第1期（昭和29年～35年）

「大阪城址研究会」を「難波宮址研究会」と改め、本格的な調査に入ったが、最初は手探り状態であったらしい。当初は柱の礎石を捜していたが、どうも掘立柱方式であったらしいということと、時代の異なる2時期の柱跡があるらしいということがだんだん分かってきた。回廊跡らしきものが検出されたが、このころが最も苦しい時期であった。思うように成果が上がらず、研究費の打ち切りなどの試練に直面したが、先生の教え子たちからの寄付などで、辛うじて調査が続行されていた。

しかし、昭和35年に後期回廊跡が確認された。これを機に「難波宮址顕彰会」が設立され、大阪市からも補助金が出るようになった。

●第2期（昭和36年～47年）

昭和36年に大極殿跡の発見があり、この地が難波宮跡（長柄豊碕宮跡）であることが決定づけられた。

大極殿の発見については、当時、ほぼ併行して平城宮の調査が行われており、既に内裏、大極殿、朝堂院などの古代宮殿中枢部の構造、寸法が判明していた。この寸法を参考にして、図上で設定した位置から、ドンピシャと大極殿跡が出現したとのことである。

大極殿とは、今でいう国会議事堂と皇居を足したような殿堂で、その当時の国家体制が読みとれるとのこと。孝徳朝の前期遺跡は、そのプロトタイプとも言うべきもので、天皇の私的空間である内裏と、官僚が実際に政務を行う朝堂院の区画が一体化しており、中央集権国家体制であったことが分かる。それ以降のものは、両者が次第に遠ざかる傾向にあり、官僚の力が徐々に強くなっていったらしい。

昭和39年に、大極殿を中心とする17,500㎡が第一次の国の史跡に指定された。そして、昭和46年から史跡公園としての整備が始まり、その最初が大極殿基壇の復元であった。

●第3期（昭和48年～53年）

最大の功労者、山根氏が昭和48年になくなって一時代が終わり、難波宮跡保存の新時代が始まった。

昭和50年に文化財保護法が改正された。それまで、特定の権力者などが所有していた貴重品が博物館内に陳列されているというのが、一般的な文化財に対する通念であった。ところが、この改正により文化財をものやスポットとしてだけではなく、エリアとしても捉えることになった。従って、まちなみなども文化財の範ちゅうに入り、市民の日常生活とのかかわりが強くなり、また埋蔵文化財も評価される時代を迎えた。

この前の段階から、難波宮跡に対して様々な保存問題が活発化した。国の合同庁舎、府立大手前整肢学院、日赤、市立教育青少年センター、阪高東大阪線などの建設予定があり、世論にバックアップされて、協議と調整が行われた。そして、この期に内裏、朝堂院跡72,000㎡弱を国の史跡に追加指定した。

史跡指定地を市が買い上げることとなり、保存問題と史跡整備が大きく前進した。

●第4期（昭和54年～平成4年）

着々と史跡整備が進められた期間である。昭和54年には、（財）大阪市文化財協会が設立され、宮域外の調査も活発に行われ、難波京関連の遺構が数多く確認された。

●第5期（平成5年以降）

文化財の積極的な活用が推進された時期である。

平成5年には大極殿を利用して舞楽が行われ、8年からは「難波宮フェスティバル」と銘打って、多彩な催し物が継続して行われている。なお、現在も発掘調査は着実に少しずつ進められている。

大阪歴史博物館の建設経緯

このプロジェクトは、大阪市の「難波宮跡と大阪城公園の連続一体化構想」がその始まりである。連続一体化させるためには、旧NHKなどが両公園を分断する形になっているため、旧中央体育館跡地約13,000㎡に新NHKを移築し、併せてこの地に歴史博物館を建設しようとするものであった。

昭和60年に一体化構想が公表され、平成6年には大阪市とNHKとで複合施設を建設することが決定し、具体化された。

大阪市では、発掘調査の初期の段階から現地に考古資料館が必要だという意向があり、この地が歴史博物館として絶好のロケーションに恵まれているとのことから、サイトミュージアムを建設することとなった。

昭和63年に、建設予定地から5世紀後半の大建物群跡が発見された。これは16棟からなる高床式の倉庫及び管理棟群で前期難波宮に関連する施設で、大蔵（省）に属する倉であろうと言われている。

当初の計画では、この敷地の南半分に体育館を、北半分に歴史博物館、NHKを建設する計画であったらしい。しかしこの発見により、中央体育館を八幡屋公園内に移し、南半分をオープンスペースとして確保することとなった。

さらに、工事開始直前に、地中から前期難波宮の周辺施設と思われる水利施設が発見された。これは用水溜めを中心とする、給水、排水に資する水路である。古墳時代に使用された生駒石を組んだ見事な遺構で、現在も地下に破壊されないように保存されている。

展示計画のコンセプト

大阪歴史博物館の展示計画は、サイトミュージアムの利点を最大限にいかし、屋内の展示とともに、建物の地下に保存されている遺構、屋外の史跡を組み合わせて、三者が一体となった展示を展開している。

地下の遺構については、建物の地下工事に際して、もとの位置を動かさないことと、大地と直接繋がっていることを条件とした。このため、パイプルーフ工法を採用し、地下遺構の健全な保存に努めたとのことである。この遺構は博物館フロアーの一部を強化ガラスで被い、上から覗けるようになっていると同時に、地下のギャラリーへ入って、同レベルで横からも見られる工夫がされている。



植木久氏の講演は聞き手を難波宮に誘う

10階の常設展示室には、難波宮の大極殿が原寸大で復元されている。その前面には大極殿基壇が見事にとらえられており、サイトミュージアムに相応しく室内空間と前面の史跡が一体となり融和している。さらに目を遠くにやれば、生駒連山の山なみが美しい稜線を見せて連なり、その麓付近には、かつて歴史の舞台となった中河内、南河内あたりがかすかに見える。そして生駒山の背後には飛鳥地方がゆったりと広がっていることだろう。

屋内展示については、まず10階に上がり古代の雰囲気を、9階に下りて江戸期の天下の台所と言われた大坂の町人文化の活気を、8階では近現代の「東洋のマンチェスター」と言われたころの大大阪時代のエネルギーを、おのおのワンフロアーを使って展示している。従来の年表スタイルに沿って満遍なく羅列するのではなく、大阪を代表する時代の象徴的な事象に焦点をあてた展示手法を採用している。なお、秀吉の時代についてあまり大きく扱っていないのは、戦国から安土・桃山時代にかけては、大阪城天守閣の展示と連携をとっているからだとのことである。

＊

当初、工業団地が計画されていた佐賀県の吉野ヶ里遺跡、スポーツ公園が計画されていた青森県の三内丸山遺跡など、今後ますます歴史的、文化的な遺跡や遺構が大切な時代となってこよう。難波宮跡の保存はこれらに先鞭をつけた画期的な事業としても高く評価されている。

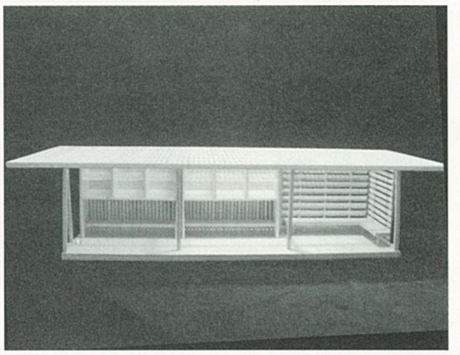
大阪歴史博物館のさらなる充実を期待いたしております。植木さん、長時間大変ありがとうございました。

（おざさ　みつひこ）

日　時／2002年5月18日（土）13：30～16：00
会　場／大阪歴史博物館2階第1会議室
講　演／植木　久（大阪市教育委員会文化財保護課課長代理）
司　会／掃部　彌（日本建築協会事業委員）
参加者／24人

「歌一洋　四国八十八ケ所ヘンロ小屋構想展・高知」

歩き遍路のために、休憩・仮眠ができる「ヘンロ小屋」を四国全域89カ所にボランティアでつくろうと計画している歌一洋氏。昨年は徳島県でヘンロ小屋構想展を開催し、現在、3軒のヘンロ小屋を完成させている。今年は高知県で、高知県内に計画しているヘンロ小屋の模型を展示する。入場無料。

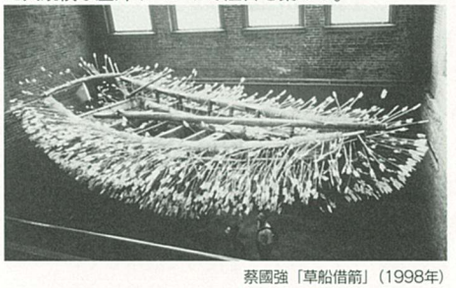


会期　2002年7月30日(火)～8月4日(日)
　　9：00～17：00（金曜日は20：00まで）
会場　高知県立美術館　TEL 088-866-8000
　　高知市高須353-2
問い合わせは歌一洋建築研究所(TEL 06-6252-4772)へ。

兵庫県立美術館「美術の力ー時代を拓く7作家ー」

「生命」「環境」「自然」「癒し」「再生」をテーマに作品を発表している国際的な現代美術家7氏が登場。

• 青木野枝――1958年東京生まれ。流線を多用した鉄の彫刻で知られる。
• 蔡國強――1957年中国福建省生まれ。火薬を用いた大規模な屋外イベントで注目を集める。



蔡國強「草船借箭」(1998年)

• ヘンリク・ハカンソン――1968年スウェーデン生まれ。自然環境や生命をテーマに作品を発表。
• 河口龍夫――1940年神戸生まれ。今回は、蓮を生命の象徴とみなし、生命と様々な空間（土、水、空）とのかかわりを問いかける。
• 小林孝亘――1960年東京生まれ。タイ在住。「癒し」感あふれる絵画を制作。
• ハンス・ペーター・クーン――1952年ドイツのキール生まれ。音と光を使った作品で欧米で評価を得る。
• ビル・ヴィオラ――1951年ニューヨーク生まれ。ビデオ映像を使う現代美術家として国際的に著名。

会期　2002年7月13日(土)～8月25日(日)
　　10：00～16：00　月曜日休館
会場　兵庫県立美術館　TEL 078-262-0901
　　神戸市中央区脇浜海岸通1-1-1

「モデュロールー均整、身体、空間ー」展

ギャルリー・タイセイでは、ル・コルビュジエが発明したオリジナルな尺度「モデュロール」を簡単に分かりやすく紹介する。入場無料。

若いころから自然物の中に潜む幾何学性の研究に没頭していたル・コルビュジエは、やがて美しい古代建築、美術の中に隠された比例を見出す。やがて比例を取り入れたファサードの構成を手がけるなどの取り組みは、黄金比、フィボナッチ数列、そして人体の寸法を組み合わせて作られた「モデュロール」(Modulor＝module＋or＝黄金の尺度）へと発展していく。

会期　2002年7月8日(月)～9月20日(金)10：00～17：00
　　休館日：土日祝日、8月12日～16日
会場　ギャルリー・タイセイ　TEL 03-5381-5510
　　東京都新宿区新宿1　新宿センタービル17階
展示　①自然物、古代の建築・美術作品に見る比例研究、20年代の建築・絵画における比例・規準線
　　②モデュロールの詳細説明
　　③モデュロール、比例を利用した建築・絵画
　　④モデュロール寸法でつくられたル・コルビュジエの執務スペース（原寸模型）

GRANDDAUGHTERS

CGで合成された写真作品で国内外から高い評価を得ている、やなぎみわの展覧会が開かれている。

SHISEIDO GALLERYに登場しているのは、新作映像インスタレーション「GRANDDAUGHTERS」。

会期　2002年6月4日(火)～7月14日(日)ー月曜休みー
　　平日11：00～19：00　日・祭日11：00～18：00
会場　SHISEIDO GALLERY　TEL 03-3572-3901
　　中央区銀座8-8-3　東京銀座資生堂ビルB1階

やなぎみわの新作



なにわ歴博 建築夜講開催

大阪歴史博物館は、「歴史的な建築の見方・楽しみ方」と題する“建築夜講”を企画した。どこに行けば歴史的な建築が見られるのか、どうしたら建築がもっとおもしろく見られるのか、大阪歴史博物館の学芸員と受講者が3回にわたって語り合う。聴講無料。

・第1回「歴史的な建築の学び方」
――まちなかの古い建築を見つける方法、見分ける方法。
2002年7月12日（金）6：30～19：50
・第2回「建築を楽しく見る方法」
――どんな点に注目すればよりおもしろく建築を見られるか。7月19日（金）6：30～19：50
・第3回「建築を探してみよう・語ってみよう」
――自分の気になる建築の写真を持ち寄って、受講者自らその魅力を語る。7月26日（金）6：30～19：50

会場　大阪歴史博物館4階第1研修室
　　地下鉄谷町線・中央線の谷町四丁目駅下車
定員　60名（3回通しでの参加が望ましい）
担当　酒井一光学芸員
申込　往復ハガキで大阪歴史博物館 なにわ歴博 建築夜講係（〒540-0008大阪市中央区大手前4-1-32、TEL 06-6946-6451）へ。問い合わせも同係へ。

ODPデザインセミナー「音環境デザイン」

音環境デザインのパイオニア、庄野泰子氏はar＋Award最優秀賞を受賞するなど、海外でも評価されている。ODPデザインセミナーでは、庄野氏が、手がけた実例について、音や映像とともに音環境デザインを語る。

日時　2002年7月19日（金）15：00～16：30
会場　ATC・ITM棟9階セミナールーム
　　大阪市住之江区南港北2-1-10
定員　150名（予約先着順）
入場　一般1000円、学生500円（当日受付支払い）
申込　アジア太平洋トレードセンター／大阪デザイン振興プラザ事務局　TEL 06-6615-5510

スペースデザインゼミ開講

「近代ランドスケープ・デザインの理論と手法～ショート・プラクティスを通じて学ぶ～」のテーマのもと、具体的なデザイン・コミュニケーション技術を学ぶセミナーが開講される。定員30名。

①2002年8月7日（水）18：45～21：05
②2002年8月28日（水）18：45～21：05
③2002年9月11日（水）18：45～21：05
講　師　佐々木葉二（ランドスケープアーキテクト）
教　室　アーバネックス備後町ビル6階
　　大阪市中央区備後町3－6－14
受講料　一般20,000円（税別）　学生15,000円（〃）
　　―講義初日に支払い―
申込み　大阪ガスインテリアデザインスクール
　　(TEL06-6262-4089、FAX06-6262-7202)へ。

会員短信

土屋壽満さん、東久邇宮記念会賞受賞

日本建築協会会員で、スマ・ブライトアート研究所を主宰する土屋壽満さんが、“光の芸術”（スマ・ブライトアート、コスモアート、ブリリアン・イマージュアート）の発明により建築界、美術界に新分野を誕生させた業績に対して、東久邇宮記念会賞が授与された。

東久邇宮記念会賞は、昭和天皇の女婿で、発明学会名誉総裁であった東久邇宮盛厚殿下の遺言で創設され、埋もれた発明、発明振興に尽くそうとする人々を顕彰している。今までにロケットの研究者・糸川英夫氏からチューインガムや磁力バンドの発明者まで、有名無名の人々が受賞してきた。

7月7日（日）13時、青森県三沢市の古牧第三グランドホテル2階天平閣で東久邇記念の会は、東久邇宮記念会賞授与式を挙行した。

土屋壽満さんは受賞の喜びを、次のような一文で本誌に寄せた。

「虹を　この掌に　捉えたい」

雲をつかむような夢に魂を奪われ、光の中に秘められている未知の扉をひとつひとつ開きつつ、新しい発明に心ときめかせ、創作に生命を燃やしつづけて35年。

思いがけぬ発見の喜びに感涙し、人知を超えた建築空間のアート環境実現に魂をときめかせ、創作をとおして得た多くの方々との縁の糸の不思議さ、ありがたさをかみしめながら生きてきた私に、立派な賞をいただき、この上もない喜びである。

今は、誕生させた光芸（光の芸術）をこの地球上にひろめ、未来へも受けつがれ、人類のしあわせに役立つようにすることが私に与えられた使命であり、生命あるかぎり、「生涯青春」を貫き通したい。

そして、この地球上のいずこかに、人々が至福の喜びを体感できる夢のような光のミュージアムを実現させたい。

ビルディングドクター〈非構造〉講習

「建築仕上診断技術者ービルディングドクター〈非構造〉ー」講習は、建築仕上部・コンクリート部の物理的な劣化診断、安全性診断、社会的劣化診断などを行い、建築物の維持保全に適切な提言ができる技術者育成を目的として、㈳建築・維持保全推進協会が開催し、これまでに資格者約6300人を誕生させている。

平成14年度は、下記要領で開催する。

受　付　8月20日(火)まで。先着順。

申込先　BELCA事業推進部
〒100-0004　東京都千代田区大手町1-6-1
TEL03-5252-3873　FAX03-5252-3871

受講料　50,400円（消費税、テキストを含む）

●東京会場　2002年9月25日(水)～27日(金)
定員220人　総評会館(千代田区神田駿河台3-2-11)

●福岡会場　2002年10月9日(水)～11日(金)
定員120人　福岡朝日ビル（博多区博多駅前2-1-1）

●大阪会場　2002年10月23日(水)～25日(金)
定員120人　大阪科学技術センター（西区靱本町1）

大阪まちなみ賞推薦募集

大阪都市景観建築賞（愛称：大阪まちなみ賞）への推薦募集が始まった。第22回募集要項は下記のとおり。

対象　大阪府域内の建物。建物を中心としたまちなみ。建物は平成9年8月～平成13年7月末に完成、まちなみは平成13年7月末までに完成したもので、周辺景観の向上に資し、景観上優れたもの。

推薦　ハガキ（官製ハガキでも可）に必要事項を記入して、大阪都市景観建築賞運営委員会（〒540ー0011大阪市中央区農人橋2-1-10）へ、7月31日(水)まで（当日消印有効）。

ホームページでも受け付け中。http://www.pref.osaka.jp/osaka-pref/kenshi/utsukusii/machinami.htm

建築確認検査対象枠を拡大

㈶大阪市建築技術協会建築確認センター（大阪市中央区北浜3-2-24北沢ビル5階）は、大阪市内全域を業務区域に、

①建築確認、中間検査及び完了検査

②住宅金融公庫融資住宅の設計審査、現場審査

を行っているが、5月20日から業務対象建築物の枠を拡大している。

・変更前

高さ31m以下かつ延べ面積10,000㎡以下のもの
ー共同住宅（他用途併用、ワンルーム協議対象を除く）
ー住宅・長屋住宅（木造2階建、鉄骨3階建を除く）

・変更後

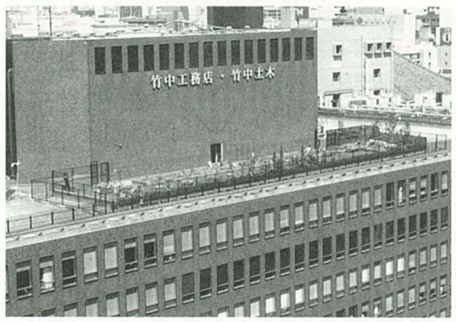
高さ31m以下かつ延べ面積10,000㎡以下の住宅・長屋住宅・共同住宅（他用途併用を含む）

問い合わせは、同建築確認センター（TEL確認06ー4707ー1188、検査06ー4707ー1198）へ。

御堂ビルの屋上緑化を毎週金曜日に公開

竹中工務店の本社ビル「御堂ビル」の屋上緑化が完成し、「スカイオアシスSky Oasis」として4月26日から公開されている。

1965年に、大阪市中央区本町4ー1ー13に完成した御堂ビルの屋上1600㎡の約20％に当たる320㎡を、竹中工務店がモデルプロジェクトとして屋上緑化に取り組んだもので、オリーブ、シラカシなどの樹木や草花120種約3000本が植えられている。



「フレグランスガーデン」（約53㎡）には、針葉樹と、ラベンダー、ゼラニウムなどのハーブガーデン。「ナチュラルガーデン」（約80㎡）は、身近な里山から学んだガーデンで、小さな池とせせらぎを設け、野生生物が生息できるビオトープガーデン。「ドライガーデン」（約57㎡）は、メキシコマンネングサなどを用いた省管理型の薄層屋上緑化システムを採用。これは、昨年竹中工務店が開発したもの。

一般公開は、祝祭日、12／29～1／3の休暇、8／15を挟む休暇中を除き、毎週金曜日12：00～13：00。雨天公開、強風時中止。御堂ビルへは、地下鉄御堂筋線「本町駅」下車C階段5番出口すぐ。

首都圏の賃貸居住者は都心を支持？

今年3月20日～26日の7日間、FAX調査により「首都圏賃貸住宅居住者の住まいに対する意識調査」を、20～50代男女（首都圏在住の賃貸住宅居住者）を対象として日本能率協会総合研究所が実施した。

今回の調査からは、住宅購入に対してはネガティブな反応が強く、賃貸住宅での生活にそれなりに満足している様子が伺える。住み替え希望エリアについては、「郊外」よりも「都心」の支持率が高くなっている。

最近話題のデザイナーズマンションについては、「内容も含めて知っている」「名前だけは知っている」との回答は女性86.4％で、男性71.0％を上回った。さらにデザイナーズマンションへの関心度をたずねると「興味がある」「やや興味がある」との回答は50％を超え、20代女性では72％を超える結果となった。

調査では、“分譲よりも賃貸、郊外よりも都心が支持される”結果になったといえる。

コンパニオンアニマルとの暮らし方読本発行

より良いペット可集合住宅、質の高いコミュニティづくりが求められていく中、1997年に設立された非営利団体「コンパニオンアニマルリサーチ」では、ペットオーナー向け“犬や猫と暮らす集合住宅「飼い方読本」”、不動産会社や管理会社向け“犬や猫と暮らす集合住宅「経営・管理サポート読本」”の小冊子を制作し、1冊100円で実費配布している。

申し込みは、希望冊子名と冊数、送付先等々を明記し、コンパニオンアニマルリサーチ（e-mail：message@cairc.org、FAX：03-5468-5752）へ。





日本建築協会

月間の動き

【平成14年 5 月分】

理事会

第1回常任理事会
22日　3時～3時55分・於本会会議室
出席者　金多会長ほか14名
議　題　(1) 平成13年度事業報告（案）の件
(2) 平成13年度決算報告（案）の件
(3) 定款細則の一部改正の件
(4) 評議員委嘱候補者の件
(5) 常設委員会委員・特別委員会委員の委嘱の件
(6) 報告事項
①ホームページの開設について
②「建築と社会賞」の入選結果について
③会議の開催について

編集委員会

第2回編集委員会
9日　6時～8時・於本会会議室
出席者　設楽委員長ほか7名
議　事　(1) 6月号「都市再生に向けた建築基準法集団規定のあり方」特集報告
(2) 7月号「いま、インテリアデザインは―次世代のインテリアデザイナーの職能に向かって―」特集・「湊町リバープレイス」作品特集経過報告
(3) 8月号「建築設備を支えるセンサーと制御技術」特集経過報告
(4) 9月号建築分科会の企画特集報告
(5) 作品作風、会員企画頁など報告
(6) 収支状況報告

第2回構造分科会
10日　6時～8時15分・於本会会議室
出席者　田渕幹事ほか4名
議　事　(1) 10月号構造特集の企画
(2)「構造の頁」の企画

第2回法令分科会
14日　2時～4時15分・於本会会議室
出席者　森下幹事ほか3名
議　事　(1)「都市再生に向けた建築基準法集団規定のあり方」特集報告
(2)「法令コーナー」の企画

第2回広告企画小委員会
15日　4時～5時30分・於本会会議室
出席者　設楽委員長ほか5名
議　事　(1)「都市再生に向けた建築基準法集団規定のあり方」特集報告
(2) 7月号「次世代のインテリアデザイナーの職能に向かって」特集・「湊町リバープレイス」作品特集経過報告
(3) 8月号「建築設備を支えるセンサーと制御技術」特集経過報告
(4) 作品作風関係報告
(5) 表紙4面広告掲載について
(6) 作品掲載増加のための検討
(7) 独自特集企画について
(8) 収支状況報告

第3回設備分科会
15日　6時～9時・於本会会議室
出席者　河井幹事ほか6名
議　事　8月号「建築設備を支えるセンサーと制御技術」特集の企画

第2回作品作風小委員会
23日　7時～8時45分・於本会会議室
出席者　倉渕副委員長ほか7名
議　事　(1) 作品の選定
(2) 作品の掲載状況並びに掲載予定の報告
(3)「gallery」掲載報告・予定
(4) 11月号会員作品特集号の検討

第1回施工材料分科会
24日　5時～8時30分・於本会会議室
出席者　竹中幹事ほか5名
議　事　既掲載の特集記事をまとめた一覧の解説

事業委員会

第2回事業委員会
21日　6時～7時20分・於本会会議室
出席者　川村委員長ほか9名
議　事　各小委員会からの報告と検討

第2回情報小委員会
8日　6時～8時・於本会会議室
出席者　天野副委員長ほか9名
議　事　実施報告と今後の予定について

第2回見学会小委員会
9日　6時～7時30分・於本会会議室
出席者　松浦副委員長ほか5名
議　事　実施報告と今後の予定について

第2回若い会員の集い小委員会
13日　7時～8時20分・於本会会議室
出席者　杉本副委員長ほか4名
議　事　(1) 30's EYE出版『建築する人たち―アーキテクト・アーティストの素顔』報告
(2) 今後の企画について

出版委員会

第2回出版委員会
16日　6時～7時・於本会会議室
出席者　山田委員長ほか9名
議　事　(1) ＜プロのノウハウ＞と特装本の経過報告
(2) 今後のテーマと執筆者選定
(3) ＜プロのノウハウ＞講座（第25回）の実施報告

第10回結露のトラブルと解決策小委員会（仮称）
8日　6時～7時45分・於本会会議室
出席者　居軒委員ほか9名
議　事　事例の検討、まとめ　他

第2回「建築施工図の作図方法とチェックポイント」出版小委員会（仮称）
20日　6時～7時30分・於本会会議室
出席者　田中主査ほか6名
議　事　(1) 建築施工図の作図方法とチェックポイントに関して
(2) 今後の作業予定について

結露のトラブルと解決策小委員会(仮称)打合せ会（1）
22日　3時～5時10分・於本会会議室
出席者　中川主査ほか3名
議　事　事例（原稿）の検証と確認

教育委員会

第1回講習会小委員会
23日　6時～7時30分・於本会会議室
出席者　藤井副委員長ほか7名
議　事　(1) 建築工事実務講習会の開催について
(2) 同テキスト改訂について

ＩＴ委員会

第3回ＩＴ委員会
7日　6時～7時・於本会会議室
出席者　和田副委員長ほか3名
議　題　ホームページの開設について

講演会

第2回茶室講演会
7日　6時15分～8時50分・於グランキューブ大阪（大阪国際会議場）
講　師　中村昌生氏（京都工芸繊維大学名誉教授）
参加者　68名
講演と見学の集い・文化財の保存と活用―難波宮跡を例に―大阪歴史博物館見学
18日　1時30分～4時・参加者　18名
講　師　植木　久氏（大阪市教育委員会文化財保護課）

見学会

第12回近代建築見学会・大阪府庁舎本館
25日　1時30分～3時30分・参加者　21名
説明　山形政昭氏（大阪芸術大学教授）

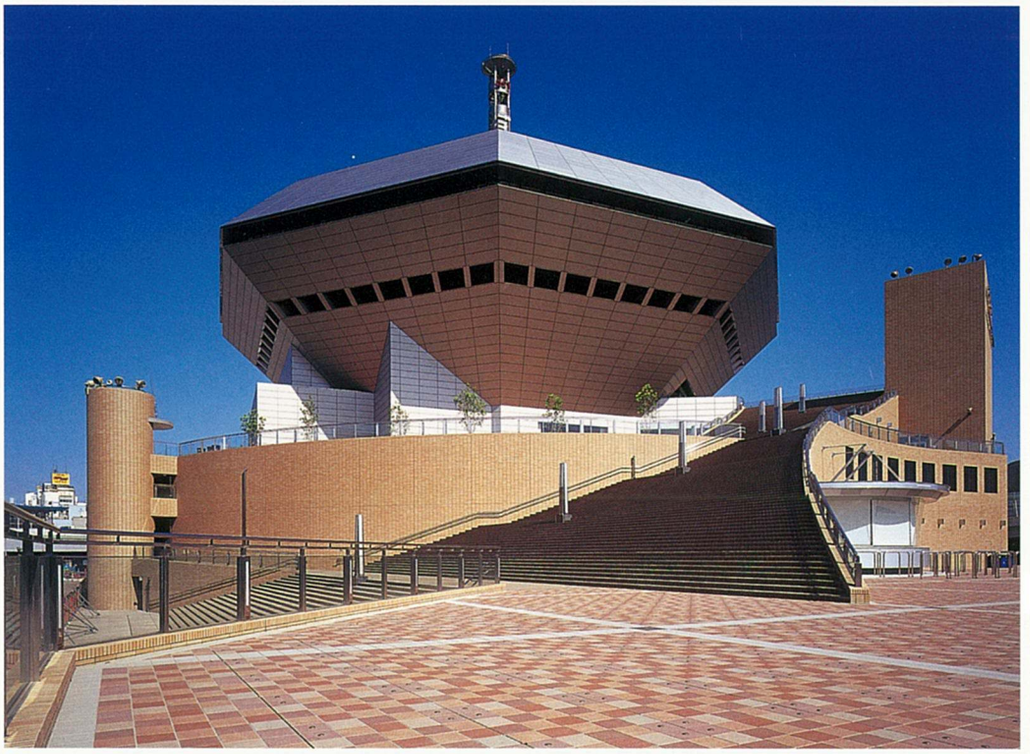
建築クラブ

第360回建築クラブ朝食会
演題　「建築に携わる者によるＮＧＯ活動」
講師　赤尾建蔵氏（財団法人　竹中大工道具館館長）
14日　8時～9時30分・於大阪全日空ホテル
参加者　26名

入会者(敬称略)

〔団体会員〕
新日軽㈱大阪ビル建材支店
〔個人会員〕
川村秀則（エスト）

湊町リバープレイス



設　計	大阪市住宅局営繕部企画課・安井建築設計事務所		
施　工	建　　築	鹿島・前田・中林特定建設工事共同企業体	
	電 気 1	九電工・関電興業特定建設工事共同企業体	
	電 気 2	サンテック・近畿工業特定建設工事共同企業体	
	給排水衛生	日立プラント建設	ガ　　ス　大阪ガス
	空 調 1	三機工業	昇 降 機　フジテック
	空 調 2	協和建設工業	舞台音響　日本ビクター

撮影：島　修一・伸和



北西側外観
▼夜景





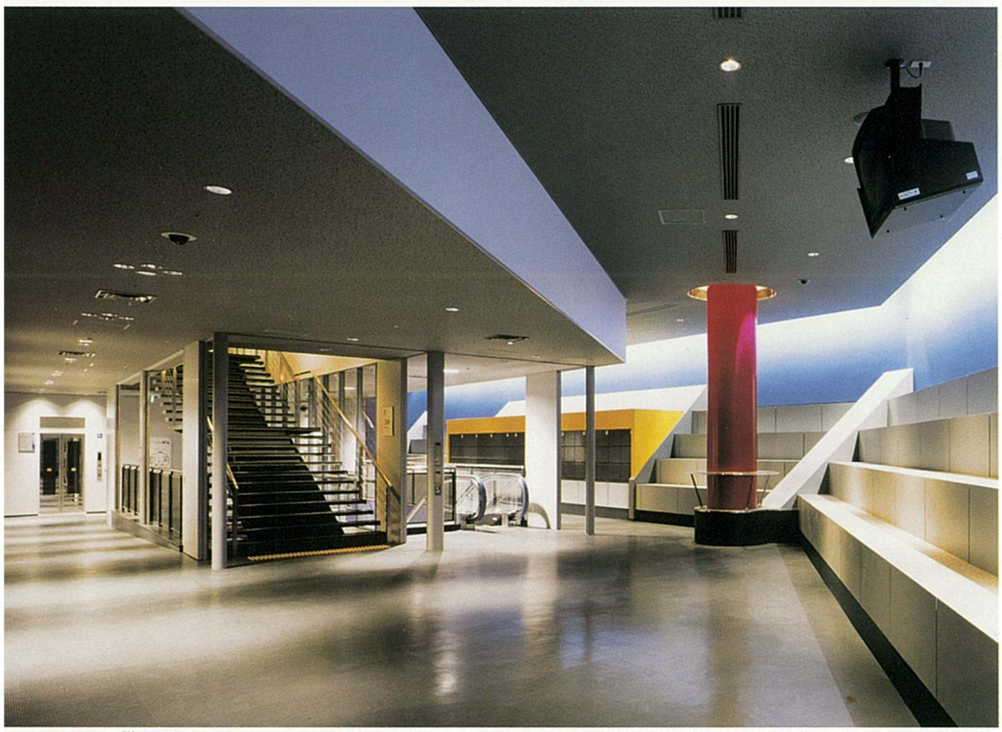
空撮（提供：日刊建設工業新聞社）



ロビー



1階エレベーターホール

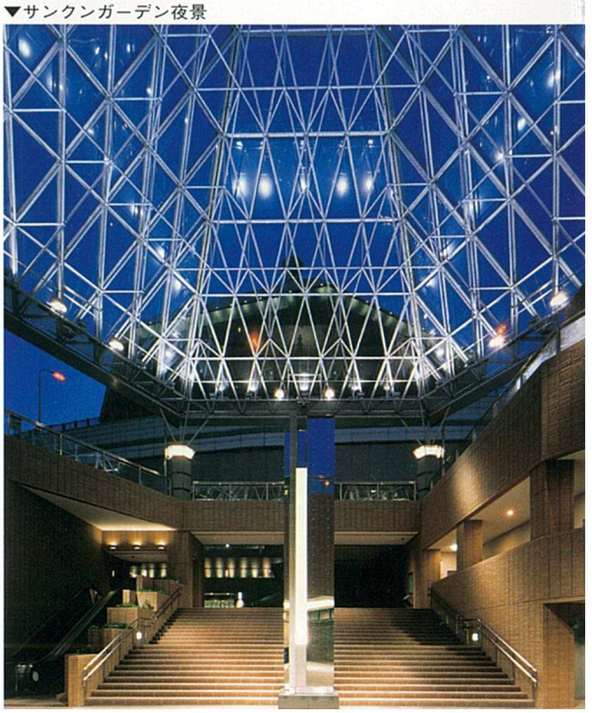


5階ホワイエ
▼L階段



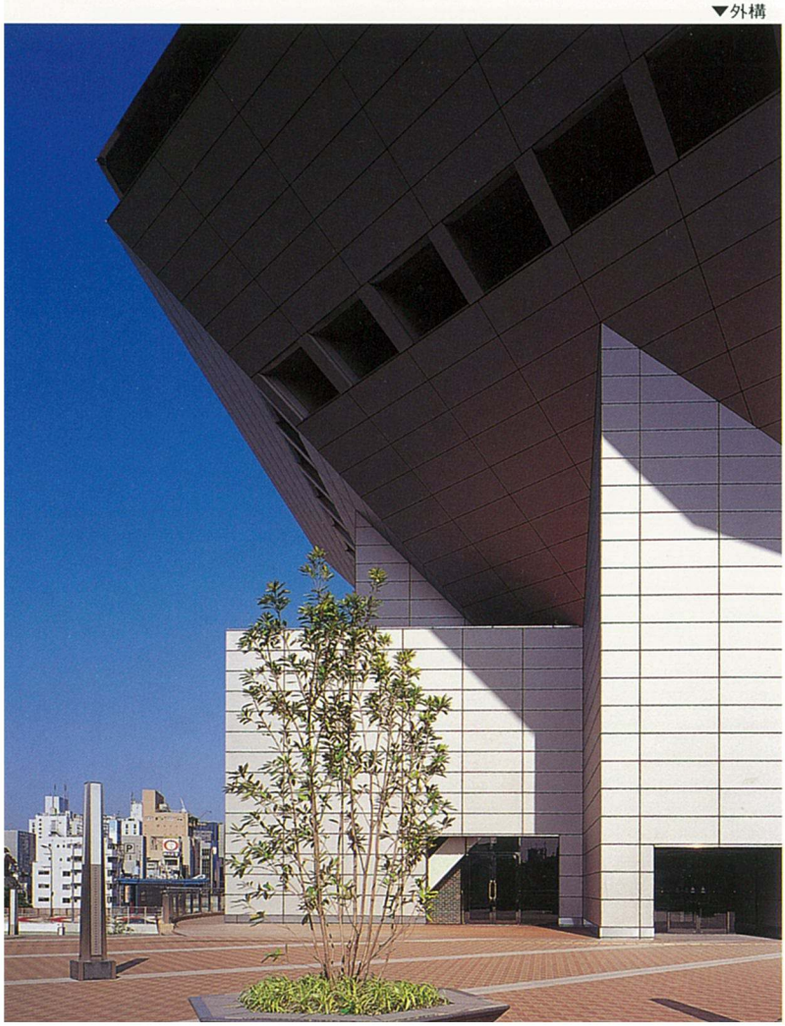
サンクンガーデン
▼サンクンガーデン夜景



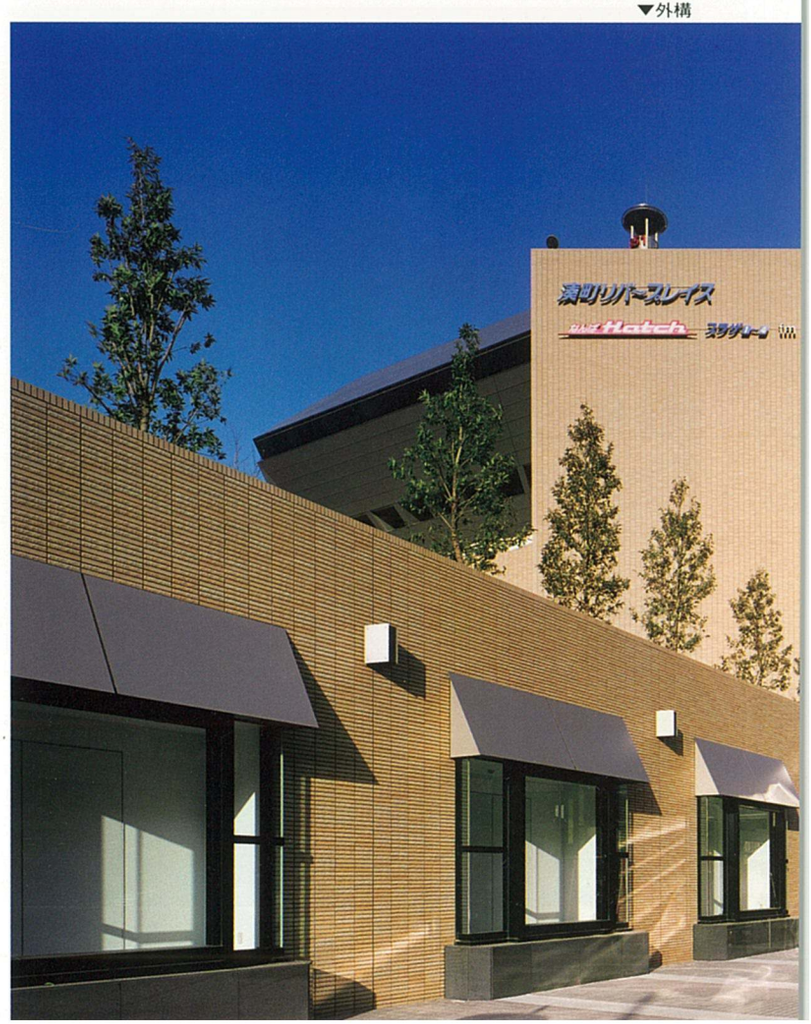


スタンディングホール

▼外構

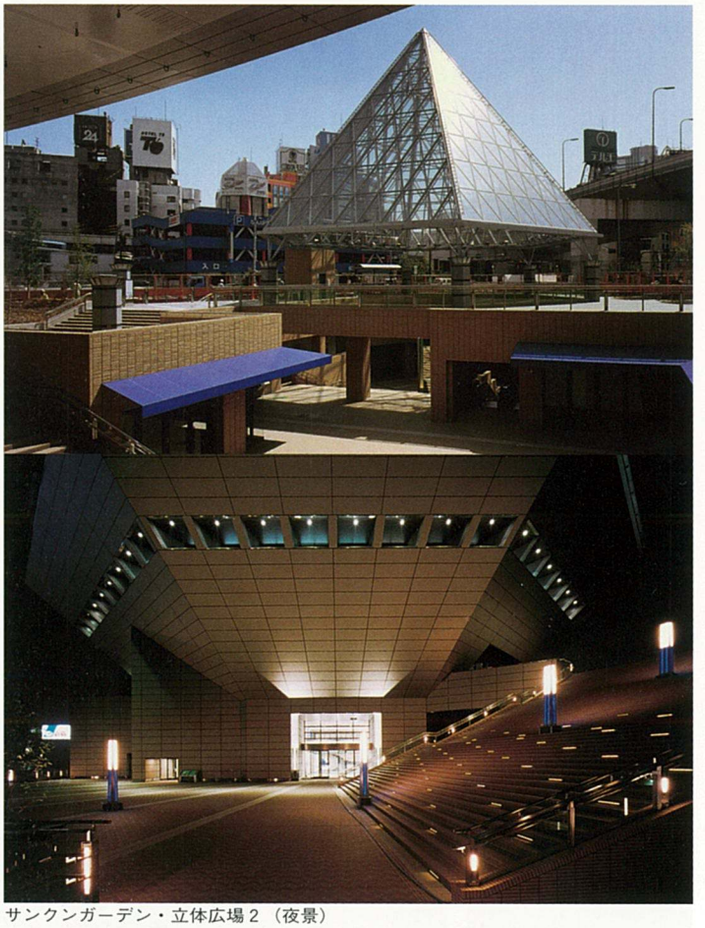


▼外構





立体広場 1



サンクンガーデン・立体広場 2（夜景）



大階段

湊町リバープレイス
広場を主体とした新しい都市空間のあり方

大阪市建設局市街地整備本部
殿本　卓

敷地の中央を東西に分断する形でＪＲ大和路線の引き込み線が通り、その上を阪神高速道路のON、OFFランプが螺旋を描きながら立体交差している。その上部空間を利用して、道頓堀川の水辺と一体となった広場と地域の活性化に役立つ建築物をつくる。これを実現させた施設が湊町リバープレイスです。

約1.8haの決して広いとは言えない敷地の中で、阪神高速道路との合築施設であるため、非常に厳しい設計条件が課せられていました。また、敷地内には既存のＪＲ大和路線の引き込み線や阪神高速道路本線が存在し、さらに周囲の幹線道路の地下には地下鉄四つ橋線、千日前線が近接するなど施工条件も非常に厳しいものでした。「本当にこんな建物ができるのか」「図面ではうまく納まっているように見えるけど、実際に施工できるのか」こんな不安をいつも抱えながらも、「都心に水辺と一体となった立体広場をぜひとも実現させたい」という思いで、この計画を進めてきました。

様々な案を検討してきた結果、「道頓堀川の遊歩道と連なる最大幅40ｍ、約100段をこえる大階段と広場からなる7,000㎡におよぶ立体広場」と「スタンディングを主体とした1,500人収容の音楽ホール」の建築におちつきました。しかし、それからの設計・施工・工程調整などの作業は想像を絶するものがあったろうと思います。建設に参加していただいた関係者の苦労に対して敬意と感謝の念に耐えません。

おりしも、平成13年12月の都市再生プロジェクト・第３次決定において、「水の都大阪」の再生が打ち出され、先行的に道頓堀川の環境整備を推進することが採択されました。これまで街の中で孤立していた道頓堀川を、河川と川沿い建物が一体利用できる空間を生み出すこと等により、にぎわいのある街並みを創造していこうとするものです。これはまさに、湊町リバープレイスで実現しようとしてきたことであり、湊町リバープレイスの出現は、これからの水辺整備のモデルケースを提案できたのではないかと思います。

今後は、この立派な施設を活用し、多くの人に楽しんでもらえるイベントを誘致するなど、湊町リバープレイスが、ソフト・ハードともに大阪の新しい名所となるように努めてまいりますので、皆様の応援方よろしくお願いします。

（とのもと　たかし／大阪市推進部施設整備担当課長）



河川側立体広場

湊町リバープレイス

大阪ミナミの再生

安井建築設計事務所

渡辺一郎

湊町地区全体の計画の中でも最北端にあり道頓堀川に面した敷地にこのほど完成した“湊町リバープレイス”は、大阪市と阪神高速道路公団が共同して施設整備にあたった事業である。計画は建築と土木の融合を目指した類まれなプロジェクトとなった。

建物の施設内容は、スタンディングホールと、オフィス、店舗、パーキングエリア休憩所で構成されており、あわせて水辺に広がる立体的な広場（立体広場）等で、新たな都市のにぎわいを創出する機能を有するものである。

また、隣接工事として、ナンバウォークやOCATにつながる東西地下通路工事、河川整備工事、周辺道路整備工事等があり、周辺地域を含めた総合的な都市形成に寄与する計画である。

湊町の位置付け

大阪での集客エリアとしては、キタとミナミが有名である。キタは大阪駅（梅田）周辺、ミナミは難波周辺の繁華街を指す。

ミナミでは、湊町地区再開発のほかにも種々の開発が同時進行している。そして、アメリカ村、ヨーロッパ村等の若者文化が活性化して、特にここ最近は、アメリカ村が南や西に広がり、本計画地に隣接した家具屋街（立花通り）にまで人の流れが広がってきている。

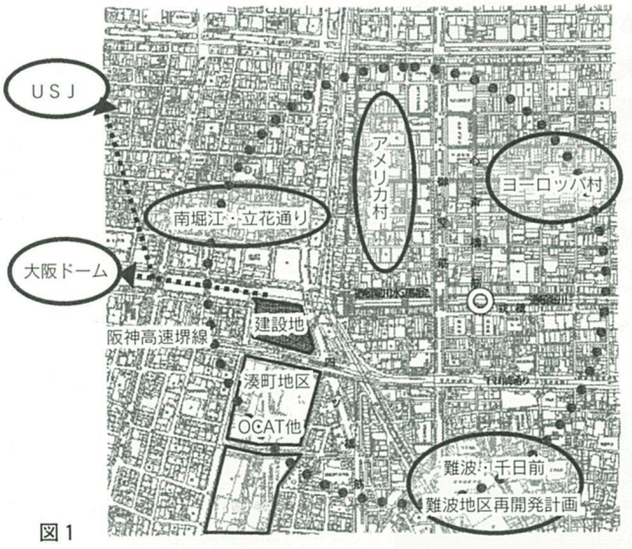


図1

湊町地区と難波駅前の開発全体が完成すると、将来的には図1のような回遊動線が形成され、ミナミの核の拡大が予想される。湊町地区のにぎわいを実現し、ミナミ、そして大阪を活性化させる拠点となり得る計画として、湊町リバープレイスの果たす役割は大きい。

敷地周辺を取り巻く環境

河川計画：道頓堀川は大阪の顔であり、直交する心斎橋筋との交点である戎橋（通称：ひっかけ橋）は人を魅了するミナミの中心ポイントである。一方、湊町エリアは船着き場とステージを装備する新しい水上交通の拠点であり、JRや、地下鉄四ツ橋線及び千日前線の駅も至近距離の立地条件にある（図2）。この戎橋から湊町にかけての道頓堀一帯を結ぶエリアを拠点として、東西に水辺整備事業の計画が進められている。

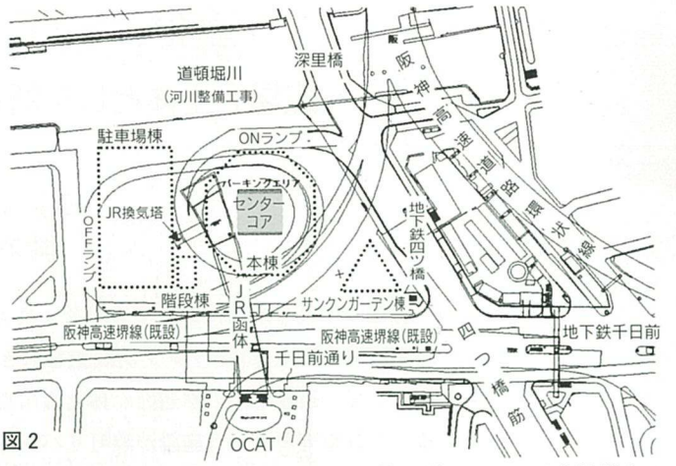


図2

湊町エリア南岸の河川整備は2001年に完成し、徐々にではあるが、活性化に向けて整備が進行している。

JR計画：終着駅のJR難波駅（OCAT地下部分）が完成し、折り返しのための引上げ線が、本敷地内に先行して完成していたが、地上には地下路線のための換気塔が飛び出した形で用意された。突出していた部分は、現在は撤去され建物内に取り込まれている。

東側地下街路：東側地下街路は、難波にある中心的地下街（ナンバウォーク）につながる部分で、本施設とも重要な接続動線部分となる。今までの地下街路を拡幅し、道頓堀川や湊町リバープレイスに向かって開かれた動線となる。

西側地下街路：西側地下街路は、OCATのサンクンガーデンと本敷地を結ぶ地下通路である。湊町地区との直接の接続動線として重要な部分である。

地上歩道工事：地上の環境整備として、歩道の美化と道路の付け替えや、阪神高速道路のON、OFFランプ新設に伴い、全面的に再整備される。

阪神高速道路：敷地内の阪神高速道路施設は、既設線で阪神高速道路堺線が現存し、ONランプ、OFFランプ、パーキングエリアランプ、およびパーキングエリア（PA）が新設された。

この道路施設のほとんどは、湊町リバープレイスの中に内蔵される。そのため、各部分との相関を互いに避けた形で線形が決定されてきた。区分所有については、大阪市と阪神高速道路公団間において、空間使用の取り決めがなされ、一敷地の中での建築・土木双方による合築が実現化された。

施設構成

数々の変遷を重ねた結果、建物は、本棟・サンクンガーデン棟・駐車場棟・階段棟の4棟で構成した。また、広大な屋外広場部分は「立体広場」として集客性を持たせた。

本棟は、複雑な部分で、土木と合築のため縦横に建築的グリッドが構成できない棟である。柱の平面位置について種々の制約の中で

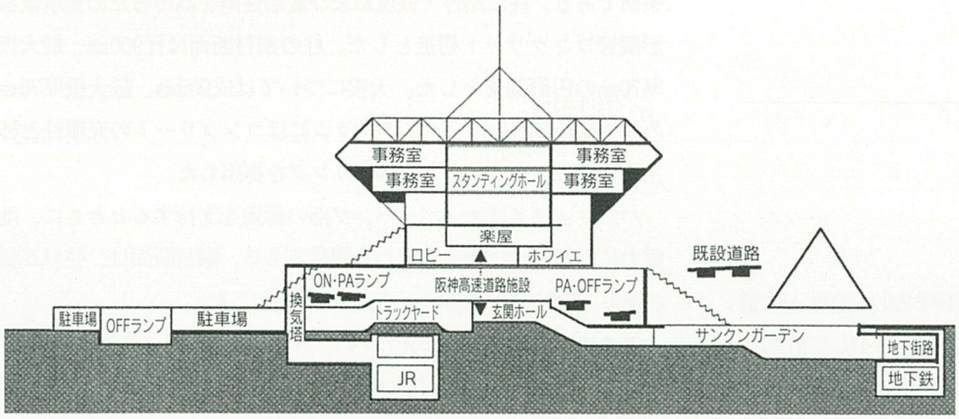


図3

中央のセンターコア部分のみが通常の柱グリッドを形成し、上部階はそれから張り出す形となった。用途構成を図3に示す。

1階および地下1階にかけて玄関ホールがあり、裏側にはサービスヤードが配置されている。下層階外周部は高速道路に囲まれているため、アクセスは南側の一部分に限られた。

高速道路施設を通り抜け、3階には吹抜けのロビーがあり、そこから、飲食テナント、スタンディングホール、玄関ロビー、立体広場などに接続している。

5階から7階のセンターコア内に吹抜けがあり、1500人収容のスタンディングホールが入っている。5階がスタンディングエリアで、6階部分に固定席がある。大音響の音楽と、大勢の人がリズムをとったりジャンプをする場所で、周辺の居室および上階オフィスへの遮音・防振に関しては十分な配慮を行った。なお、楽屋は4階にあり、裏階段でホールに直結している。

6階は管理事務室とテナントオフィス（一部エフエム大阪）、そして最上階の7階はすべてテナントオフィス（エフエム大阪）で構成された。

2階部分は阪神高速道路施設（パーキングエリア）で、駐車場（23台分）と便所、それから自動販売機コーナーとしての休憩スペース、およびPAランプがある。

なお、この建物の主な機械室は1階と屋上階に集中配備した。

サンクンガーデン棟は地下2階で、ナンバウォークからつながる地下街路に接続する玄関にあたる場所だ。地下街路から高速道路をくぐり、建物につながる構成になっているが、上空では既存の高速道路で四周分断された空間である。ここに建てたガラスキャノピーは、高速道路の威圧感を解消するようにデザインをした。なお、地下1階部分には、飲食店舗が配置される。

駐車場棟は平屋でありながら、高速道路で分断されている。そのため、ビル用駐車場とテナント用駐車場に分けて配置された。

階段棟は接続レベルの違う西側地下街路と駐車場棟、本棟間にあり、各動線をつなぐ役目がある。

「立体広場」は、屋外の外構部分と屋上部分を4カ所の“プラザ”にゾーニングし、種々の個性的な機能を実装した。

内外装イメージ計画

全体立面構成は、下層階は「丘」をイメージし、土質系のアースカラーで統一。上層階は、「未来的」なイメージから、金属色やモノトーン色を基調として構成した。

全体内装構成は、相異なった性格のオフィスやスタンディングホール等が動線的に交差しながら計画されているため、統一した単純な計画にはならなかった。基本色に、クールグレー（新しい、清潔）、青（川、水）、赤（エキサイティング、力強さ）、黄（雅、高貴、アースカラー系）をテーマカラーで選び、場所に応じ中間色系からエキセントリックな原色系へと使い分けた。

道路上空部分の外壁

道路の上空でのメンテナンス作業は、ほとんど許されない部分である。道路のメンテナンスの合間に行うことになる。

上層階の金属パネルは、チタンの等圧工法を採用した。メンテナンスはすべて三角形に空いた室内側デッド部分から行う。そのため、断熱性能を持たせた法定外壁と金属パネルとは、セパレートせざるを得なかった。室内側の垂直壁が、断熱性能を持たせた法定外壁になる。外側の斜め外壁は、風雨に対して有効で、メンテナンス時の落下防止を兼ねている。

建築設計手法―仮想国家座標軸の作成―

阪神高速道路や、JR、河川、西側地下街路、東側地下街路、その他、多岐にわたる取り合い部分との設計プロセスにおいては、通常の建築計画手法で対応することは困難であった。

土木構築物は、国家座標や各地域の基点からの独自座標を基準に計画されている。阪神高速道路計画が国家座標を使用して設計されていたため、その他の土木エリアも、建築部分も、共通の国家座標を基に計画を進めた。設計図面はパソコンで共通のソフトを使用した仮想国家座標軸上で作成し、すべての検討および図面が同一図面上に合体できるシステムで進めた。また、道路は建物と違いほとんどの部分が水平ではなく、斜めによじるようなクロソイド曲線にて出来上がっている。三次元クリアランスの中での建築計画は難題であった。派手に見える上層階のダイアモンド形状の比ではなかった。

他に、防災計画・振動音対策・メンテナンス計画・工程計画等についても課題の多いプロジェクトであった。

開かれた新・湊町地区へ

全体の計画は広場を中心に、周辺に開かれた計画になっている。この広場と、スタンディングホールの運営が両輪となり、施設全体がミナミの若者文化の拠点となることで周辺環境は著しく変わっていくだろう。今後、ミナミへ続く湊町地区全体の整備にも拍車がかかり、集客エリアの拡大と多様性のある地域をつくり、魅力的な都市形成に寄与するランドマークになるだろう。

（わたなべ　いちろう／安井建築設計事務所設計部）

湊町リバープレイス

構造計画―本棟―

安井建築設計事務所

森高英夫／尾上清治

当施設は立体道路制度を活用して阪神高速湊町北出入路と一体整備を行ったものであり、建物と土木構造物の融合を目指して計画した。建物はサンクンガーデン棟、駐車場棟および本棟の３棟により構成されている（図１）。

本棟は新設・既設の道路構造物や、JR線および地下鉄などの既設地下構造物に囲まれた場所に位置している。この限られたエリアに、主用途であるスタンディングホール、オフィスおよび高速道路ランプ・パーキングエリアを設けるため、本棟上層部は45度にオーバーハングした骨組で構成し、その中央部にスタンディングホール、その外周部にオフィスを配置する計画とした。

本棟下層部においては建物内にランプの一部とパーキングエリアを取り込み、その直上階には広場やスタンディングホールロビーなどを配置して、建築と土木の空間の融合化を図った（図２）。

本棟上層部

本棟上層部の逆正八角錐形空間を構成する主な架構は、①建物中央に位置する鉄骨鉄筋コンクリート造耐震壁付ラーメン構造骨組（以下、コアフレームと称す）と②オーバーハング部を支持する鉄骨造骨組（以下、ハットトラスおよびダイアゴナルコラムと称す）である。図３に構造骨組３Ｄを示す。

コアフレームは、本棟の主な鉛直荷重および水平荷重を支持する架構である。柱は剛性・強度および変形性能を高めるため充填被覆形鋼管コンクリート構造とした。柱の鋼材断面は径900㎜、最大板厚70㎜の円形鋼管とした。大梁については成900㎜、最大板厚75㎜の組立H形鋼とした。ダイアフラムにはコンクリートの充填性と柱主筋の納まりを考慮して、鍛造リングを採用した。

ハットトラスはオーバーハング部の荷重を支持するとともに、地震力に対する抵抗要素も兼ねる架構である。鋼材断面は、弦材が幅400㎜、ラチス材が幅350㎜の広幅H形鋼とした。

ダイアゴナルコラムはコアフレームとハットトラス先端をつなぎ、オーバーハング部の荷重をコアフレームに伝達する部材である。鋼材断面は径600㎜、最大板厚50㎜の円形鋼管とした。またダイアゴナルコラムの各階接合部では、H形鋼梁と円形鋼管部材がそれぞれ３本または４本で結合するため、スムーズな力の伝達を意図して鋳鋼品を使用し、FEM解析により局所的な応力集中が生じていないことを確認した（図４）。

本棟下層部

下層部においては、道路構造物と建築構造物の配置の調整に最も苦心した。道路部分のうちOFFランプの一部とパーキングエリアは一体構造として建物内に取り込むものとし、この部分の床版や桁受梁など車両の動荷重の影響を直接受ける構造部材は、「道路橋示方書」等による土木仕様も満足するよう設計した。また広場の階段部分は既設JR函体の上部にあるため、函体をまたぐトラス梁を設けて、その上部に設置した鉄骨造柱で支持するようにした（図２参照）。トラス梁のスパンは約30mで鉄骨鉄筋コンクリート造とし、その鋼材断面は成400～700㎜、幅400～450㎜、最大板厚50㎜の組立H形鋼とした。

（もりたか　ひでお・おのえ　せいじ／安井建築設計事務所構造部）

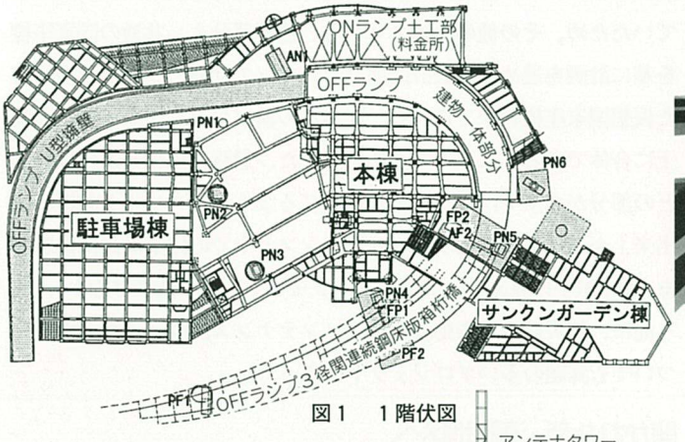


図１　１階伏図

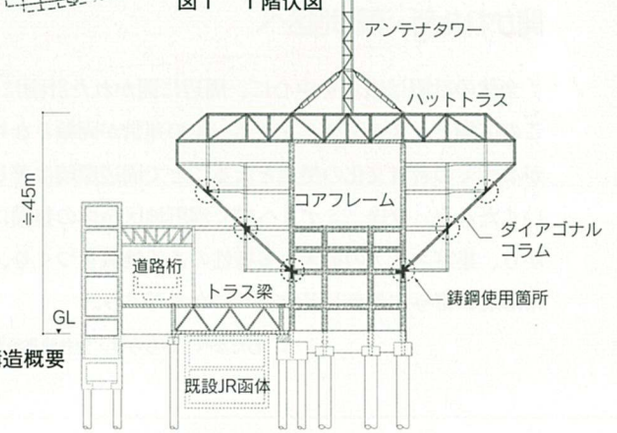


図２　本棟構造概要

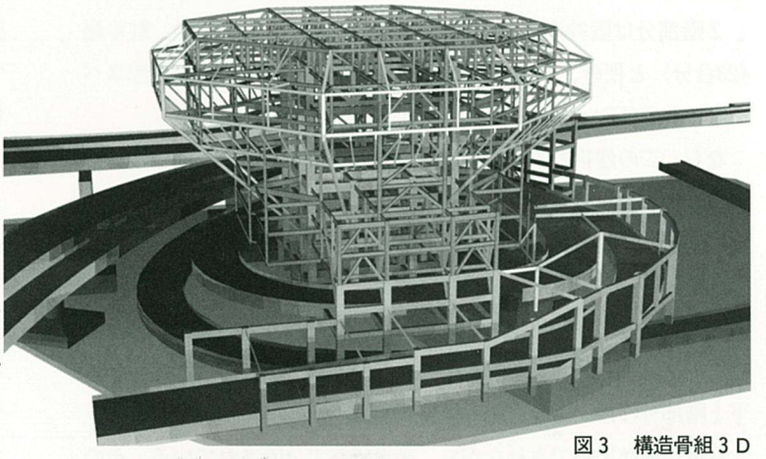


図３　構造骨組３Ｄ
作成：渡辺一郎
（安井建築設計事務所）

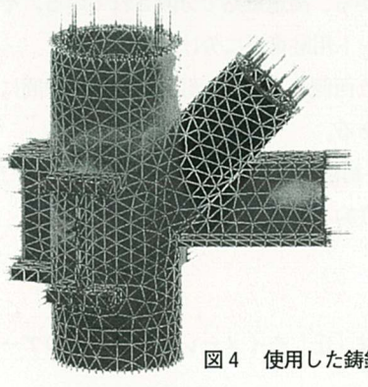


図４　使用した鋳鋼品接合部とそのFEM解析結果

湊町リバープレイス

設備計画—空調計画と電気設備—

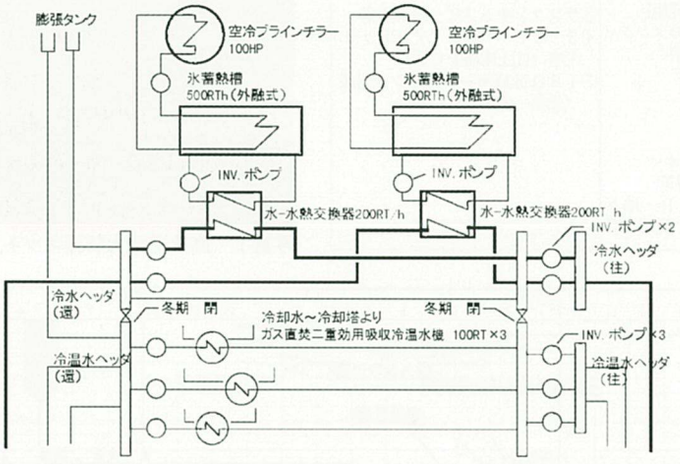
安井建築設計事務所

坂東功一／山崎貢沢

熱源設備

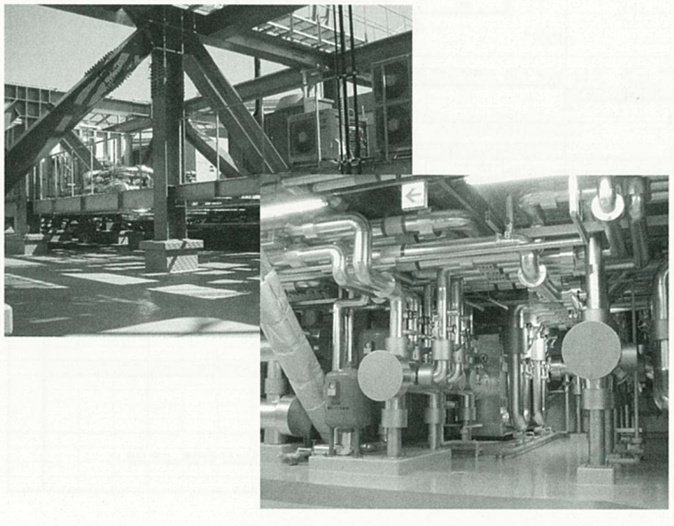
スタンディングホールをメイン施設とするこの建物の熱負荷は、コンサート開催時の数時間に集中する。また、熱負荷の大部分は1500人の興奮状態で発生する人体負荷が占める。その熱負荷特性に合わせて効率良く処理するため、急速取り出しが可能な外融式氷蓄熱（500RTh×２基）を採用した。

これらの熱源は、屋階のハットトラス（構造主体ブレース鉄骨）間に、左右対称に設置した。



空調設備

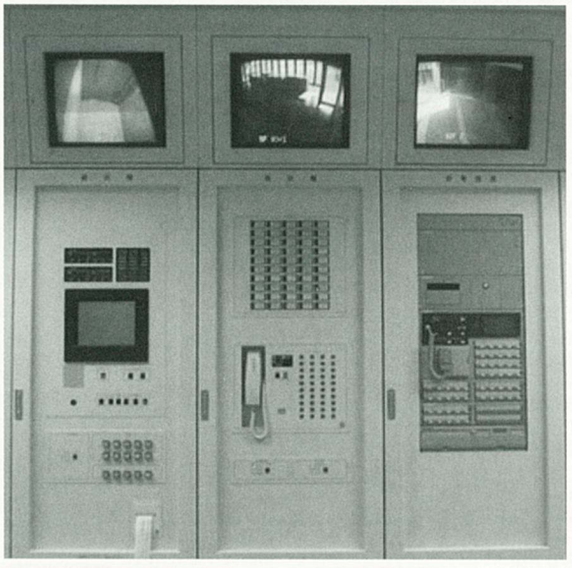
熱狂的なファンが、興奮状態でアーチストと共に数時間すごす施設であるため、通常の２倍となる１人あたり50㎥/hの外気量を供給することとした。また、観客たちが発する汗による、むしむしした環境を和らげるため、顕熱交換器による除湿再熱可能な空調機を採用した。



警備と保安体制

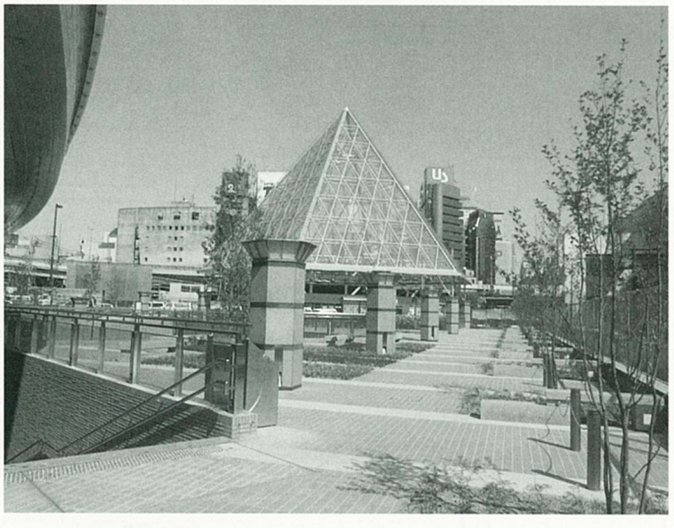
１階防災センターに中央監視盤を設置し、受電設備、熱源設備、空調設備、衛生設備の監視制御を行う。防災センターには、ほかに防災監視盤、鍵管理監視盤、ITVモニター盤等を集約して設置しており、設備管理と保安管理が一体化できる計画とした。

また、防災以外の個別管理テナントとしてエフエム放送局があり、防災センターと通信・CRT画像を通して連携ができる計画とした。



照明

屋外照明では、安全性はもとより、大都市大阪にふさわしくにぎわい性や集客性をも考慮しながら、施設の光環境を構成する。従来の広場や公園などの照明は、機能やコストを重視して高ポール照明を用い広範囲の照度を確保する手法が多く、身近な感覚や、歩く楽しさを演出するためには今ひとつ要素が不足していた。歩く人の目線に照明を合わせ、新たな関心を呼び起こすデザインとし、ここを訪れた人が憩い、愛着を感じ、新しい発見、好奇心を刺激する光環境を創造している。



（ばんどう　こういち・やまざき　こうたく／安井建築設計事務所設備部）

湊町リバープレイス

施工

鹿島・前田・中林特定建設工事共同企業体

後藤幸満／田村謙介／和田明博

当現場は、次に挙げるJV所長方針のもと、工事を進めた。

①事例の少ない複合機能と極めて独創的なデザインを合わせ持つリバープレイスを、ユニークな発想力と全員参加による入念な計画および強力な実行力で完成させよう。

②多機能で輻輳した建設工事を、発注者・施工者・作業員『みんなの心の和』で『安全にきれいに速く』建設し、誇りを永遠に持とう。

われわれは、これをスローガンに取り組んだ当工事の特殊性を表1にまとめた。その代表例をここに紹介する。

周辺関連工事との調整

阪神高速道路工事、四ツ橋地下通路工事、地下鉄道函体延伸工事、道頓堀水辺工事など、土木工事を主体とする発注者・請負者の異なる周辺関連工事の施工に関する取り合い調整が必要であったが、施工計画・工程などの近接事前協議などを通して、当現場所長にて統括管理・調整した（表2）。それにより円滑に搬入・工事を進めることができ、無事竣工を迎えることができた。

敷地内の阪神高速道路に対する防護対策

本棟の鉄骨工事・外装パネル工事を進めるにあたり、本棟南東側から阪神高速道路までの距離が5mしかなく、施工中の阪神高速道路への飛来落下防止

表1　工事の特殊性

計　画	躯　体	仕　上　げ	そ　の　他
①周辺別途工事の調整 ・阪神高速道路工事 ・四ツ橋地下通路工事 ・西側通路地下横断工事 ・道頓堀川水辺整備工事 ・地下鉄道函体延伸工事 ②敷地内の阪神高速道路に対する防護対策 ・鉄骨・外壁仕上げ時の落下防止対策 ③統一基準墨 ・国家座標基準（ＧＰＳ活用） ④地下鉄・高速道路・ＪＲ・近接施設への影響対策	①オーバーハング特殊形状鉄骨 ・ダイヤゴナル鉄骨 ・ハットトラス鉄骨 ・コアフレーム ・パネルゾーン鋳鋼仕口 ・ＳＴコラム、ＳＴリング ・逆八角錐形鉄骨の建方精度確保 ②ＣＦＴ ・コンクリートの充填確認 ・増粘剤使用コンクリート（Fc42N/mm^2）の圧入 ③地下鉄躯体と極々近接した山留の施工 ・施工クリヤー　5cm ④ＲＣ造・ＳＲＣ造・Ｓ造・ＰＣ梁が複合した構造物の施工計画（ＱＣＤＳ）	①外壁オールチタンパネル採用 ・防眩性 ・メンテフリー対策 ・ユニット工法 ・オーバーハング部落下防止メッシュ鉄筋(竣工後のメンテナンス用昇降設備兼用) ②スタンディングホール ・ホール騒音防止対策 ・ホール振動防止対策 ・ホール音響工事 ③エフエム大阪スタジオ ・スタジオ遮音・防振対策 ④阪神高速道路・地下ＪＲ・地下鉄からの建物への音・振動対策	①大阪市・阪神高速道路公団等、その他別途関連工事 ②屋上エフエム大阪アンテナタワー工事 ③サンクンキャノピー屋根工事 ④２・３Ｆペデスタリアンデッキ工事（仕上床版ＰＣ版） ⑤ＩＳＯ14000サーベイランス対象（建築・土木とも）

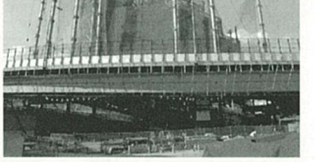
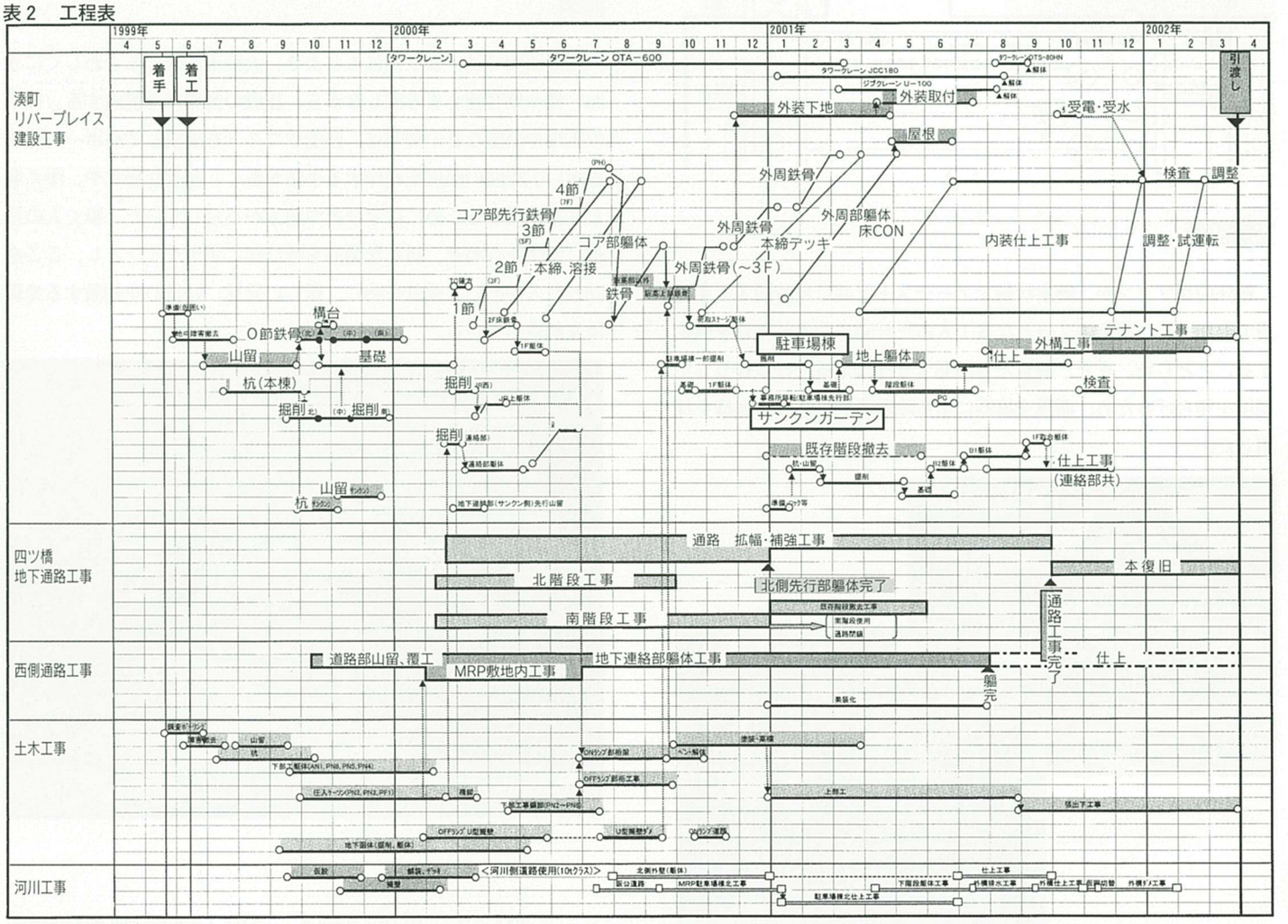


写真1　高速道路大防護ネット

表2　工程表



対策として高さ35mの支柱を７本持つ大防護垂直ネットを設置した（**写真１**）。さらにネット部分はウインチによる昇降装置を付けて、これを毎日上げ下げすることで飛散防止を完全に行い、夜間・休日の風によるネットの崩落もなく、安全施工ができた。

本棟鉄骨(オーバーハング特殊形状)の建方と品質確保

ダイヤゴナルコラム・逆八角錐形鉄骨の建方には、入念なベント（仮設支柱）計画と大型地組建方工法（**写真２、３**）を採用して、鉄骨精度および建方時安全性を向上させた。また、GPS・光波トランシットを積極的に活用し、三次元的に位置精度管理を実施した。

また、ダイヤゴナルコラムフレームとコアフレームとの接合部は、鋳鋼仕口とし（**写真４**）、超音波探傷試験の方法を工夫して、鋳鋼内部の品質確認に努めた。

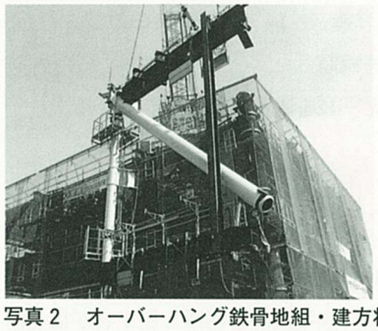


写真２　オーバーハング鉄骨地組・建方状況

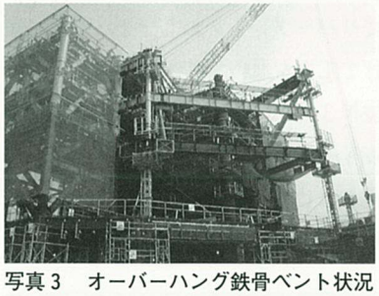


写真３　オーバーハング鉄骨ベント状況

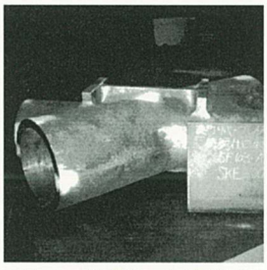


写真４　鋳鋼仕口製品検査

外装チタンパネルの施工

外装チタンパネル施工に先立って、各種プロジェクト見学・風洞実験（**写真６**）・防眩性試験（**写真５**）・モックアップ組み立て試験（**写真７**）等の確認検証を行い、チタンパネルの表面ロールエンボス処理・等圧ディテール（**図１**）等、大阪市・㈱安井建築設計事務所のもと決定した。

また外装チタンパネルは、ユニット化して、無足場にて取り付けする方法をとった。無足場で施工するにあたり、先行して本棟５FLから７FLの外壁オーバーハング部分には、竣工後の外壁パネル内部のメンテナンス用昇降設備を兼ねた「落下防止メッシュ鉄筋金網」（**写真８**）を取り付けた。これにより、オーバーハング軒天部分の外装パネルユニットを下部で地組みし、建物内部よりウインチでユニット上部を２点吊りし所定の位置まで吊り上げ、ユニット下部に取り付けたワイヤーで引き込んで取り付けるという工法（**写真９**）を、安全にかつスピーディーに施工することができた。

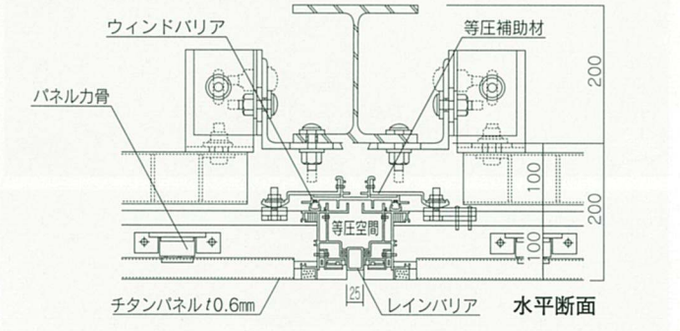


図１　等圧ディテール



写真５　防眩性試験

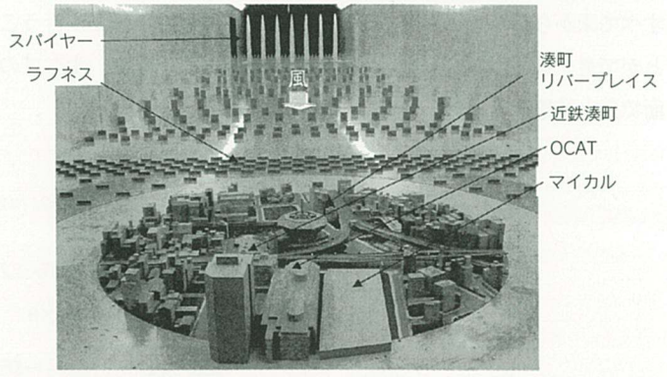


写真６　風洞実験

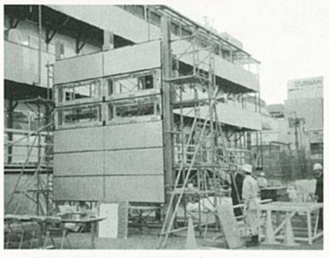


写真７　モックアップ組み立て試験



写真８　落下防止メッシュ鉄筋金網

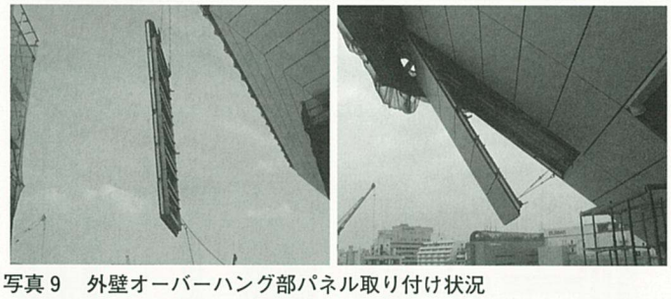


写真９　外壁オーバーハング部パネル取り付け状況

スタンディングホールの防音・防振性能の確保

建物の中心（５F～７Fコアフレーム部分）にある1500人収容のスタンディングホールは、設計計画値を超える最大出力140dB（日本最高）のスピーカー導入が着工後決定し、他のフロアー（エフエム大阪をはじめとする音楽系テナント）への音・振動の影響が懸念されたため、㈱安井建築設計事務所・鹿島技術研究所が一体となっ

て床・壁・天井の仕様が見直された（図2）。

施工に関しても、テナントに対する可聴化実験・振動実験等を繰り返し、PC壁部分の鉛貼りによる隙間処理・浮納まり部の絶縁確認などの施工管理を徹底することにより、テナント各エリアへの設定*NC*値をクリアすることができた。

工程を考えるとホール吹抜け部分では、床・壁・天井同時に施工を進める必要があり、内壁足場は壁からブラケットを出したものに組み立てしたり、天井足場は本設のブドウ棚を利用するなどして、すべて床から浮かす工夫をしたところ、余裕を持った施工が行うことができ、QCDSE（品質・コスト・工期・安全・環境）すべての面で良い結果となった。

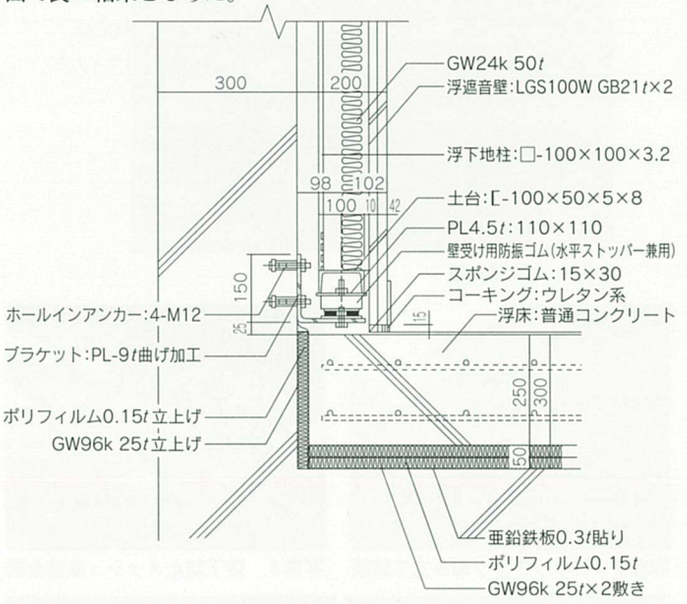


図2　スタンディングホールの床・壁の仕様

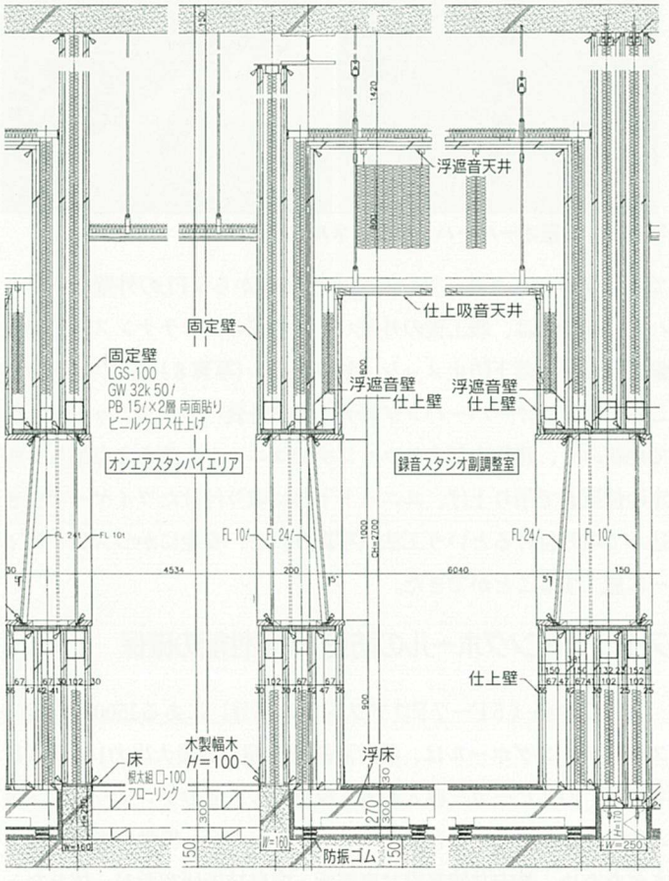


図3　エフエム大阪の録音スタジオ断面詳細

エフエム大阪スタジオ遮音・防振性能の確保

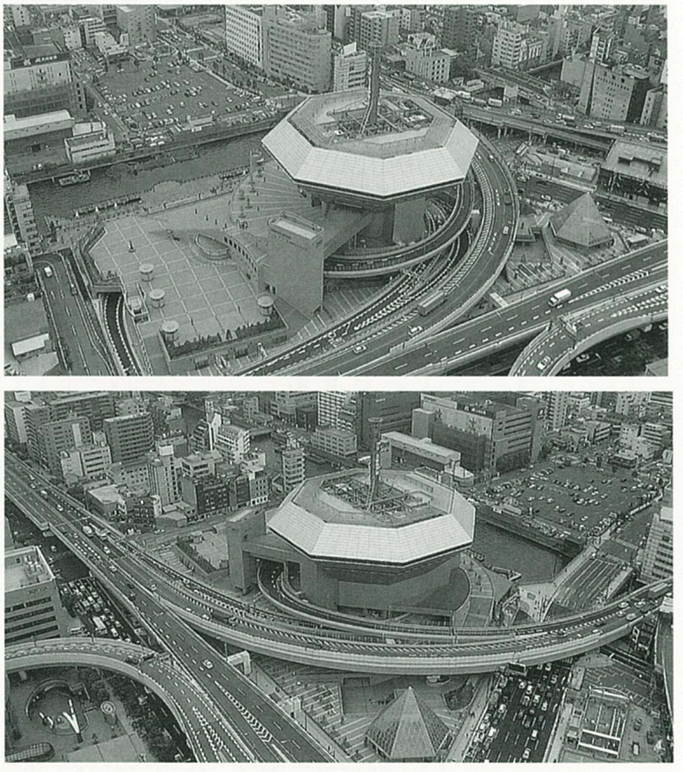
施工途中に本棟6・7Fのテナントにエフエム大阪が入居することとなり、7Fには録音スタジオやオンエアスタジオの設置が決まった。録音スタジオに関しては*NC*−15という静けさの要求に対し、下階のスタンディングホールからの騒音、阪神高速道路・地下函体・地下鉄等からの騒音・振動対策なども考慮する必要があった。これには、設計図で示された浮床・浮壁・浮天井・建具回りのディテールの施工上の検討（図3）、浮取り合い部すべてにおける絶縁確認など各工程での徹底した施工管理、中間時および完了時に振動・音響測定を行うことにより遮音性能・防振性能の確認を行い、固体伝播音の発生がないことを確認した。

最終測定で7Fスタジオは*NC*−12を確保することができた。

おわりに

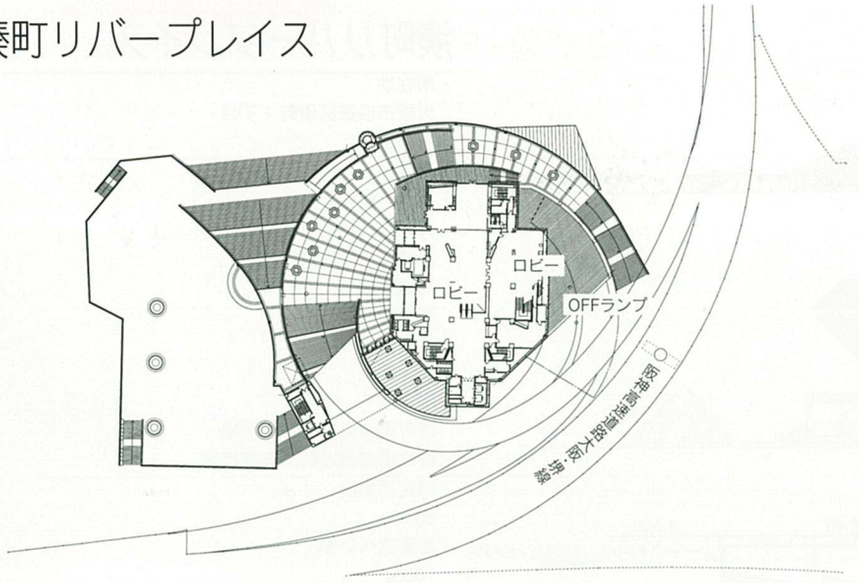
当工事は多岐にわたる設計・施工面での難しさが多い建物であった。このプロジェクトをやり遂げるために、施主の大阪市、基本・実施設計・監理の大阪市・㈱安井建築設計事務所と施工者が相互信頼を構築し、三者一体となってリバープレイスおよびその周辺・関連工事を完遂すべく総力をあげて工事を進めてきた。

その結果、この難工事も2002年3月末に竣工し、7月半ばには音楽ホール（なんばHatch）の柿落としも盛大に行われる予定になっている。これも施主・設計の方をはじめ各関係者の方々の適切なご指導・ご協力のたまものであり、心から感謝いたします。

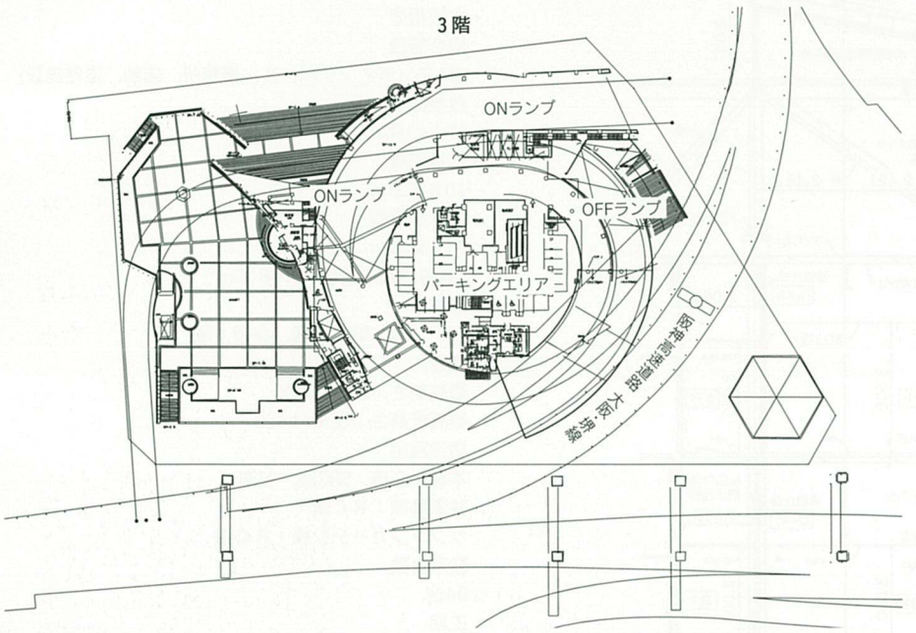


（ごとう　ゆきみつ・たむら　けんすけ・わだ　あきひろ
鹿島・前田・中林特定建設工事共同企業体　所長/副所長/課長）

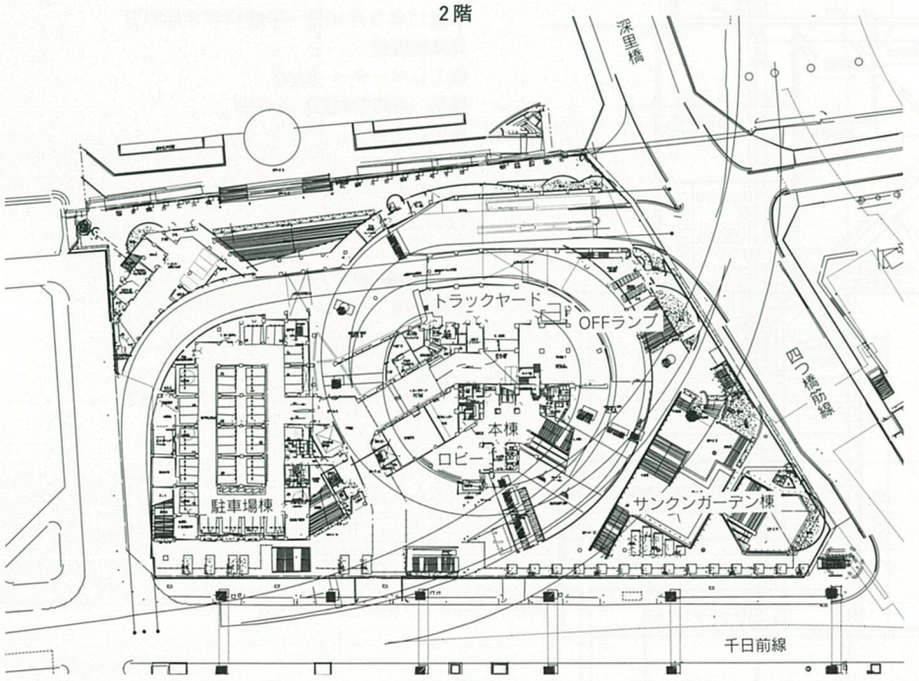
湊町リバープレイス



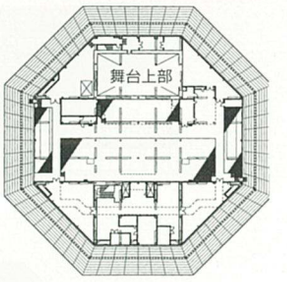
3階



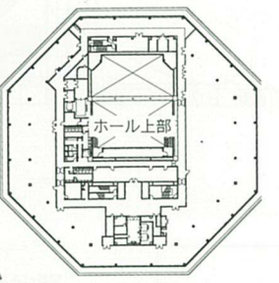
2階



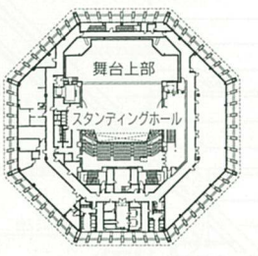
1階



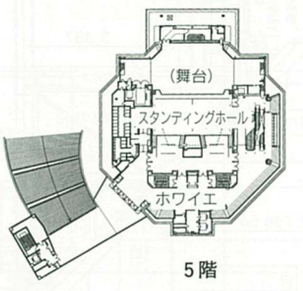
屋上階



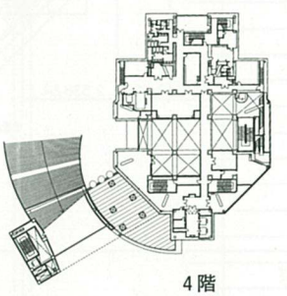
7階



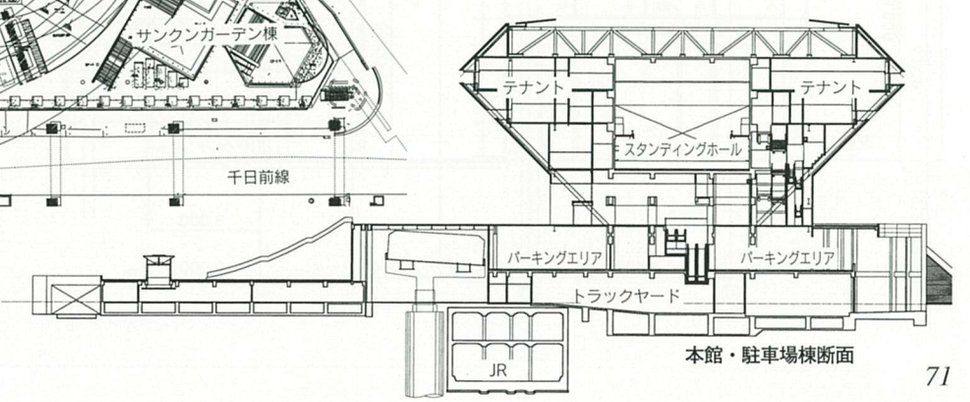
6階



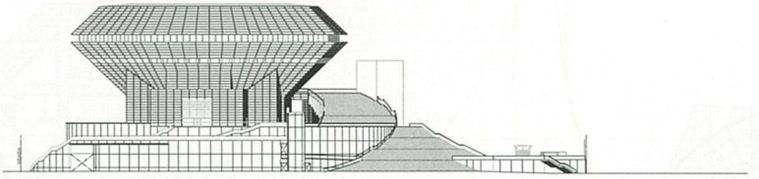
5階



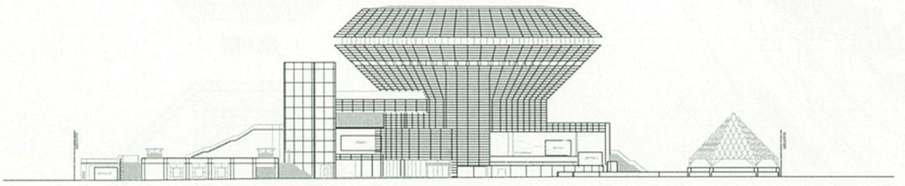
4階



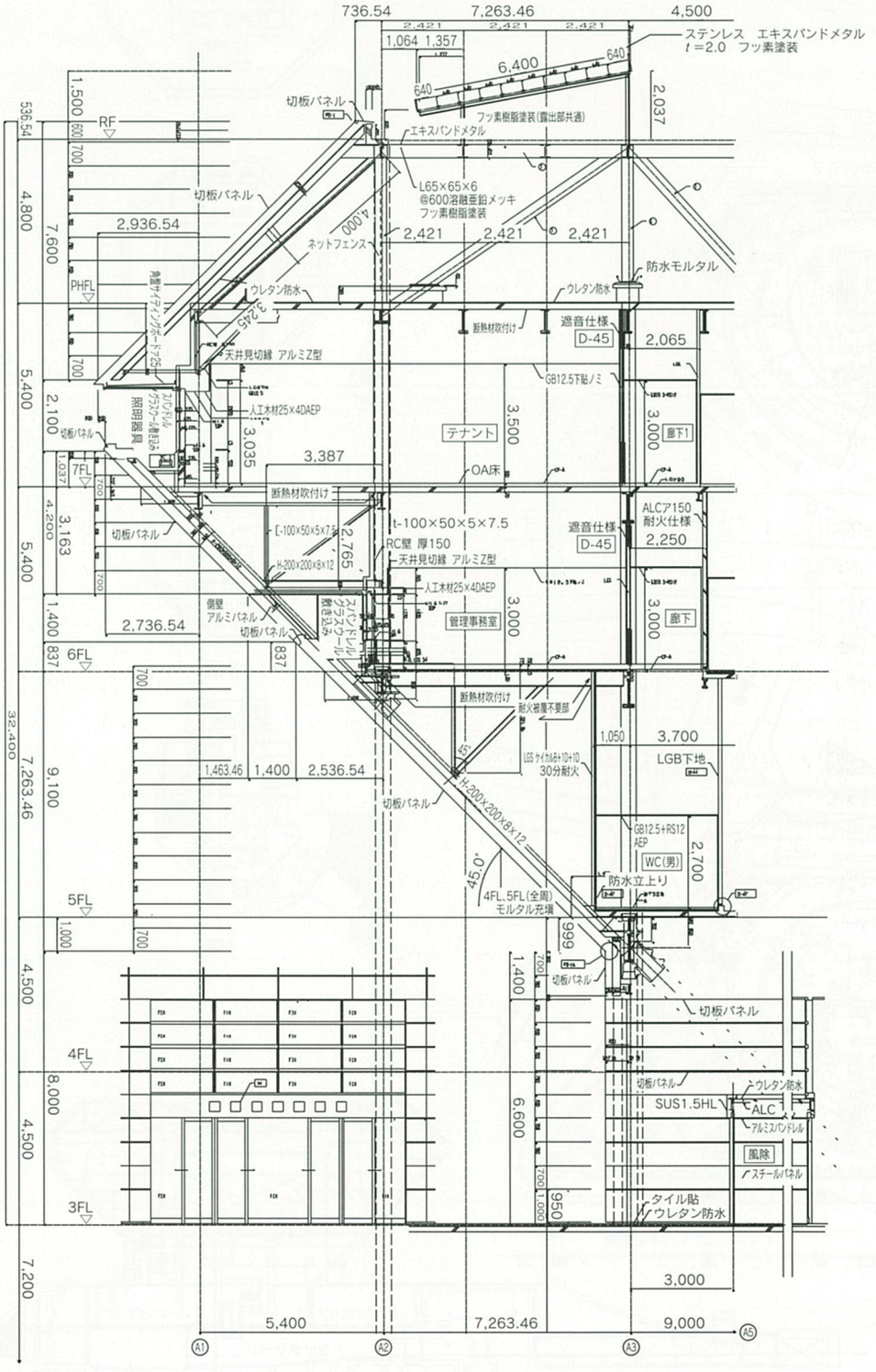
本館・駐車場棟断面



北側立面図



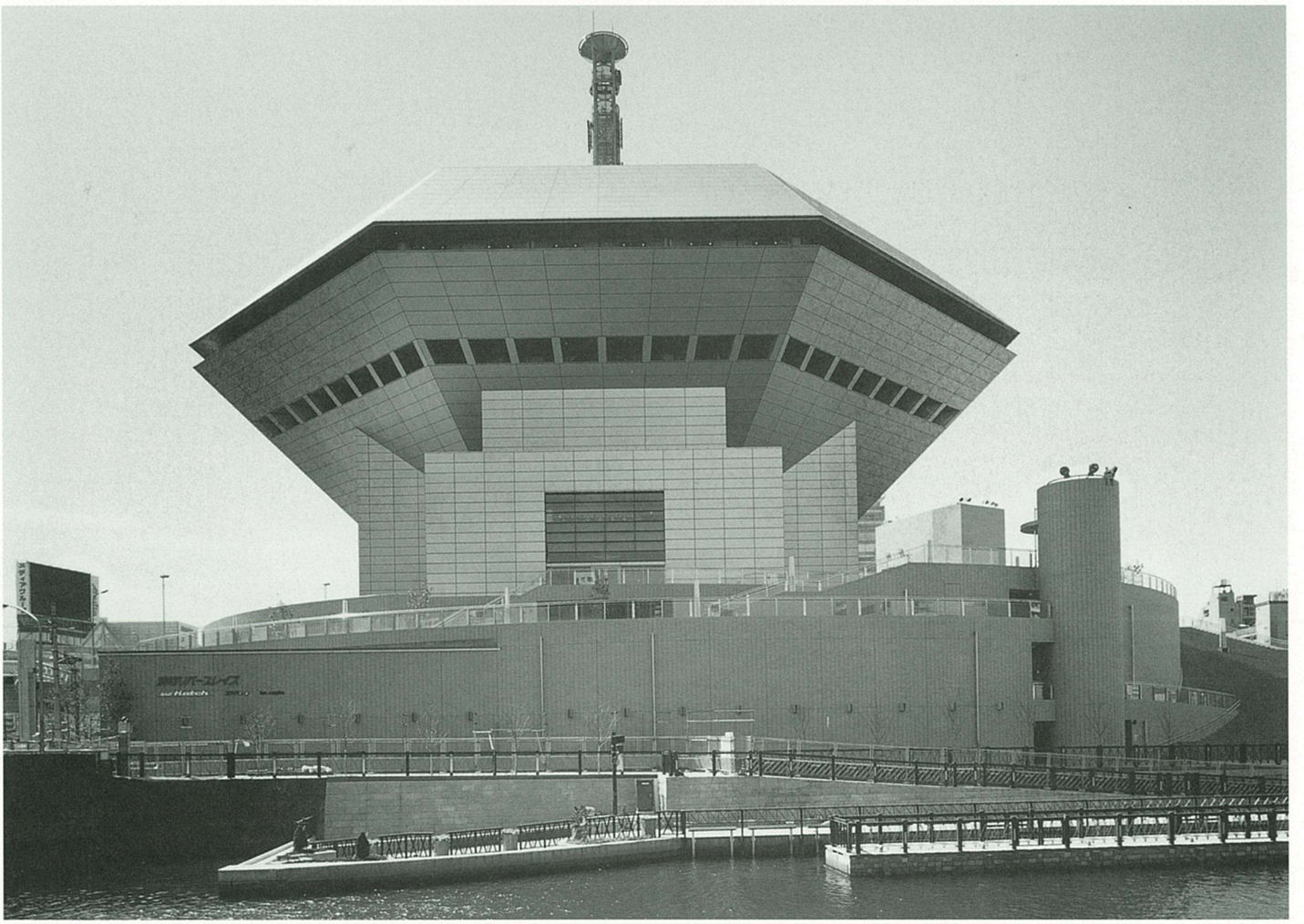
南側立面図



湊町リバープレイス

・所在地
大阪市浪速区湊町１丁目
・建築主
大阪市
・設計・監理
大阪市住宅局営繕部企画課
安井建築設計事務所
・用途地域
商業地域
・防火指定
防火地域
・その他
湊町再開発地区計画地域
駐車場整備地区、高度地区
・指定容積率
600%
・基準建ぺい率
100%
・主要用途
複合施設
（スタンディングホール、事務所、店舗、道路施設）
・敷地面積
16,249.92m^2
・建築面積
10,849.80m^2
・延べ床面積
21,240.89m^2
（容積対象床面積18,166.35m^2）
・階数
地下２階、地上７階、棟屋１階
・高さ
最高高さ：GL+44.900
最高軒高さ：GL+44.463
・構造種別
本棟：Ｓ造、SRC造、RC造
駐車場棟：ＲＣ造
サンクンガーデン棟：ＲＣ造
・駐車台数
64台
・工期
平成11年３月16日～平成14年３月31日
・昇降機設備
■エレベーター（ELV）
乗用（身障者対応）：５台
乗用：２台
荷物用：１台
■エスカレーター（ESC）
1200型：８台
800型：３台
・大型搬送機設備：１台
揚程距離：3.87m
荷重制限：３t

湊町リバープレイス



建築工事共同企業体

鹿島建設株式会社

前田建設工業株式会社

中林建設株式会社

湊町リバープレイス



□空調設備工事（その1）

三機工業株式会社

□空調設備工事（その2）

協和建設工業株式会社

□電気設備工事共同企業体（その1）

株式会社 九電工

関電興業株式会社

□電気設備工事共同企業体（その2）

SUN TEC 株式会社 サンテック

近畿工業株式会社

□衛生設備工事

日立プラント

□舞台音響設備工事

Victor・JVC

□昇降機設備工事

FUJITEC フジテック株式会社

□チタンカーテンウォール工事

OKUJU スペース クリエイター 株式会社 オクジュー

□家具・備品・什器一式工事

KOKUYO コクヨ株式会社

□TMトラス工事

太陽工業株式会社

□スタンディングホール防振遮音
・エフエム大阪スタジオ工事

日東紡音響エンジニアリング株式会社

□カーテンウォール・金属製建具工事

三和シヤッター工業グループ S.Tajima ARCHITECTURAL METALS 三和タジマ株式会社

高品質で限りない前進を

協和建設工業は、半世紀以上にわたり空気調和・衛生設備をとおして快適な生活空間を創造して世の中に貢献してまいりました。これからも確かで優れた技術と卓越した品質管理によって、最善のサービスを提供しつづけてまいります。

空気調和設備・給排水衛生設備・消防設備

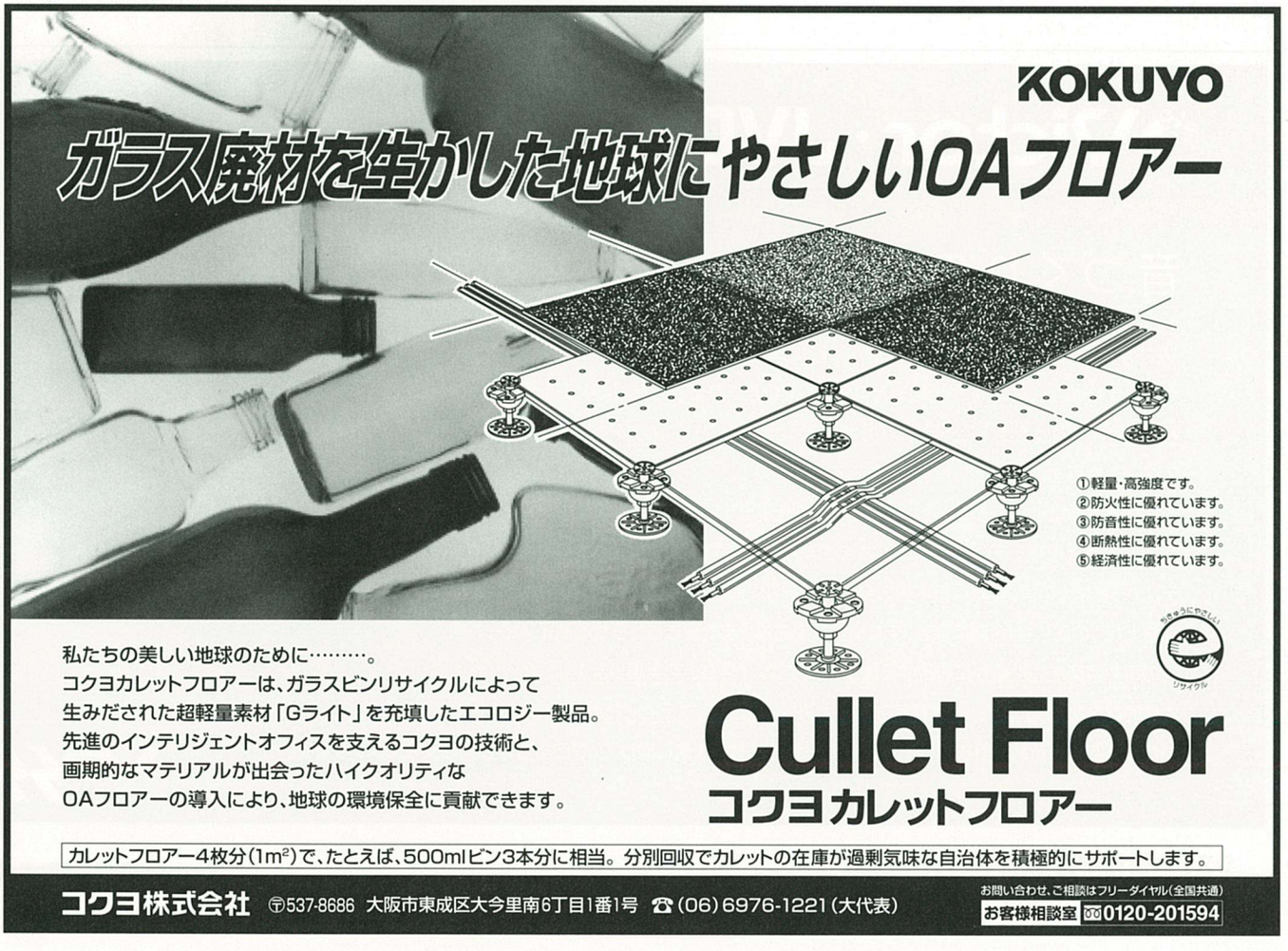
協和建設工業株式会社

本社　東京都豊島区東池袋２丁目１番11号　TEL 03（3984）9231（代表）

支　店　東京・大阪・九州・札幌・仙台

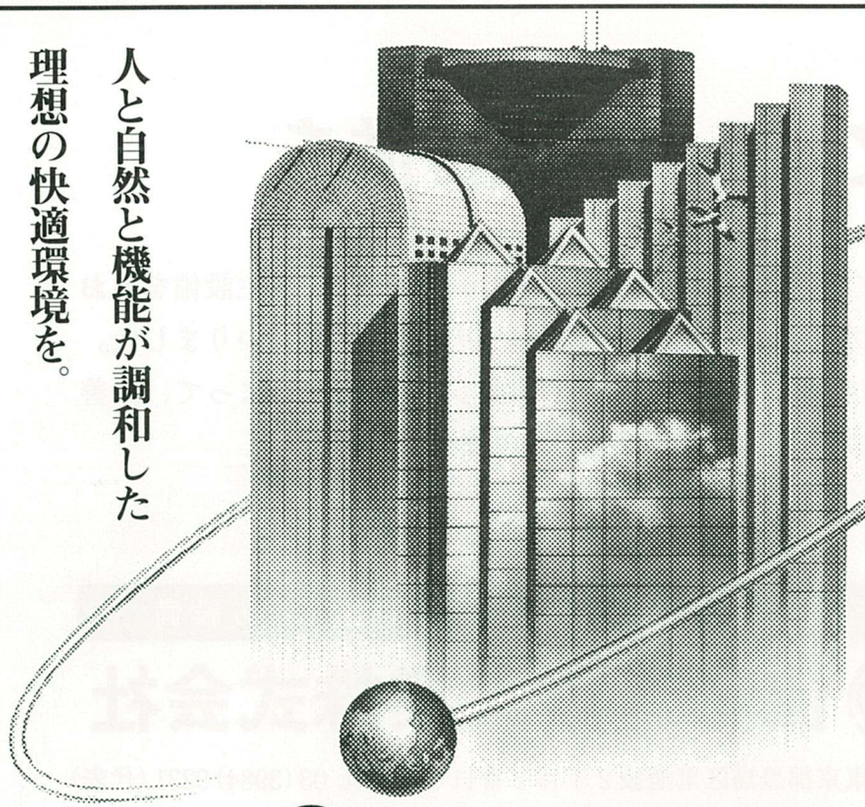
営業所　千葉・横浜・埼玉・神戸・北九州・沖縄・函館

出張所　吹田・長崎・熊本・宮崎・鹿児島



快適創造

人と自然と機能が調和した
理想の快適環境を。



三機工業株式会社

関西支店：〒532-0003 大阪市淀川区宮原3-4-30 ☎06-6350-8100

Victor・JVC

音づくりのあるべき姿を求めて

プロ・オーディオにとっていい音とはなんでしょうか。
ややもすれば、パワーと耐久力の追及に終始していたこれまでの音づくりの時代は終わりました。
新しい時代に向けて変化し続けるプロ・オーディオにとって、必須の条件となるのが、
スペースや用途にフィットした音づくりです。
多様なディファレンスを計算しつくして音づくりを演出することこそが、プロ・オーディオには求められています。
VOSSの設計思想とテクノロジーは、さまざまなプロの課題に応え、音づくりのあるべき姿を求めてきました。
デリケートな人の声、複雑な日本語の発音体系を深く追及する中から生まれたVOSSの音づくりは、
立ち上がりの美しさ、余韻の深さ、また小音量でも遠くまで響きわたらせるハイスピード感、
人の声や音楽を個性豊かに表現する暖かいハイファイ性などを実現します。
本格的なコンサートホール、体育館などの大スペースから、ブティック、飲食店などの小スペースまで、
いかなる空間の音響設計においても、VOSSは、さらなる未来に向けて、プロたちの技術を支えてまいります。

VOSS

システム営業本部 西日本システム支店
〒543-0028 大阪市天王寺区小橋町10番16号 TEL.06-6768-5356 FAX.06-6768-5359 URL:http://www.jvc-victor.co.jp/

日本ビクター株式会社

ゆとりと潤いがいっぱいのビル



日立プラント建設は、数多くの空調システムの研究・開発を通じて、ますます複雑化・多様化する環境ニーズにお応えし、ゆとりと潤いのある環境づくりを追求していきたいと考えています。

日立プラント建設

本　　社／　東京都千代田区内神田1－1－14（〒101-0047）☎03－3292－8111
●札幌　011－737－1330　●仙台　022－263－3261　●東京　03－5281－0121
●横浜　045－451－1551　●名古屋　052－261－9331　●大阪　06－6266－1951
●広島　082－249－2460　●福岡　092－262－7600
ホームページ アドレス　http: // www. hitachiplant.hbi.ne.jp

世界で活躍するフジテックのエレベータ・エスカレータ・立体駐車設備

FUJITEC



フジテック株式会社
ホームページアドレス　http://www.fujitec.co.jp

■本　　社／〒567-8510　大阪府茨木市庄1丁目28-10　TEL（0726）22－8151
■東京支社／〒141-8562　東京都品川区大崎1丁目11-2　TEL（03）5740－6002
■大阪支社／〒550-0004　大阪市西区靭本町1丁目7-4　TEL（06）6441－8521

北海道（011）281-1070／東　北（022）222-0271／東関東（043）224-2271／北関東（048）645-0480／横　浜（045）314-5231／名古屋（052）261-6851
北　陸（076）261-5108／京　都（075）231-7144／神　戸（078）391-4795／広　島（082）223-6733／四　国（087）831-0015／九　州（092）281-0045

「建築と社会」誌

特集一覧●1979~2000

大正6年3月に誕生した日本建築協会（当時・関西建築協会）の、機関誌は大正6年9月に「関西建築協会雑誌」と題して創刊された。大正8年に「日本建築協会雑誌」、さらに1年後には「建築と社会」と改題し、今日に至っている。

取り上げてきた特集テーマは下記のとおりで、バックナンバー購入希望は、日本建築協会事務局（TEL 06-6348-0635、FAX 06-6348-0634）まで。販売価格は1200円（送料・消費税含）。

号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1979 vol.60	●転換期の再開発＊	●大阪南港ポートタウン＊	●商業空間＊	●コンクリートのひびわれ	●日影規則＊	●ホテル建築と情報システム	●農村施設の変貌＊	●建築の終局強度の検討	●庄内のまちづくり＊	●80年代のインテリア＊	●第26回青年技術者＊	●建設業の労務事情＊
1980 vol.61	●80年代の都市と建築―まちづくりの歴史と展望	●今後の省エネルギーの趨勢 ●建築金物	●最近の銀行建築 ●安井建築設計事務所作品集	●住宅の耐久性＊	●建築行政と法規＊	●最近の防水工法	●都市景観とアメニティ＊	●屋内体育施設の設備＊	●水ぎわのまちづくり	●今後の外装吹付仕上材＊	●第27回青年技術者 ●転機にたつマンション・集合住宅	●これからの建築設計と新耐震設計法＊
1981 vol.62	●職能論＊	●中国の論文―北京の都市計画＊	●ポートピア'81＊	●台所まわりの計画と設備＊	●シーリング材の知識＊	●災害と法―安全な環境をめざして＊	●都市住宅―住まい手からの発想＊	●建築物と風―デザイナーのために ●日建設計作品集＊	●住宅・都市整備公団―関西における都市整備を中心とした新公団の役割＊	●間仕切壁の性能評価＊	●第28回青年技術者＊	●障害者の暮らしやすい環境と設備
1982 vol.63	●新たな商業空間の展開＊	●省エネルギーと開口部＊	●医療施設―地域医療と設備計画＊	●近畿の地盤と地質＊	●都市景観―まちなみ美観への誘い＊	●大阪市庁舎（第1期）＊	●ホール建築と音＊	●大スパン構造＊	●昭和設計作品集＊	●絵本にみるすまいとまちづくり ●オー・エム・ホテル日航ビル	●第29回青年技術者 ●地方の庁舎建築＊	●風土・空気と人間＊
1983 vol.64	●関西の建築文化を考える	●マイコンの建築への利用	●多様化する運動施設＊	●建築と品質管理	●計画におけるコミュニケーションとプレゼンテーション	●大阪駅とターミナルビル	●維持管理と設備更新	●東海の将来と文化を考える	●オフィス・インテリアの変革	●プレストレスト・鉄筋・コンクリート構造	●第30回青年技術者 ●大阪城国際文化スポーツホール＊	●集合住宅と生活音
1984 vol.65	●21世紀への関西―魅力あるまちづくりを問う	●関西の超高層ビル＊	●ビルのリフレッシュ―内外装補修技術の現状と発展―＊	●建設産業とロボット開発＊	●住環境と法制度	●まちの活性化と商業空間 ●京都駅南口再開発ビル＊	●消防設備のポイント	●みどりとそれをとりまく人々＊	●高齢化社会と生活空間	●床の構工法	●第31回青年技術者 ●ディテールの思想	●光応用システムと建築
1985 vol.66	●大阪湾物語＊	●東海の現在と近未来	●自由様式への道―建築家安井武雄 ●建築物の基礎を考える	●情報化をめぐる建築・都市事情	●ホール―それが生みだす文化―	●建物の表情―最近の外壁材料	●大阪国際見本市新会場	●建築と水の演出 ●神戸研究学園都市	●都市と健康・スポーツ	●接合―人体と建築にみる― ●日建設計作品＊	●村野藤吾の一断章 ●伊勢湾をめぐる東海	●第32回青年技術者
1986 vol.67	●これからの住空間―都市型集合住宅にみる	●屋根―そのデザインと素材	●現代デザイン―ポストモダニズム10年 ●これからの防水工法	●インテリジェントビルの建築・設備計画	●自治体営繕と公共建築	●建築防災と法 ●大阪市庁舎（第2期）	●21世紀の住宅と設備	●開発―その創造的仕掛けの鍵をもとめて― ●ツイン21	●CAD―その応用と展開	●オフィス空間の構成	●第33回青年技術者	●インテリア・イクステンションとリニューアル
1987 vol.68	●入浴物語	●腐食	●創立70周年記念号	●躍動する東海へ	●貯蔵・保管施設 ●大阪府立体育会館	●室内の仕上床	●駅	●行政建築家の可能性	●シティホテルの設備	●宝塚の街づくり＊	●建物と町並みの接点 ●昭和設計作品集	●第34回青年技術者
1988 vol.69	●ホテル物語	●軟弱地盤と基礎 ●文化と伝統―東海からの報告	●設備におけるLCCとリフレッシュ ●東畑建築事務所作品集	●建物の外装リフレッシュ＊	●都心居住	●中国地方の展望とひろしまのまちなみ	●21世紀への照明＊	●制振＊	●超高層住宅を考える	●集合住宅のリフレッシュ＊ ●大阪府営善	●第35回青年技術者 ●800号記念＊	●讀賣テレビ
1989 vol.70	●夢をのせる輸送設備	●リゾート事情 ●竹中工務店創立90周年記念	●色の復権 ●東海の新建築と伝統技術＊	●省力化のための材料・工法	●まちづくりと法	●博覧会とまちづくり	●都市環境創造と設備I	●建築とアート	●構造の省力化 ●鹿島建設大阪支店建築設計部作品集	●都市環境創造と設備II ●ユーザー参加のハウジング	●第36回青年技術者	●最近の博覧会パビリオン
1990 vol.71	●商品化住宅のデザイン＊	●ニュータウン・ルネサンス	●東海の都市景観 ●佐賀市文化会館＊	●スケール感	●プレハブ住宅技術の現在と未来	●国際花と緑の博覧会	●建築家のための設備知識―中規模オフィスビルによるケーススタディー	●高強度化―設計の多様化をめざして―＊	●やわらかな住宅管理・ユーザーの役割	●都市のナイス・プレイス ●兵庫県営繕の歩み	●第37回青年技術者 ●和歌山県の展望と景観＊	●高級感―建物の顔：感性の時代を迎えての外装材
1991 vol.72	●新しい都市空間づくり―I―	●オフィス・プレジャー ●新しい都市空間づくり―II― ●建築の風景	●東海支部復活30周年記念	●大阪東京海上ビルディング	●今、京都 ●建築家のための設備知識―複合商業ビルによるケーススタディー	●建築と土木 ●毎日放送本社ビル ●近畿地方建設局営繕部	●一般号＊	●建築をめぐるトラブルとその解決 ●建設現場のイメージアップ作戦	●空間のアイデンティティ ●きんでん写真集 ●大建設計40周年	●自治体住宅政策への提言 ●大林組創業100年記念	●建築と土木―構造技術の世界― ●第38回青年技術者	●スリムでタフなコンクリート ●21世紀の住まいを考えるシンポジウム
1992 vol.73	●夢物語―人がかわる、まちがかわる―	●こだわりのインテリア ●近畿の郵政建築15年の歩み	●建築とデザイン―東海支部―＊	●建築家のための設備知識―集合高層住宅の設備システム―	●地球環境時代の建築	●街創り、住まい創り―住宅・都市整備公団関西支社10周年―	●木構造を使ってみませんか―集成材による構造―＊	●接着―建築分野への限りなき可能性	●中国地方の町並みと建築家の「語り、夢、作品」＊	●屋台一仮設の魅力に学ぶ― ●ハウジングのメインストリームを探る	●いま建築教育に何が期待されているか	●京のかたちと色
1993 vol.74	●第39回青年技術者 ●東畑建築事務所創立60周年記念作品集	●大阪府営繕	●東海の美術館・博物館	●市民劇場の舞台設備	●環境―限りある自然と建築とのかかわり	●都市のスカイライン	●映画の中のインテリア ●けいはんなプラザ・住友ホール	●建築の再生―構造技術の役割― ●大阪市営繕	●国際的パートナーシップの可能性	●福祉のまちづくり	●都市型住宅再考	●第40回青年技術者 ●環境―人にやさしい空間創造をめざして
1994 vol.75	●コピー文化の新時代 ●広島の街創りアジア競技大会	●九州のインスタレーションと翼	●伊勢・神宮式年遷宮と神宮界隈＊	●建築のエネルギーシステム	●明日に向かって―会員作品＊	●いま、医療施設は	●住空間における居どころへの視点	●まちなかの看板 ●竹中工務店の集合住宅	●水と建築 ●日本建築総合試験所	●建築設備のCGシミュレーション ●村野、森建築事務所	●構造美―建築の中の美 ●集合住宅団地リニューアル	●第41回青年技術者 ●関西国際空港
1995 vol.76	●光がつくる風合の世界＊	●音―騒音から操音/創音へ	●飛騨・美濃―まちの活性化と地方文化＊	●トイレから見た都市文化	●トイレ空間	●接合 ●コスモタワー	●ユニバーサルデザインとは	●私の空間作法―会員作品	●新しい「都市・建築」の視点＊	●建築構造と社会の接点 ●日建設計＊	●ライフラインと建築設備＊	●第42回青年技術者 ●滋賀県建築課
1996 vol.77	●阪神大震災から学ぶ＊	●大阪府住宅供給公社創立30周年記念＊	●遠江―その地方振興と文化＊	●立体駐車場設備 ●大建設計	●災害！非常時に生きる法体系 ●OAPタワーズ	●いま、プールがおもしろい	●住まいの未来像	●マルチメディアがつくる世界	●キーコンセプトの新時代	●最新の大規模スポーツ競技施設の設備	●私の空間作法'96 ●九州の元気 ●りんくうの3作品	●第43回青年技術者 ●近畿地建営繕部
1997 vol.78	●建築のロングライフ化をめざして	●鉄ものがたり＊	●東海支部会員作品 ●金沢・能登―風土・文化とまちなみ・建築＊	●創立80周年記念/建築と私と社会―80人の眼―＊	●木造建築物の伝統技術とその将来	●住む空間の復興―法・制度の運用と新たな展開へ― ●住都公団関西支社	●素材の不思議 ●大阪ドーム	●新エネルギー ●住宅・都市整備公団改革への提言	●クロスワード都市OSAKA＊	●モザイク都市の住むかたち ●昭和設計40周年	●私の空間作法―会員作品―	●第44回青年技術者 ●京都駅ビル
1998 vol.79	●新しいまちづくりの予感 ●東畑建築事務所創立65周年	●Concrete ●九州とわたし、そして建築	●東海支部会員作品 ●信州―諏訪とその周辺―	●街並みの演出―最近の外構材料	●生活環境の安全・安心	●地球環境保全と建築	●心と体を元気にするインテリア	●建築設備―ビルメンテナンスの立場から	●建築への証言'98―21世紀に向けて	●ゆれをとめる―たえる技術からわす技術へ	●私の空間作法 ●2001年の医療施設	●第45回青年技術者 ●駅とともに歩んだ旧西日本の12年
1999 vol.80	●"らしさ"のデザイン ●建築を綾どる小粋なモノの仕掛人	●大阪市都市整備局	●東海支部会員作品'99 ●北信濃―街並み修景と地域文化の再構築	●都市のパブリック	●関西建築界の流れと東畑謙三の足跡をたどる	●大阪城天守閣平成の大改修	●改正建築基準法―まちづくり・すまいづくりへの展開―	●私の目でみた環境問題	●アーバンインテリア―都市空間としてのインテリア	●木とともに	●私の空間作法	●第46回青年技術者
2000 vol.81	●21世紀のデザインの動向を見る ●安井建築設計事務所創業75周年	●中国支部―しまなみ海道と中国地方の街づくり―	●東海支部会員作品2000 ●越中・富山―地域文化の振興と新たな施設づくりの流れ	●こころを癒す環境デザイン	●測る―測定方法と測定結果が意味するもの―	●スケルトン&インフィル	●改正建築基準法―パートII―	●100年後へのメッセージ ●日建設計創業100周年	●来世紀に引き継ぐ―わざ、もの、こころ―	●時間	●私の空間作法―会員作品― ●21世紀の高齢者の居住環境	●第47回青年技術者

＊は欠号

暑中お見舞申し上げます

平成14年盛夏

浅海伸之

浅海電気株式会社 代表取締役社長

〒530-0047 大阪市北区西天満3丁目7番4号　電話06（6362）8711

城口庸平

株式会社 大阪城口研究所　代表取締役会長

〒530-0017　大阪市北区角田町2番15号　電話06（6372）7151代

村石全

株式会社クトクコーポレーション
ミユキ建設株式会社　代表取締役社長

〒556-0021 大阪市浪速区幸町2丁目5番3号　電話06（6568）3671
〒596-0011 工場・岸和田市木材町9番地の3 電話0724（37）2524
〒649-7167 工場・和歌山県伊都郡かつらぎ町移430番地
電話0736（22）7880

名誉会長

市川宏

株式会社　東畑建築事務所 取締役会長

〒541-0044　大阪市中央区伏見町4—4—10　電話06（6202）0391

内藤正克

株式会社　内藤建築設計事務所　相談役会長

〒675-1379 兵庫県小野市上本町240 小野ビル　電話0794（62）4757代
〒675-1362 自宅・兵庫県小野市久保木町1063 電話0794（62）4668

山本貴士

朝陽電気株式会社　代表取締役

〒530-0005 大阪市北区中之島3丁目2番4号　電話06（6385）1361代表
朝日ビルディング内
〒565-0873　自宅・吹田市藤白台4丁目23番8号
電話06（6871）0851

植野知雄

株式会社　寿建築積算事務所　代表取締役

〒542-0083　大阪市中央区東心斎橋1丁目16-29　つるのすビル
電話06（6244）1561代

原田明治

財団法人　大阪住宅センター　理事長

〒542-0081 大阪市中央区南船場4丁目4番3号
御堂筋アーバンライフビル4F
電話06（6253）0071
FAX06（6253）0145

和中勝

株式会社　和中商店　取締役相談役

〒531-0072　大阪市北区豊崎5丁目8番11号
電話06（6371）0731～5
〒150-0031 東京都渋谷区桜丘町11-5　電話03（3464）9723
〒453-0804 名古屋市中村区黄金通3丁目34番地 電話052（481）7338
〒662-0836 自宅・西宮市大畑町10-22　電話0798（67）0386

数井利美

株式会社　西村建築事務所 取締役社長

〒652-0032　神戸市兵庫区荒田町2丁目1-8 楠六パレスビル
電話078（521）0205～0207
〒654-0103　自宅・神戸市須磨区白川台2丁目39－13
電話078（792）5862

真塚達夫

株式会社　東畑建築事務所　取締役社長

〒541-0044 大阪市中央区伏見町 4 — 4 — 10
電話06（6202）0391

木内啓介

西日本建設業保証株式会社　取締役社長

〒550-0012 大阪市西区立売堀2丁目1番2号　電話06（6543）2553

松原満佐子

有限会社　柳々堂　代表取締役

〒550-0003 大阪市西区京町堀1-12-3　電話06（6443）0167～8
FAX 06（6443）1826

此谷浩

株式会社　小西設計　取締役社長

〒550-0012 大阪市西区立売堀1丁目12－16　電話06（6532）4051

三栖邦博

日建設計　取締役社長

〒541-8528 大阪市中央区高麗橋4丁目6番2号　電話06（6203）2361

名誉会長

佐野正一

株式会社 安井建築設計事務所 代表取締役相談役

〒540-0034 大阪市中央区島町2丁目4番7号 電話06（6943）1371代
〒662-0064 自宅・西宮市雲井町4の9　電話0798（72）1569

名誉顧問

薬袋公明

日建設計　名誉会長

〒541-8528 大阪市中央区高麗橋4丁目6番2号 電話06（6203）2361

暑中お見舞申し上げます

平成14年盛夏

設計事務所有志

健康で豊かな生活文化の創造に貢献する

株式会社 A.R.I 建築事務所



代表取締役　建築家
亀井　晃治

■本　社／大阪府大阪市中央区谷町7-3-4-203　〒542-0012
TEL 06-6768-1771 FAX 06-6768-1406
■神戸支店／兵庫県神戸市東灘区本山北町6-17-24

株式会社 伊東建築設計事務所

代表取締役　岡　本　清　彦

〒556-0016 大阪市浪速区元町2丁目12番30号 難波KIビル　電話 大阪 (06) 6646-0161(代)

株式会社 伊藤建築設計事務所

代表取締役会長　織　田　愈　史
代表取締役社長　森　口　雅　文

本社・名古屋事務所　〒460-0002 名古屋市中区丸の内一丁目15番15号（桜通ビル）電話〈052〉222-8611
東京事務所　〒101-0021 東京都千代田区外神田三丁目5番12号（聖公会神田ビル）電話〈03〉5294-6211

URABESEKKEI 株式会社 浦辺設計

URBAN DESIGN & ARCHITECTURE FOR BEAUTIFUL ENVIRONMENT

代表取締役　松　村　慶　三

大阪市北区梅田1丁目12番39号・新阪急ビル　〒530-0001　電話 06 (6341) 1680
岡山事務所　岡山市問屋町26－103　〒700-0977　電話 086 (245) 0090
http : // homepage1. nifty. com / URABE /

株式会社 瀬戸本淳建築研究室 ISO9001

代表取締役　瀬　戸　本　淳

神戸事務所　〒650－0024 神戸市中央区海岸通1丁目1－1神戸郵船ビル　TEL078－333－0138
東京事務所　〒151－0071 東京都渋谷区本町3-39-12新宿ダイカンプラザビジネスタワー　TEL03－5302－0138

株式会社 創美設計

代表取締役　中原英雄

大阪市北区南森町1丁目2番25号 南森町iSビル 〒530-0054 TEL.(06)6312-3001代表

株式会社 大建設計

代表取締役社長　隅谷康彦
取締役 大阪事務所長　髙嶌千年

大阪市西区京町堀1-13-20　電話06(6449)6800(代表)
東京・名古屋・福岡・札幌・仙台・京都・広島・北九州

株式会社 東畑建築事務所

取締役会長　市川宏
取締役社長　真塚達夫

本社・大阪事務所　〒541-0044　大阪市中央区伏見町4-4-10　Tel (06) 6202-0391
http://www.tohata.co.jp
大阪・東京・名古屋・九州

建築・土木の設計監理

日建設計

取締役社長　三栖邦博

大阪	541-8528	大阪市中央区高麗橋4丁目6－2	電話（06）6203-2361
東京	112-8565	東京都文京区後楽2丁目1－3	電話（03）3813-3361
名古屋	460-0008	名古屋市中区栄4丁目15－32	電話（052）261-6131
支所・その他	東北（仙台）・神奈川（横浜）・北陸（富山）・神戸・広島・九州（福岡） シンガポール・上海・台北・ソウル・クアラルンプール		

コストコンサルタント　建築積算・概算・VE　建築積算システム開発

株式会社 日積サーベイ

NISSEKI SURVEY

代表取締役　生島宣幸

本社　〒540-0012 大阪市中央区谷町3丁目1番9号 MG大手前ビル
TEL 06-6944-2755　FAX 06-6944-2390
東京事務所　〒105-0001 東京都港区虎ノ門2丁目6番9号 NH虎ノ門ビル
TEL 03-5157-5697　FAX 03-5157-5698
http://www.nisseki-survey.co.jp

安井建築設計事務所

代表取締役社長　佐野吉彦

本社　〒540－0034　大阪市中央区島町2－4－7　電話06（6943）1371（代表）
支社　大阪・東京・名古屋・広島・福岡

暑中お見舞申し上げます

平成14年盛夏

建設業有志

人・都市・自然のシンフォニー

Asanuma

株式会社 浅沼組

取締役社長　浅沼健一

本社・大阪本店　大阪市天王寺区東高津町12番6号　電話06(6768)5222
東京本店　東京都新宿区荒木町5番地　電話03(5269)3111
名古屋支店　名古屋市中村区名駅南三丁目3番44号　電話052(571)5571
支店　北海道・東北・横浜・神戸・広島・九州

OBAYASHI

株式会社 大林組

取締役会長　大林芳郎
取締役社長　向笠慎二

東京本社　東京都港区港南2－15－2　電話 03(5769)1111
本店　大阪市中央区北浜東4－33　電話 06(6946)4400
支店　札幌・東北・横浜・北陸・名古屋・神戸・広島・四国・九州

株式会社 奥村組

取締役社長　奥村太加典

本社　〒545-8555 大阪市阿倍野区松崎町二丁目2番2号　電話 大阪(06)6621-1101(代表)
東京本社　〒108-8381 東京都港区芝五丁目6番1号　電話 東京(03)3454-8111(代表)

100年をつくる会社

鹿島

KAJIMA CORPORATION

代表取締役社長　梅田貞夫
専務取締役関西支店長　井保武寿

本社　東京都港区元赤坂 1－2－7　電話 03(3404)3311(大代)
関西支店　大阪市西区阿波座 1－3－15　電話 06(6536)3311(大代)

公成建設

代表取締役社長　絹川治

本社　〒600-8322　京都市下京区五条通西洞院西入　☎075-365-8300
大阪支店　〒531-0072　大阪市北区豊崎2丁目4番3号　☎06-6375-1121
名古屋営業所　〒453-0023　名古屋市中村区若宮町3丁目48　☎052-471-1223

人がつくる、人の場所。

SHIMIZU CORPORATION

清水建設

取締役社長　野村哲也
専務執行役員関西事業本部長　増島修二

本　　社　東京都港区芝浦１－２－３　電話 03(5441)1111
関西事業本部　大阪市中央区本町３－５－７　電話 06(6263)2800

大地への愛　人間への愛

錢高組

社長　錢高一善

本　　社　大阪市西区西本町2丁目2番11号
なにわ筋ツインズ　ウエスト
大阪 (06) 6531－6431
東京本社　東京都千代田区一番町31番地
東京 (03) 3265－4611
支社・支店　大阪・東京・北海道・東北・北関東・千葉
横浜・北陸・名古屋・神戸・広島・四国・九州
URL　http:// www. zenitaka. co. jp/

TAISEI

大成建設株式会社

社長　葉山莞児
常務 関西支店長　氏原完典

本　　社　東京都新宿区西新宿1丁目25番1号 新宿センタービル　TEL03(3348)1111大代表
関西支店　大阪市中央区南船場1丁目14番10号　TEL06(6265)4504
ホームページ　http : // www. taisei. co. jp/

株式会社 竹中工務店

取締役社長　竹中統一

〒541-0053　大阪市中央区本町4丁目1－13　電話 大阪 (6252) 1201番(代表)

戸田建設株式会社

代表取締役社長　戸田守二
取締役大阪支店長　浜辺鶴志

本　　社　〒104-8388　東京都中央区京橋1丁目7番1号　TEL 東京03(3535)1354
大阪支店　〒550-0005　大阪市西区西本町1丁目13番47号　TEL 大阪06(6531)6095
支　　店　東京・千葉・関東・横浜・神戸・北陸・名古屋・札幌・東北・広島・四国・九州

不動建設株式会社

取締役社長　福田誠

大阪本社　大阪市中央区平野町4丁目2番16号　電話０６（６２０１）９２０３番
東京本社　東京都台東区台東1丁目2番1号　電話０３（３８３７）６００９番
支　　店　北海道・東北・千葉・横浜・北関東・名古屋・神戸・広島・四国・南四国・九州・北九州

望月建設株式会社

代表取締役社長　松村利重

本　社　大阪市北区中崎町2丁目3番12号　〒530-0015　電話 大阪 (6375)2345(代表)

暑中お見舞申し上げます

平成14年盛夏

団体・報道・建材・設備工事有志

社団法人 日本建築協会京都支部

支部長　望月秀祐

〒604-0944　京都市中京区押小路通柳馬場東入 京都建設会館別館 電話075(211)2857·2877

社団法人 日本建築協会中国支部

支部長　古林敏郎

〒730-0042　広島市中区国泰寺町1丁目8－4日興ビル内　TEL 082(244)2111

社団法人 日本建築協会東海支部

支部長　小宮三辰

〒460-0008　名古屋市中区栄4丁目3－26(昭和ビル5階)　電話 052(261)1451

社団法人 日本建築協会和歌山支部

支部長　東野信義

〒640-8045　和歌山市ト半町38番地　建築士会館内　電話 073(423)2562

社団法人 **日本建築材料協会**

会長 柴田藤祐

〒550-0003 大阪市西区京町堀1丁目3番13号辰巳ビル9階 電話06(6443)0345 FAX06(6443)0348
http://www.kenzai.or.jp/

～モノづくりの学校～ 建築 大工 インテリア 設備 土木 ロボット 機械 CAD

学校法人福田学園 OCT大阪工業技術専門学校

1895（明治28）年創立 〒530-0043 大阪市北区天満1－9－27 TEL:06－6352－0091
（地下鉄谷町線・京阪「天満橋」徒歩7分、JR東西線「大阪城北詰」徒歩10分）

URL http：//www. oct. ac. jp E－mail info@oct. ac. jp

〈併設校〉 OCR 大阪リハビリテーション専門学校 （理学療法士 作業療法士 言語聴覚士）
URL http：//www. ocr. ac. jp E－mail info@ocr. ac. jp TEL：06－6354－0091

1955年創業 日報

建設業界でもっとも信頼 読まれている日刊情報紙

株式会社 **建設日報社**

社主 重村一

本社 〒550-0006 大阪市西区江之子島1－7－3 TEL 06(6444)2405－9
別館 〒550-0006 大阪市西区江之子島1－6－2 TEL 06(6444)6431－4

TAJIMA **株式会社タジマ**

東京営業本部 〒101-8577 東京都千代田区岩本町3－11－13 電話(03)5821-7731 FAX(03)3862-5908
大阪営業所 〒550-0003 大阪市西区京町堀 1－10－5 電話(06)6441-5951 FAX(06)6444-2596

マルエス 日新

マルエス印 ▲ ルーフィング ▲ シングル ▲ メルタン21（トーチ工法）

日新工業株式会社 大阪支店

大阪支店長 芳賀邦行

本社営業所 東京都足立区千住東 2－23－4 ☎東京(3882)2424 (代)
大阪支店 大阪市西区新町1丁目12番22号 ☎大阪(6533)3191大代表
出張所 名古屋・広島・福岡・札幌・山形 工場／東京・埼玉・山形

日本アスファルト防水工業 協同組合 関西支部

支部長 棚田肇

大阪市西区新町1丁目12番22号 日新工業株式会社大阪支店内
電話（6533）３１９１大代表

山本窯業化工株式会社

YAMAMOTO YOGYO

代表取締役社長　山　本　泰　通

本　　社　〒564-0051 大阪府吹田市豊津町41-20　TEL(06)6338-8601　FAX(06)6338-8606
大阪営業部　〒564-0051 大阪府吹田市豊津町 8 - 7　TEL(06)6338-8701　FAX(06)6384-0557
支店・営業所　東京・北関東・名古屋・静岡・広島・福岡・仙台／福崎工場

ITEMS
●建物用ドアハンドル
●レバーハンドル
●ケアシステム―ハンドバー
●クロセット+ユニフリード
●ドアストップ―エッセ
●フロアシステム
●消火器収納ケース―アルジャン
●サインシステム―ピクト
●都市景観― ヒューランドスケープ
●キャスタル+メタルアート
●アーキパーツ


大阪ショールーム（アトリエユニオン/大阪）

建設環境金属製品の
UNION 株式会社ユニオン　http://www.artunion.co.jp/
UNION CORPORATION

ISO 9001　ISO 14001

代表取締役　社長　立野純三

■本社 …… 大阪市西区南堀江2-13-22　〒550-0015　℡06(6532)3188　㎠06(6533)3747
■大阪支店 …… 大阪市西区南堀江2-13-22　〒550-0015　℡06(6532)3731　㎠06(6533)2293
■東京支店 …… 東京都江東区白河2-9-5　〒135-0021　℡03(3630)2811　㎠03(3630)2816
■名古屋営業所 …… 名古屋市中川区舟戸町3-20　〒454-0805　℡052(363)5221　㎠052(363)5255
■ショールーム
アトリエユニオン/東京 …… 東京都港区虎ノ門2-3-22　〒105-0001　℡03(3506)1717　㎠03(3506)1718
アトリエユニオン/大阪 …… 大阪市西区南堀江2-13-22　〒550-0015　℡06(6532)8920　㎠06(6533)0224
アトリエユニオン/名古屋 … 名古屋市中川区舟戸町3-20　〒454-0805　℡052(363)5221　㎠052(363)5255

information

第11回BELCA賞決まる

㈳建築・設備維持保全推進協会（BELCA）は、適切な維持保全、また優れた改修を実施した既存建築物のうち、特に優秀な建築物の関係者をロングライフ部門、ベストリフォーム部門に分けて表彰するBELCA賞を毎年実施している。

平成13年第11回BELCA賞には、建築後20年以上経過している建物を対象とする〈ロングライフ部門〉5点、改修により画期的な活性化が図られ1年以上経過した建物を対象とする〈ベストリフォーム部門〉5点が選ばれ、5月13日に都内のホテルで表彰式が挙行された。なお、平成14年度第12回BELCA賞は本年7月12日（金）まで募集中。http://www.belca.or.jpを参照。

●ロングライフ部門5点


▲大阪厚生年金会館
大阪市西区新町1
竣工／1968年
設計／久米設計
施工／竹中工務店
維持管理／大阪厚生年金会館


上高地帝国ホテル
竣工／1977年
長野県南安曇郡安曇村上高地
設計／竹中工務店
施工／竹中工務店
維持管理／帝国ホテル

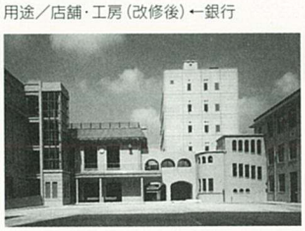

沖縄ハーバービューホテル　竣工／1975年
沖縄県那覇市泉崎2-46
設計／清水建設
施工／清水建設　大林組　國場組
維持管理／沖縄全日空ホテルズ

●ベストリフォーム部門

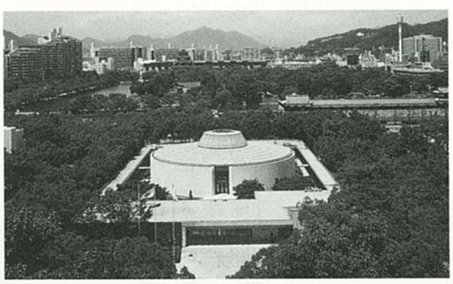

秋田公立美術工芸短期大学・
秋田市立新屋図書館
秋田市新屋大川町12
用途／大学、図書館、大学開放センター（改修後）←食糧倉庫
竣工／1934年

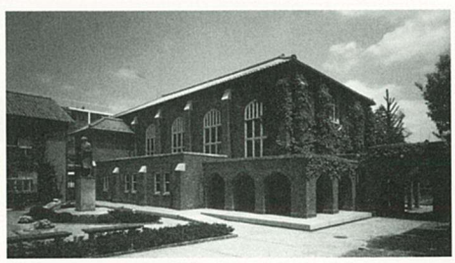

カラコロ工房　竣工／1938年
島根県松江市殿町43
用途／店舗・工房（改修後）←銀行


大和銀行虎ノ門ビル　竣工／1963年
東京都港区西新橋1-6-21
用途／事務所（改修後）←事務所


京都芸術センター　竣工／1931年
京都市中京区室町通蛸薬師下ル
用途／展示・発表・制作・交流施設（改修後）←小学校


フロインドリーブ　竣工／1929年
神戸市中央区生田町4-6
用途／店舗、レストラン（改修後）←教会


ひろしま美術館　竣工／1978年（1980年一部増築）
広島市中区基町3-2
設計／日建設計
施工／清水建設
維持管理／ひろしま美術館

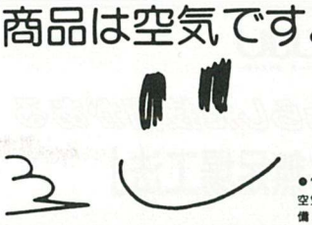

立教学院諸聖徒礼拝堂　竣工／1920年（改修1999年）
東京都豊島区西池袋3-34-1
設計／マーフィー・アンド・ダナ建築事務所、日建設計（改修）
施工／清水建設、大林組（改修）
維持管理／立教大学

空調・衛生・クリーンルーム設備
（設計・施工）

朝日工業社

本社・本店　東京都港区浜松町1-25-7　電話03(3432)5711
大阪支社　大阪市淀川区加島1-58-59　電話06(6302)2270
支　　店　北海道/東北/北関東/横浜/名古屋/中国/九州

商品は空気です。



熱と空気のエンジニア
株式会社
大気社

●営業種目
空気調和設備　給排水衛生設備　塗装設備　公害防止関連設備の設計・製作・施工

本社・東京本店　東京都新宿区西新宿2-6-1　☎03—3344—1851(大代)　大阪本社☎06—6448—3603(代)
大阪支社　☎06—6448—5851(代)　名古屋支店　☎052—211—1535(代)　中国支店　☎082—247—5541
九州支店　☎092—431—2147(代)　営業所：北関東・横浜・神戸・京都・岡山・四国

電気・空調・衛生・防災・産業廃水設備
設　計　施　工

ダイダン株式会社

本店・大阪本社　〒550-0002 大阪市西区江戸堀1丁目9番25号　電話(06)6441-8231
東京本社　〒102-0071 東京都千代田区富士見２丁目15番10号　電話(03)3261-8231
支　　社　名古屋・福岡
支　　店　札幌・仙台・新潟・大宮・千葉・横浜・金沢・京都・神戸・天理・岡山・広島・高松・熊本
営業所　帯広・函館・青森・秋田・盛岡・前橋・長野・静岡・豊田・津・富山・福井・徳山・松山・高知・北九州・鹿児島・那覇
出張所　旭川・福島・川崎・松江・徳島・下関・長崎・大分・宮崎
海外支店　シンガポール・ホンコン
技術研究所　〒354-0044 埼玉県入間郡三芳町大字北永井390番地　電話(0492)58-1511

より快適な水環境をめざして
給排水衛生設備，冷暖房設備，消火設備の設計，施工

株式会社 西原衛生工業所 大阪本店

大阪本店　〒531-0071 大阪市北区中津六丁目8番4号
TEL 06-6458-3628(代表)
本　　社　〒108-0023 東京都港区芝浦三丁目6番18号
TEL 03-3452-7441(代)
支　　店　札幌・東北・新潟・東関東・横浜・名古屋・九州

空気調和設備　産業設備
給排水設備　水処理施設
電気設備　環境施設

三機工業株式会社

取締役社長　宅　清光
常務取締役関西支店長　本木　満

関西支店　大阪市淀川区宮原3-4-30 ニッセイ新大阪ビル　電話 06(6350)8100
本　　社　東京都千代田区有楽町１－４－１　電話 03(3502)6103
支　　店　北海道・東北・関東・千葉・横浜・北陸・名古屋・京都・神戸・四国・中国・九州

人と都市の快適な環境をつくります

営業種目 設計・施工・監理
●電気設備
受変電・幹線
動力・制御装置
電話、放送、インターホン
防犯、防災
中央監視制御
システム計装
●空調・給排水・衛生設備
空気調和
工場配管
水処理
コージェネレーション
クリーンルーム
●プラント
プラント計装
システムエンジニアリング
●情報通信設備
情報通信ネットワーク
情報処理
通信システム
放送システム
●電力流通設備
受変電
架空送配電
地中送配電

きれいな地球にあふれるクリエイティブカンパニーをめざす。
住友電設株式会社
大阪本社 〒550-0011 大阪市西区阿波座2-1-4 ☎(06)6537-3400
東京本社 〒105-0014 東京都港区芝2-2-17 ☎(03)3454-7311

空気調和設備
衛生設備 設計施工

三建設備工業株式會社

大阪支店　大阪市北区紅梅町３番５号　電話(6352)1131(代)
本　　社　東京都中央区日本橋蠣殻町２—22　電話(3667)3431(大代)
支　　社　名古屋・仙台・札幌・広島・福岡・金沢・新潟・横浜

CHOYO

人がいる多彩なフィールドで、
新しい限界に挑戦しています。

電気設備設計施工
朝陽電気株式会社

代表取締役　山本貴士

本　　社　〒530-0005 大阪市北区中之島三丁目 2-4(朝日ビル)
TEL 06(6385)1361(代)　FAX 06(6385)1050

空気調和・衛生設備・設計施工

株式会社 三晃空調

本　　社　大阪市北区西天満3丁目13番20号　電話06-6363-1671
東京本店　東京都新宿区西新宿　新宿住友ビル　電話03-3344-7911
大阪本店　大阪市北区西天満3丁目13番20号　電話06-6363-1371
支　　店　仙台・横浜・名古屋・京都・神戸・広島・福岡

電気設備工事設計施工

東光電気工事株式会社
関　西　支　社

常務取締役支社長　髙橋幸久

大阪市中央区高麗橋４丁目３番７号　電話大阪(6202)0325～9番
本　　社　東京都千代田区西神田１丁目４番５号
支　　社　北海道・東北・丸ノ内・新宿・神奈川・東関東・北関東・中部・九州

空調衛生・冷凍冷蔵・地盤凍結
よりよき環境へ技術で挑む

株式会社精研

本　　社　大阪市中央区瓦屋町２丁目11番16号(オートセンタービル1・2階)
〒542-0066 電話 大阪（06）6768－5031代表
メンテナンス　電話　大阪（06）6768－1651代表
東京支社　東京都文京区小石川１丁目12番14号(日本生命小石川ビル７階)
〒112-0002　電話（03）5689－2351代表

電気設備設計施工

株式会社 三興社

代表取締役社長　上田正雄

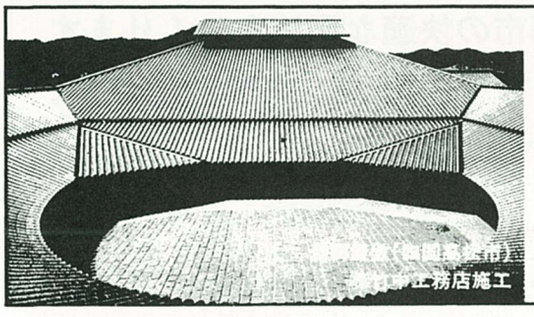
本　　社　大阪市中央区北浜3－6－13（日土地淀屋橋ビル）
電　話　06（6205）3671（代）
支　　店　東京都中央区日本橋茅場町2丁目17番3号
電　話　03（3666）1478（代）
営業所　堺・泉州・泉南・滋賀

OKUJU
スペース クリエイター
建築に革命をもたらした技術がある
「大規模天井無足場工法」
内外装創作パネル・システム天井・間仕切
株式会社 オクジュー
本社
大阪市北区西天満5丁目3番7号 〒530-0047
TEL(06)6312-4131 FAX(06)6312-7998
東京・九州・横浜・南九州・名古屋・上海

学校建築のトータルアドバイザー
二葉工業株式会社
黒板・掲示板・家具
電動黒板装置・サイン・スクリーン
〒547-0001 大阪市平野区加美北3—4—5
TEL06(6792)5858 FAX06(6792)2810

＊奉仕感謝の店
タイル及び規格石一式施工
株式会社 川岸窯業商店
本社 大阪市西区西本町1の13の33
TEL.06—6532—0641(代表)
FAX.06—6535—5181
天理営業所 天理市丹波市新町4 9

●情報処理●企画・制作●編集●画像処理●印刷・製本
人と技術をクリエイティヴで結びます
日本データネット株式会社
本社 〒530-0043 大阪市北区天満1-1-10 TEL.06-6352-7502 FAX.06-6355-2714
制作部 〒530-0043 大阪市北区天満1-9-19 TEL.06-6352-0943 FAX.06-6355-5533
印刷工場 〒530-0043 大阪市北区天満2-5-15 TEL./FAX.06-6352-1551


〒556-0024
ナニワ瓦株式会社
あらゆる屋根工事の相談は、
大阪市浪速区塩草一丁目二番三号
☎ ファックス 六五六一〜七四五四
六五六一〜七四一六

Digital Pri-Press
AOBA PRINTING CO.,LTD.,
代表取締役社長 依藤孝行
青葉印刷株式会社
〒534-0027 大阪市都島区中野町2丁目10番11号
Phone.06-6351-5428 Fax.06-6351-5299

デンカCSAファミリー製品
●デンカCSA（膨張性混和材） コンクリートのひびわれ防止に
●デンカタスコン（グラウト用無収縮材） 鉄骨ベース、逆打部の充填モルタルに
●デンカキューテックス（止水・補修用急硬セメント） コンクリート躯体の漏水補修に
●デンカES（土質安定用急硬材） 地盤補強用薬注入
●デンカΣ1000（製品用超高度混和材） コンクリートパイルの早期出荷とハイモメント製造用に
電気化学工業株式会社
近畿地区販売店
浜宗産業株式会社
TEL 本社・京都・綱野（07727）2−2220
舞鶴（0773）76−0133
金森藤平商事株式会社
TEL 大阪（06）6332−6861
TEL 東京（03）3272−8501
小浦産業株式会社
TEL 大阪（06）6443−6181
光洋物産株式会社
TEL 大阪（06）6252−6000
東郷化成株式会社
TEL 滋賀・守山（0775）83−2381
TEL 大阪（06）6877−1581



「日本建築協会80年史1917-1996」

増刷頒布中　頒価　3,000円

1999年７月に発刊した「日本建築協会80年史1917-1996」は、各方面から好評をいただいておりますが、このたび、皆様の強いご要望により、増刷・頒布することにいたしました。大正６年３月30日に関西建築協会として誕生した日本建築協会の80年の歴史を、様々な事業や委員会活動を通じて、また、本会設立者の片岡安、武田五一以降現在までの会員たちの社会活動を通して知ることができる記念誌として、A4判・240頁にまとめています。

とくに、協会草創期の大正・昭和初期の片岡安ら協会のメンバーと当時の大阪市長・関　一との交流を物語る一文は、大阪の都市計画史、あるいは関西の建築人物誌ともなっています。本会の歴史を知るだけでなく、建築を通して、それぞれの時代の雰囲気を身近に感じることができる大変貴重な資料となるものです。

購入ご希望のかたは、下記要領でお申し込み下さい。

＊

申 込 先　社団法人 日本建築協会
〒530-0001　大阪市北区梅田1-1-3-2100
TEL 06-6348-0635　FAX 06-6348-0634

頒　　価　１部3,000円（税・送料込み）

※増刷部数には限りがございますので、お早めにお申し込み下さい。

「日本建築協会80年史」

A4判・240頁・並製本

●日本建築協会の沿革／委員会活動／「建築と社会」の変遷／大正時代から現在までの本会主催の博覧会・展覧会・講演会／よろず相談住宅展／青年建築家・青年技術者顕彰／工高生デザインコンクール入選者etc.

●日本建築協会創立者と会を支えた38人のプロフィール（片岡　安・設楽貞雄・武田五一・池田　實・波江悌夫・竹腰健造・尾崎久助・東畑謙三・塚本猛次・福田朝生・佐野正一・葛野壯一郎・横濱　勉・松本禹象・宗　兵蔵・園部文雄・日高　胖・野村一郎・古宇田　實・松室重光・松井貴太郎・安井武雄・中澤誠一郎・坂　静雄・今林彦太郎・井上新二・松本儀八・池田宮彦・錢高輝之・中西六郎・大林芳郎・鴻池藤一・伊東五郎・竹中錬一・鷲尾健三・松村雄吉・横尾義貫・足立　孝）

●座談会「戦中から戦後初期の協会活動」―尾亀清四郎・大林芳郎・小西　岬・佐野正一・横尾義貫・三品哲夫の6氏による終戦前後の協会活動の証言―

＊

■執筆ワーキンググループ
坂本勝比古／安達英俊／石田潤一郎／植松清志／梅宮弘光／桐浴邦夫／酒井一光／橋寺知子／山形政昭／吉田高子／和田康由

■80年史編纂委員会
長谷部朝郎／安達英俊／近藤達夫／谷淳之介／十倉　毅／原見昌志／和田康由／吉田悦二



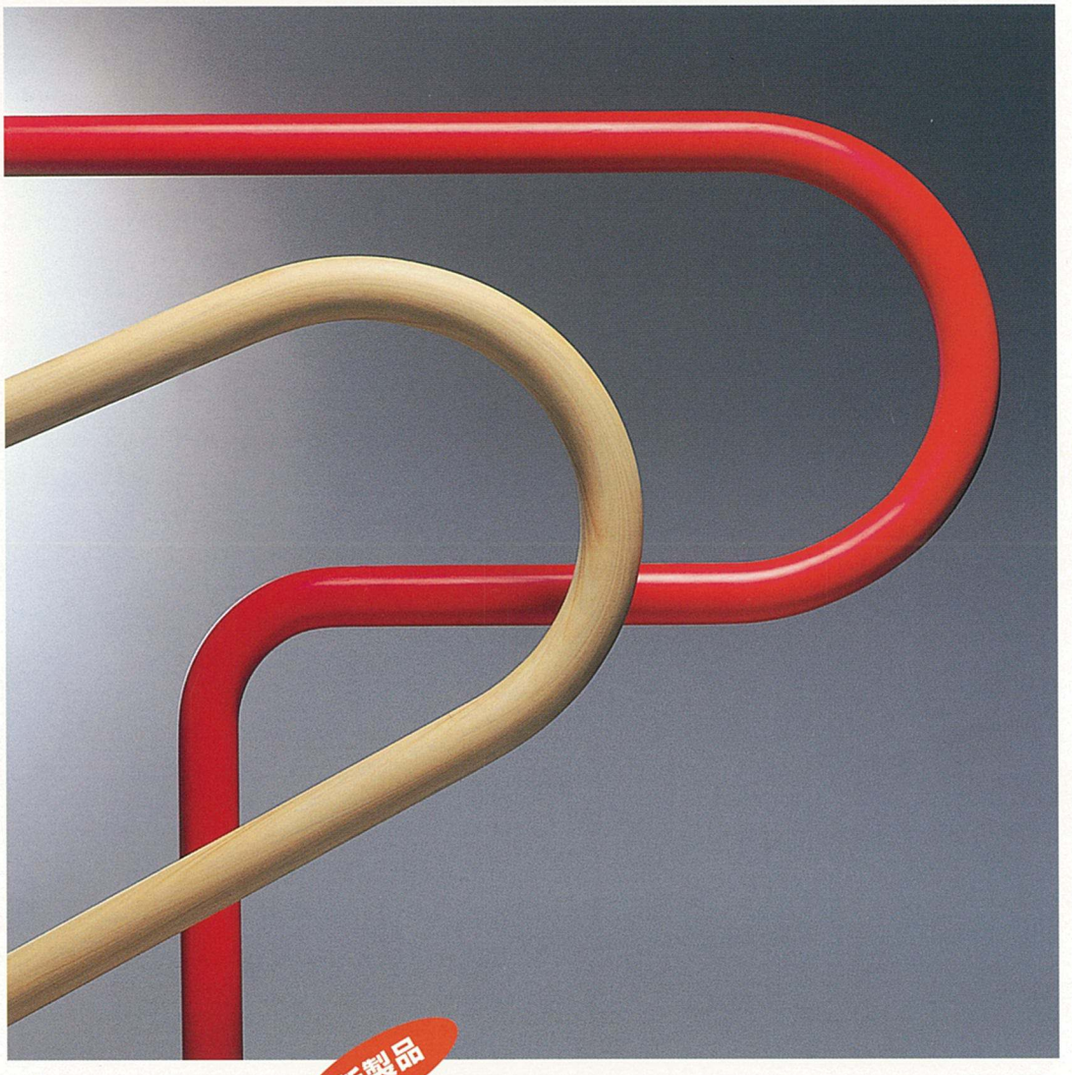
「日本建築協会の遺産と功績」（坂本勝比古）より



「草創期の人々」より片岡安の項

YM-Beautiful

21世紀は環境共生の時代、地球に優しい、人に優しい
快適・美空間創造を目指して、
建築空間をBeautiful
地球や人にBeautiful



新製品

可視光線に反応!

光触媒入り手すり

自然光や蛍光灯の光で汚れ、悪臭成分を分解する
「光触媒入り手すり」を当社独自の技術で新開発。
高品質で従来品と同価格という経済性も実現!!
医療福祉施設、学校、共同住宅など、
環境に配慮した製品として注目を集めています。

ワイエム工業株式会社

〒547-0005 大阪市平野区加美西1丁目9番7号 TEL(06)6795-5353 FAX(06)6792-1695

札幌 TEL(011)711-8411 FAX(011)711-8413 / 旭川 TEL(0166)29-6717 FAX(0166)29-6718 / 仙台 TEL(022)238-7782 FAX(022)238-7783 / 盛岡 TEL(019)665-1751 FAX(019)665-1752
東京 TEL(03)3643-1409 FAX(03)3643-1706 / 横浜 TEL(045)439-2191 FAX(045)439-2192 / 名古屋 TEL(052)622-8278 FAX(052)622-8288 / 京都 TEL(075)611-6159 FAX(075)611-7086
大阪 TEL(06)6792-1350 FAX(06)6792-1698 / 広島 TEL(082)291-1323 FAX(082)291-2287 / 福岡 TEL(092)622-1436 FAX(092)611-5285 / 鹿児島 TEL(0995)43-1578 FAX(0995)42-7709

http://www2.osk.3web.ne.jp/~ymkougyo

お問い合わせ・カタログのご請求は上記まで

Vol.83 通巻956号 2002年7月1日発行 毎月1回1日発行 昭和24年3月19日第3種郵便物認可 ISSN 0912-8182

社団法人 日本建築協会 〒530-0014 大阪市北区梅田1-6-6-2-100 電話大阪06(6348)0635 FAX06(6348)0694 振替口座00970-1-43134

定価1,200円(本体1,143円+消費税57円)(送料共) 正会員の購読料は会費に含めて徴収

雑誌 03379-7